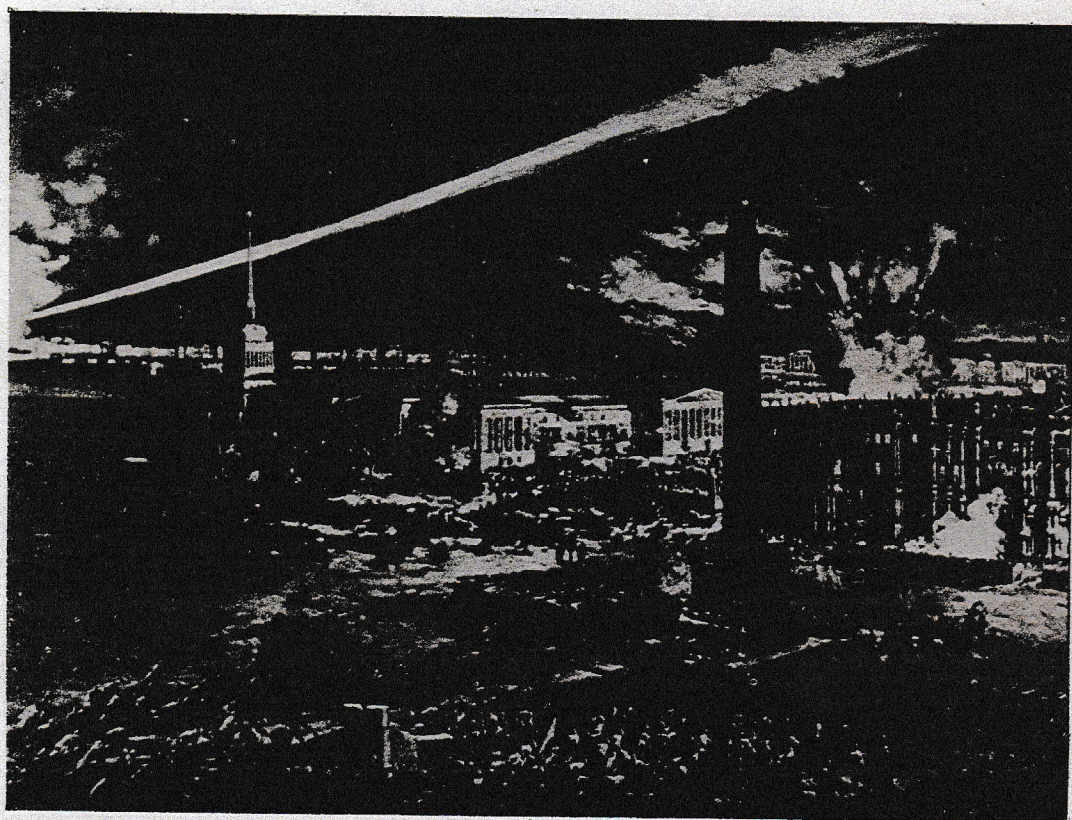


ボルシェヴィキ

創刊準備号

共産主義者同盟政治理論誌



- 遠方派グループに対する同盟からの革命的武器の批判 沖田友士
- 〈党-大政同〉路線の理論的基礎-長崎『叛乱論』『政治的共同性の構造』
——唯物史観・共産主義と綱領問題—— 山下 誠

共産主義者同盟游撃編集委員会

1975.
7.20

ボルシェヴィキ

創刊準備号 改訂第2版

1976.6.25

目 次

- 遠方派グループに対する同盟からの革命的武器の批判 沖田友士 5
- <党一大政同>路線の理論的基礎—長崎『叛乱論』、『政治的共同性の構造』の内的解体とその地平 山下誠 50

共産主義者同盟游撃編集委員会

はじめに

全国の革命的同志諸君！全ての労働者諸君！
「産下者同盟」「遊撃編集委員会」は、『ボルシェヴィキ創刊準備号』を全国の革命的同志諸君におとけする。『創刊準備号』は日誌においても明らかなく、旧再建準備委の思想的・実践的解決の中心の問題に据え、そのことを媒介としてわれわれの精神的な「綱領―組織―戦術」の総体を理論的に展開したものである。

したがってここに発表する二論文は、それぞれ個人名で発表されたものであるが、個人の思想的営為の表現ではなく、一全総以降の組織的実践の成果であり、その綱領的な深化であることは、こととわるまでもないことであろう。たとえば、われわれは「私党―大政同論」に対する批判をすて自からの実践として対象化してきているのは、党そのものの存在根拠をマルクス主義と唯物史観におき、レーニン党組織の経験に学び、私党―大政同論に対しては、職業革命家の党を労働者革命家の組織である労働同との分離と結合において具体的に建設しつつあるし、また「七五労表」および「旧部学活」を労働者、学生の大衆闘争機関へと改編し、党の戦闘陣型を新々として強化しつつあることがこのことを如実に語っている。

しかしながら重要なのは、こうした転換が、天下りのレーニン組織論のあてはめや、マルクス・レーニン主義の綱領とその原則問題の外在的な復権として行なわれたことにあるのではなく、そうした党的実践そのものの対象化を、党組織の現時的、動態的であり方そのものとして獲得しつつ、行なわれたことである。したがってそれは、旧再建準備委の解体、止揚の過程として存在しつつ、同時にそれは共産主義者同盟として一全総以降の諸闘争における教

訓とそれに対する組織的なとりくみの厳密な総括をふまえて獲得されたものであったのである。それは、また、共産主義者同盟再建準備委員会が、第二次ブントの系譜をひく以上、より根底的には、第二次ブントそのものの総括の問題を内包しており、そうしたブント一五年の歴史の総括の問題としても同時に進行したのであった。

したがって、ここに発表する二論文は、一方では、「遠方派」の位相を批判すること、対象化することを通して、一方では、われわれ自身の歴史的過程、つまりは、日共↓第一次ブント↓第二次ブント↓旧再建委総括の上に存在するものである。具体的にいうとこの二論文は理論機関誌『ボルシェヴィキ』創刊号のために執筆された論文と「遊撃」七号における沖田氏の『遠方派』批判の続編よりなっているが、共に問題とするところは同一であり、こうした我々の課題を鮮明にするものであることはいうまでもない。

したがって、ここに発表する二論文は、一方では、「遠方派」の位相を批判すること、対象化することを通して、一方では、われわれ自身の歴史的過程、つまりは、日共↓第一次ブント↓第二次ブント↓旧再建委総括の上に存在するものである。具体的にいうとこの二論文は理論機関誌『ボルシェヴィキ』創刊号のために執筆された論文と「遊撃」七号における沖田氏の『遠方派』批判の続編よりなっているが、共に問題とするところは同一であり、こうした我々の課題を鮮明にするものであることはいうまでもない。

沖田友士論文は主要には、遠方派、及びII号の正木論文に対するわれわれの反批判を同盟の組織的営為との関連で「党の発想とはなにか」（旧同盟論文集）と長崎前衛党論を問題にすることによって、レーニン組織思想の根幹を明らかにしたものであり、かつまた、山下誠論文は主要には長崎浩の長崎の革新派総括にもとづく思想的営為を唯物史観・マルクス主義思想との関連でとりあげ「叛乱論」

「政治的共同性の構造」の内的解体を企ると同時に唯物史観の復権を行なおうとしたものである。

両論文を精読してもらえれば、わかることではあるが、われわれと旧再建準備委の関係を概略的にいうならば次のようにいえることができる。

われわれと遠方派との分岐を決定的なものとしたのが、「山口武

秀」批判問題であったことはいうまでもない。この山口武秀批判問題は、すでに「遊撃」において触れているように、革命党派の根底にかかわるものであった。つまり、「ブルジョア政治に屈服し、階級利害を売り渡すのか」「それとも、革命的翼による指導と同盟の再建設か」といった問題として提起されたのである。こうした革命的左翼の原則の復活そのものという原則的視点から、われわれは逆に、旧再建準備委員会の指導そのものを全面的に再検討せねばならなかった。このことは、高浜入問題に帰結した旧再建準備委多数派の政治理論とはなだたのかという形で提起されるを得なかつた。しかし、しかもまたそうした彼らの指導を放棄してきたものとしてわれわれ自身の主体的総括として存在したことはいうまでもない。したがって、党―大政同論の総括、遠方派に対するわれわれの批判は、単に彼らに対する批判としてのみ存在するのではなく、われわれ自身の自己批判としても存在することはいうまでもない。しかも、われわれは、そうした痛苦な自己批判を単に観念的な自己批判としてではなく、自己批判そのものを革命的な党建設として対象化してきたのである。

したがって、それは、単に実践的過程において現われた旧再建準備委の路線批判というだけのものにとどまるのではなく、再建準備委をつらぬいていた組織体質、綱領問題の全面にわたった批判（自己批判）として展開されねばならないものであった。山下同志が、主に長崎浩名で『情況誌』に発表された「叛乱論」「結社と技術」「政治的共同性の存立構造」の三論文を問題として批判を展開せざるを得ないことにそのことは何れよりもよく象徴されている。

つまり、旧再建準備委のイデオロギー的基礎を根底から批判する

さらけにいうならば、こうした理論的諸問題における組織問題に対するとらえ方そのものの根本的止揚がわれわれの課題だったといえる。われわれはすでに「綱領―組織―戦術」という問題を提起しているが、組織の問題は単に抽象的・一般的な組織の問題として存在し

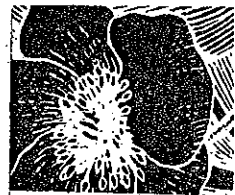
ているのではない。理論問題が党建設に不可分に結合した、ひきつけたものとして全同盟における組織営為として獲得されていくものとして措定されるのではなく、つまりは、政治局の党としてその階級的基礎、すなわち、プロレタリア階級とその先進的部分との思想的・実践的営為と切りはなされ、したがって組織的実践的問題ともきりはなされていく組織思想そのものの止揚として問題を立てたのである。

われわれは、そうした点を対自化した上で、党をプロレタリア階級の上に基礎づけつつ、レーニン組織論に学び、自己の基準を明確化させつつ、階級闘争の最先端において闘ってきた。そしてまた、理論的・思想的にいうならば、こうした「遠方派」的思想そのものが、第一次ブンド―第二次ブンドをつらぬく、ブンド思想に内在していた一つの傾向であるのは衆知の事実であり、われわれはその現象面へブルジョアへの屈服への解体にとどまらず根底的解体―止揚を通して、第一次―第二次ブンドを止揚する回路を明らかにしつつあると確信する。

最後に、『ボルシェヴィキ』創刊号は、すでに宣伝にもある通り、こうした根底的視座をより豊富化し、定式化するものとして準備されているが、われわれの思想的・組織的前進を、歴史的に提起するという意味において、まずは旧再建準備委の「解体止揚」の過程で、われわれが獲得した基本的視座を明らかにし、創刊を準備号とする

ことに至った。本準備号とともに創刊号が、日本の、ひいては全世界の階級闘争の武器となり、階級闘争の鉄鎖の中できたえ上げられ、プロレタリア独裁への道を前進させるであろうことを同志諸君に訴えておきたい。

共産主義者同盟游撃編集委員会



Wir (haben) fanden
je Illusionen der deutsche
entriert* (gefunden*),
er getreulichst* akzept
aben (die Keckheit)
wesen* sind*, wenn die
erb* 19-22 verhimme
lie Menschen unter) (ma
hen Verhältnissen (ma

遠方派グループ対する同盟からの 革命的武器の批判

沖田友士

第一章 遠方から二号の正木論文（我々の政治的立場）のやつ

あたりの批判の低俗性と無思想性

第二章 同盟の政治的立場からの正木論文に対する根底的批判

第三章 「党の発想とは何か」との関連におけるレーニン組織

の歪みと党―大政同論路線の誤謬

第四章 「党の発想」における理論的基礎としての長崎叛乱論

の根本的批判

第五章 長崎私党論の党―大衆主客対立図式とレーニン組織思

想の主体的歪曲

第六章 正木論文における長崎私党論のエビゾーネンとしての

位相と珍発明

第七章 長崎前衛党論Ⅱ：正木論文のレーニン「なにをなすべきか」

の一知半解性による同盟に対する揶揄的批判の破綻

5 8 11 18 27 35 42

第一章 遠方から二号の正木論文（我々の政治的立場）のやつあたりの批判の低俗性と無思想性

「遠方から」の二号において、「我々の政治的立場」というタイトルの付した正木論文は、主要には杉山批判という形態を通して、我が同盟への誹謗中傷を心情吐露的に書き殴っている。このような低水準の政治暴露文に対して、具体的事実関係その過程に到るまでこんせつていねいに反証、反論を挙げる程のサービスピットを残念ながらわれわれは持ち合せていない。しかし、どのような無内容な批判であれ全く無視することはまた許されない。つまり「帝國主義との闘争は、もし日和見主義に対する闘争と不可分に結合されてい

いなら、空虚で偽りの空文句に過ぎない」というレーニンの権力闘争と党派闘争の一体的展開という視座に立脚して、昨今の遠方からグループの主張と政治内容の小ブルの中間主義、日和見主義の本性をより一層あばき出すことも我が同盟の階級的責務の一つであるという把握と視点に立つならば、一定の見解を提示しておく必要はあるだろう。

今日に至っては、我が同盟と遠方グループとを直接比較するならば、現下の階級闘争に果している役割に、天と地との差があることはもはや明白な事実である。このことは革命的諸党派、諸勢力に対する一定の規定力という点に限定しても明白なことである。したがって、「遠方」にせられたような三文評論の発表は彼ら遠方グループのその存在根拠を、その貧困さを証明することにしかならないのは衆目の一致するところである。もし彼らがかかる無内容の批判をもつて、我が同盟の内的動揺を画策せんと願望しているのであれば、それは全くの「無償の行為」であることを忠告しておかねばならない。我々はすでに、8・5一全総の革命的精神の立場を踏まえ、更に同盟二全総を組織督為として獲得し、旧再建委の党（私党）―大政同路線の解体止揚を、同盟の綱領―組織―戦術の血肉化として、すなわち党建設の第二期として獲得した。より具体的にいうならば、党の改組、整風を通じた指導部建設と細胞建設（地区労政同、学生細胞）および、昨年の末の破防法と闘う会の結成を獲得し、その中軸を我が同盟が担い、かつ、3・2ウニタ弾圧―破防法弾圧の拡大

単なる「継承発展」ではなく、第二次ブンドの分派闘争、再分裂に規定されている旧再建委の部分性を突破し、具体的普遍的地平へと到達し、新たな革命的同志を含めて形成して来たのだ。かかる不動の指導の確信こそ、我々の今日的団結の基礎であるのだ。我々のこうした痛苦な道程など彼ら遠方グループのサロン左翼諸君には到底理解しがたいことであろう。

とくに正木氏はこのことに全く無自覚である。そうであるが故に我々を旧再建委の延長上の存在として意識することによって、その立場で批判せんと必死になっている。が、そうではなく、まず正木氏は、何よりも今回の分派闘争―党派闘争に於ける自からの組織的日和見主義的及びその中間主義的立場から招いた冷酷な結果、その主体的敗北を強引に陰蔽し、自ら良識ある大人と演出することによって、自己満着に陥っていることを痛苦に自己批判すべきなのだ。そのことを抜きにして、分派闘争以降、約一年近くなる今日になって再び過去の水準へ党派闘争をひきもどそうなどは、全くの主観的願望といわねばならない。とはいえ、彼の見解を批判することは今日の時点においてはこうした発想が生み出されてくる内的根拠を切開するという意味において、それは我々にとっても反面教師的役割を持つと同時に、また彼らにとっても自己の階級本質が何であるか鮮明にさせる意味で必要なことだろう。

したがってここでその点にそくして若干明らかにすることにしよう。まず第一に昨年の分派闘争がその基本的性格において、非和解

と闘う集会を領導し、その成果の上に4・19集会をして圧倒的に成功させたのである。そして本格的に地区破闘会の大衆的建設に着手している。また昨年の第三回全労文集会、更にフォード闘争を契機に生起した七四労実委、都学活における分岐の政治的質を主体化し、その血の教訓を、権力闘争における党の戦闘の陣型の形成として結実させてきた。それは大衆的権力闘争、党派闘争を具体的に担う潮流の形成―現実化であり、遠方グループの「私事としての評論活動」とは実践的に雲泥の差をもっている。遠方グループの実践は、いかならば「川崎幸」病院の利害に基づく川崎市役所（自治体）との医療行政との関連で、社会党の〇〇候補支援の市議会選挙を「幸」病院の患者さんを票田としての活動を行ってきたということと、茨城県知事選に於ける東風出版社石川次郎（無所属）―地方党結成準備会推薦の選挙応援といった頂のものでしかない。

我が同盟は昨年の党内分派闘争以降、自己批判―相互批判、更なる団結の作風の確立を基礎に、全党的政治討論の組織化と対象実践活動に於ける組織思想の内実化を通して、党に対する責任の鮮明化を命がけの主体的飛躍として獲得してきたのであり、このことは自からの階級的責務の上で彼らの実践とは重大な差異を呈している。その過程において我々は旧再建委が色濃く宿していたところのその思想的・組織体質としての政治的投機主義的傾向や、情況派政治と称されてきた政治の中の広さ一般にすべて解消して行く傾向を総括し克服してきたのである。まさしく同盟の政治的立場は旧再建委の

的対立として存在したこと、すなわち、分派へと到る過程で自らが準備してきた政治的本質に無神経であるということが、何よりも正木氏の悲劇の出発点であったのだ。つまり今回の分派闘争の直接的発火点としてあった「山口武秀批判」、すなわち「高浜入闘争」を巡る問題の対立は、決して一般的に路線上の対立として顕在化したものではないところに根本的問題が秘められていたのである。そこにおいては山口武秀氏の指導路線を批判するのかが、しないのかと云う具合に、きわめて保守主義的に問題がたてられたということではなく、「批判」することを通して何を獲得するのかが問われていたのである。これが一切の分岐を決断させる直接の契機であったのだ。この点に関してはすでに「游撃」三号の山下論文に於いて明らかにしてあるので詳細にわたり触れることはしない。が最底限押えておかねばならないことは、旧再建委に所屬していた同志であれば周知の如く、山口武秀の大衆闘争路線は、ROT機関誌紙上においても「又大政同路線の提起にあたっては、『我々の『大政同論』の見本である』という程過大に評価されていたということである。だが、それにもかかわらず、火野本人氏が東風社の出向社員となつてから一挙的に武秀批判が公然と開始されたという事実は一切を物語っているのである。

我々は山口武秀氏の高浜入闘争の路線を無条件に擁護することを主張したことはない。我々が主張した点は「運動総体の具体的発展段階と同盟の組織戦術との関係において、直接に山口武秀氏の闘争

路線批判を行うことは、高浜入闘争の後退をもたすだけであり、仮に批判を展開するとしたら、具体的闘争の戦術展開とそれへの主体的かかわりの中で批判すべきである。」ということであつた。この問題に関して正木氏は、全て杉山同志のデマゴギーによるストーリー演出に同盟総体が引きまわされてしまったという次元でしか問題が杉山氏であり、それはひとえに彼の勝手な推理と思ひ込みによるものだというのである。そしてその裏付けのために正木氏は歴史的事実をあれこれとおこなっている。が、どう考えてみても、これでは余りにも話が出来すぎているとは誰しもが直感的に感じるであろう。少なくとも第二次ブンドの系譜を踏む一党派の分派が何の内的根拠もなく成立するはずがそもそもありえるはずがない。もしかかする分派が成立するならば、それはスターリン主義以下の彼らの好むナチのファシズム政治でも導入しない限り、その論拠を主張しえないのである。だが、かかる形で分派された主張し、歴史的事実をあれこれおこなつて、あくまで自らの階級の本質を陰蔽しようとする意図こそ彼らのファシストの本質を証明している。

彼ら遠方グループは「大人の政治」を口先では唱え、旧来の階級闘争の構図の常識の解体を語り、実践的にはその指導を具体的に貫徹せず、常に責任を持たない位置に逃げ込み、他人の土俵で相撲とることばかりに専念していたのだ。これがまさしく社会的良識ある「大人」の政治の内実である。彼ら自身の招いた指導の責任には一

切ふれず、ただその結果の事態に悲しみ、不明をはじるといふ演出を行なっているのである。そしてその夜間飛行は新左翼グッドバイ路線を掲げて、死んだふりをしてみせたが、とことん死に切ることには思想的価値観を見出すほど、根性もパトスもない。それ故に遠方から一号においては火野本人以外が死んだふりのポーズをとりつつも、アリバイ的予防線として雑誌「東風」に於いて彼らが好んで嫌う左翼芸能界の主役としてキャンペーンをおこなつたわけである。しかし我が同盟「遊撃」三号に於ける「ブルジョア政治への屈服の道、遠方への旅立ち祝して」という彼らへの批判を読み、「自民党」と同位相で扱われることは余りにもひどすぎると、自己嫌惡的悲鳴をあげ、日がたつにつれていらだちの度は、ますます高まり、何としても泥試合に持ちこまねばと決意して開示されたのが今回の正木論文の政治的位置であるのだ。

正木氏は杉山同志との一五年來の党友関係における引きさかれた感情を、病院の理事長であり、かつ医師である職業的規定性から思いついた手法で、精神分析風に杉山同志に対してあれやこれやと政治意味付与することにより批判が成立しているつもりになっている。だが、これも何の核心をついてパンチ力はなく、自己のとりこされた、遅れた位相からの批判でしかないのである。

第二章 同盟の政治的立場からの正木論文 に対する根底的批判

旧PB多数派(篠田-東風Vの「高浜入闘争」をテコとして打ち出され、党財政の物質基礎の獲得、「党の骨格」路線は、全国各地に於ける東風支社建設とだき合わせた全国各地の支部建設プランである。それはその理論的基礎、背景としての長崎前衛党論(私党)の完成と三身一体的に打ちだされたものであつた。したがつてそれは、その党的立脚点及びその思想的体質までに立ち入り、その根拠を切開することを抜きにしては、その革命的解決、止揚を見出すことが困難な問題として存在したのである。彼らに対しわずかの妥協も譲歩も許すことは同盟の解体と死をもたらすことになるという、

きわめて正しい革命的危機意識をわれわれの自らの主体の危機として受けとめたのだ。したがつて我々は当初から全党内闘争を系統的にかつ大胆に、党の中央集権化構想の具体的展開のもとに於いて展開したのである。それは旧再建委のフランクの前史の位相がその地平まで到達していなかつたことの自己批判的総括を明らかにすることによつて行われたのだ。しかもそれは革命的分派の結成として、党内分派闘争-党派闘争を組織に持ちこまれた階級闘争としてとらえ返しつつ行なわれた。もはや解決はただ一つあるのみ。分裂以外にない。くされきつた同盟を立て直すにはそれ以外の方法はない。」という発想に秘そむ、単純別党コースの解党主義的傾向を克服し、党の改組を基礎に、単一党の建設の獲得を目指し、旧再建委において一つの傾向としてあつた、算術的結合によるブンド再建方式、かつての「統一」ブンドのな限界性を根底的に止揚するものとして党

内分派闘争-党派闘争を基本的戦術として確定しつつ行われたのである。このことを実現しなければ、きたるべき本格的権力闘争を担い闘いとすることはできないという視念に立脚するがゆえに、我々は革命的分岐を一点の曇りもなく決断、決意したのであつた。

しかも我々は旧PB多数派を単なる指導の崩壊として位置付けることなく、「革命的翼としての指導とその建設が」、「ブルジョア政治に屈服し、階級利害を売り渡す指導とその指導部、それに追隨する部分との指導か」という分裂として能動的に位置付け、何が同盟を組織的、思想的危機に追いこみ、また変質させようとしているのかを鋭く見ぬき、死活をかけた分派闘争を通し、勝利的前進に導いてきたのである。以上の如くもはやブンドの赤い血を一滴も持ち合わせていない左翼ブローカーに転身した「遠方」グループの走資的腐敗分子に対する我々の革命的党の精神の立場こそ8・5一全総の主体的位置であつたのである。これに対してPB多数派は、自ら私党的側面を自己純化させ、長崎同盟CC解散文章、S氏のK氏への手紙(SET66の内容)更に旧同盟議長(松本礼二)の同盟指導権のセン議路線と正木氏の情況誌(武秀批判の原稿をのせることが問題が解決する道であると最後通牒的恫喝等の多様な戦術を駆使して、我々との対決を回避することを通して、我々の内的自動崩壊を恣意的に期待することに延命の途を託したのである。この様なかたすかし路線の操作は、全く自らの指導の責任を果たすという党と階級に対する共有性の「かけらもなく、この無責任な「大人の政治」

こそまじったくのマジョリティー政治でしかないことはや自明である。更に正木氏は今度我が同盟に対して身勝手な主観的思い込みを行なってきたのである。すなわち当初は、「あと半年、何とか持つてくれる様に願う」と公然と発言していたのであるが、そして一方で種々の同志に対する中傷を行ない、同盟に対して分裂幻想を期待していたのであるが、しかしそれも結局は自分達のなぐさめでしかなく、我が同盟は半年どころか増々強固に打ちきつたえられ、強化されていくという革命的現実の前にその彼の思い込みの幻想がより確実に破産したことに気がつくや、一転して無内容に我が同盟に對し敵対と粉砕のおたけびをやっきになつてあげていたのである。そして今ごろ何んで遠方からなのかと云うことを必死になつて政治的意味付与を行なつていると云うことをみればその事が端的に表示されているのである。更に、彼らが好んで嫌う新左翼芸能界体質云々は、「読書新聞」のコラムにのつた「遠方から」の批評がよほど気に入らなくて、あれこれと批判していることをみても大人の政治の終末路は明らかである。

さて何よりも正木氏の混乱の原因は、我々を旧来の様に大政同様に於ける同盟の大衆的実践活動家のレベルとして把握しているところにあるのだと云うことをあえてこゝで指摘しておくことにする。こゝで再度要約すれば、8・5一全総の革命的党の精神の立場は、現在においても根本的に貫かれていたのである。何よりも我々が当初根本的に問題にしたのは、無規定な私党論、その思想的背景になつ

の革命的解答があつたのだ。

この党と階級における共有の原則とレーニンがのべている「信頼できない部分と共同の闘いを組織することを恐れることは、自から信頼出来ないことと云うことである」と云うことはまったく違ひ位相の問題であることはまずもつて明確にしておかなければならぬのだ。何故ならば遠方グループの諸君はレーニン主義を政治技術としてきわめて歪曲して把握しているのである。我々が結成した新党の基準は、まずもつて自らの党的主体としての組織思想の内実化として対象実践活動を一切の出発の原基形態として創出することであつたのであり、この様な我々の党建設の血の教訓をまったく理解することが出来ない正木氏は、すでに使いつくされた古い言葉であるスターリン組織論への転向等と無内容なレッテル張りを行なつていのである。更に杉山と情況出版と云うタイトルまで付けてあれこれとコジツケ的批判を展開しているが、無内容極まりないのは当然としても、他人のことより我が身のことを考えてみたらどうかと云いたくなる。

昨春秋、擬制的人民病院粉砕と云うスローガンの下に幸病院の第二労組が結成され、その部分の改良的要求をすべて拒否し、第一組合をだきこみ、第二労組メンバーを全員解雇し、その闘いを圧殺し暴約したと云うことをみてもわかるごとくこれが彼らの姿であるのだ。そして神労活においてこれが問題にされ、その闘いの支援共闘を組織することを恐れ、種々の政治工作に奔走していたと云うことは明白な事実であるのだ。たゞけば隠るのであることをまず

ている党の政治こそ決定的に対決しなければならぬものとしてあつたのであり、すなわち帝国主義ブルジョアジーの諸権力機関、そのヘゲモニーに介入することが原則とされた場合、マルクスのフランス革命の三部作の一つである「フランスの内乱」において明らかにされているごとくプロレタリア階級は、旧い国家機構（ブルジョア権力機関）をそのまゝプロレタリア独裁の機関にとつて代えることも、単にすえかえることも出来ない、この様な古い抑圧機構をすべて取り除かねば、プロレタリア人民の権力は樹立できないと云うことであり、ブルジョアジーとその代弁者とその一分派との蜜月として高浜入闘争のブルジョアの集約のために、闘争の弱体化を山口武秀批判をもつて画策し、その代償として資金をあつまり、その資金で党の骨格形成を行なうことがいかなる結果をもたらすかはおのずと明らかである。権力に許容された合法主義的日和見主義派の存在を容認することであるのだ。そのことは単に補完的役割を果すのみならず、究極的にはプロ大衆に敵対するものである。すなわち党建設の問題で権力問題（綱領問題）と階級基礎との関係をまったく捨象することは、ブルジョアジー、及び小ブルジョアジーの別動隊かつファシズム的政治盟約集団に転落する本質が内在化しているのである。我々は彼らの本質が権力問題からの召還主義的解党主義であり、我々はこの様な部分との訣別は、階級の先遣隊としてあらんとするかぎり当然である。我々の目先の小ブルの利害でこの原則の取引に応ずることは、絶対に許しえないのであり、こゝに我々

持つて自覚すべきであることだけを忠告しておく。

以上遠方グループの政治的批判を正木論文の位相を含めて提起したのであるが、「遠方」二号の遠方からの手紙のコラムの中で、咲谷氏が「論争上のどんな泥試合にも応じるといふ政治上の「仁義」をはたすことをぬきに、彼らの将来を評論することは政治集団には許されぬ。この論戦は我々と彼らの性格を将来決めて行くであろう」と提起されているが、誰かに強要され、決意して書いたかは別にしても、この咲谷氏のいきがかりを我々はとりあえず歓迎することにしておく。「遠方」一号では「私党」論はすべてひっこめ、大政同のみを再強調し、新左翼の病理Ⅱ負の側面だけを取り出し、新旧左翼の終焉を掲げ、六〇年後半から七〇年初期にかけての階級闘争の歴史的到達地平とその主体敗北の地平は何であるのかを捨象して、あれこれと評論しているのであるが、遠方から二号においては、より実質的純化をはかり、「新しい国民運動を、日本革命を基礎にすえよ」というタイトルで二大階級の食い逃げ論をモチーフにして提起されている点を踏まえながら、次章に於いて正木論文の同盟に對する組織的批判の低水準とその自己破綻という題名のもとにその内在的批判を展開することにする。

第三章 「党の発想とは何か」との関連におけるレーニン組織の歪少化と党——大政同論路線の誤謬

正木論文が我々の主張を全く理解していないことは、次のように云っていることに端的に現われている。「『長崎私党論』などとして、レツテルを貼り政治局多数派の腐敗分子がその行動を合理化するために『私党』論を唱えだした、などというものは歴史の偽造である。再建委員会の基本的な組織路線に関する見解は再建委の発足のときから明らかであり、今になってそれを否定しようというのはいささか遅すぎるし、組織内部に彼らがいたときは一度も反批判もしなかつたのだからその責任はどうなるのか」「発表されているかぎり『遊撃』派の主張は再建委の組織論を継承しようとするものではなく、それを根本から否定しようとするものである」と批判が展開されているのであるが、我々は、すでに「私党論」と彼らのブルジョアの行動との関連については「前号」及び山下論文で示したので、再論する気はないが、こゝでは彼らが自己偽購的にも「歴史の偽造」などといふ抜け得る唯一の根拠としている旧再建委の組織路線と我々の関係を明確にしておこう。たじかに正木氏も主張していること、旧再建委の組織論は、旧再建委の論文集に収録されていた「党の発想とはなにか」党内論争における方法的前提」において、その骨格が示されていたことは確かである。我々はこの事をいささかも否定するつもりは毛頭ない。しかしながら問題とされねばならないのは「党の発想とはなにか」において共有していたもの自身に、現在の時点から捉え返すならば、本質的には二つの対立する傾向が内在化しており、それ自身の内に未分化な性格が秘められており、その一つの側面が「党」大政同論へと一面的に純化していったし、また他の一つが党をマルクス主義の原像に立脚させ階級闘争を唯物史観からとらえようとする現在の同盟に体现される方向であったと

に対する革命的批判と止場の基準としても同時にあったと云うことができる。我が同盟が、分派闘争以来、一貫として追求して来た路線であり、党の存在根拠と階級の存在根拠の同一性と其の共有性を追求する方向であったということが出来る。正木論文は「党」大政同論への神話の復活、スターリン主義への転落、スターリン主義組織論への転向等とレツテルをはって、我々を批判しているつもりになっているようであるが、まさしく彼らの即自的反スタ主義の位相からとらえるならば、すべて党は必要悪に還元されてしまうのである。何故ならば、彼らはスターリン主義を単なる「虚偽のイデオロギー」程度でしかとらえていないからであり、従って古めかしい神話論を持ちだしてあれこれの批判をしているのである。今日の国際共産主義運動におけるスターリン主義政党が「歴史的、現実的根拠」を有して存在している側面をとらえることをぬきにしてはスターリン主義に対する「武器」の批判とはなりえないのである。そのことは同時に内なるスターリン主義の克服への大道でもあると云うことなのだ。しかるに「党」大政同論は「党の発想とは何か」においてその内的論理を端的にはすてはらんでいたとはいえず、それを一面的に純化させ自己完結させたのがまさしく「私党」論の完成であった。それは、必然的に「党」階級の二元対立図式の固定化に落ち入り、かつて第2次ブンドが共有化して来た、階級形成党派の内的弱点を克服し、止揚するものではなく、その矛盾の二重性を「私党」に求めると云うことをもって解決しようとしたのである。我々はこうした旧再建委政治局多数派のもつ方向と自から決別し、旧再建委の四年間の実践の総括として、かゝる過程における痛苦な主体的反省過程をへることによって、止揚する回路を昨年の党内分派闘

云う事が出来る。「党の発想とは何か」との関連においてのべるならば、我々が共有化してきた点け「党」結社の団結の基軸は、まさしく自分たちがへてきた叛乱経験のうち生れたものであり各人についてみれば、権力体験の確かさであり、従って信頼関係自体もまた、叛乱経験の全体性を綱領的表現に高める不断の論争のうち形成されねばならないのである」とし、「かゝる綱領は、マルクス主義が歴史的に表現して来たものであるが、スターリン以降、この表現の一次性は、崩れたのだから、再びこの綱領はある一つの党派性の基軸を表現するものとならざるをえない。」という党の究極的な存在根拠を表現する方法的視座に依拠してきたことである。この側面の継承発展とその止場の地平に向かって、我が同盟が、分派闘争以来、一貫して追求し到達した主体的位相における内実こそ「現に始めから存在させられているものと存在されているものの対立」すなわち、あるがまゝの階級対立にその党の根拠を指定することとに革命党の眞の位相が有すると云う見地において、党と階級の一体的同一性が可能的現実条件としてあるという革命的対自化の把握であるのだ。つまりプロレタリアートの部分的、局部的反抗、噴激、突出の内に革命的綱領的発現の萌芽を見出し、発見しうる、と云う事は、不断の革命実践の検証を通してのみ党とプロレタリアートの革命的歴史観にもづく「歴史的主体の形成」が生起しうるということである。このことは、かつて第2次ブンドの一分派として現出した「神奈川左派」に象徴されたような「世界党」対「国際反革命軍」(ブルジョア)と云う至少な短絡的思考、戦争史観による党軍、敵味方論に基づく反革命軍との陣取戦として階級闘争史観を階級対階級対立としてプロレタリアの権力問題を捨象した一面的教条化

争を起点とし、具体的に着手して来たのである。その結果こそまさに党の中央集権思想の具体化と地方的責任の分散性の建設としての地区労政同であったのだ。そしてレーニンの組織思想の眞ずいを正しく学ぶことを通して、職業革命家の組織と労働者革命家の組織(「党」地区労政同)を、革命運動総体における機能的分担として、役割を鮮明にさせ、そこにおける区別性と同時にその組織的弁証法の不可分離的ものとして不断に融合し、対自化して行くものとして位相を明確化して来たのである(「遊撃」刊号、労政同建設における同盟の組織戦術、参照)。このように明確な二つの分岐が生み出されたのは、根底的には「党の発想」がのべているところの「大衆の反乱の内に綱領を発見する」ということの理解と革命的实践がつきだす問題の把握の方法、つまり大衆の叛乱闘争を、全共闘運動の実存主義的総括、及び暴力性、美学の総括である「叛乱論」を軸として理解するのか、それとも第2次ブンドそのものの総括をひきつぎつ、「階級形成」を単に「運動」として、「過程」として理解する地点を越えるものとして、提起するのかがめぐってであり、我々は「叛乱論」の社会的生産諸関係総体、階級基礎の解明の欠如をあげ出し、この間の党建設の総過程において、綱領問題―党建設―階級基礎という方法的視座を確定する途を選び扱ってきた(「マルクス主義的方法か、それともマルクス主義が根底的に問われていたからにはかならない」。そうした方法で「叛乱論」―「党」大政同論の根底的解体、止揚へ向かっていったところの理論的成果であるのだ。さて、「党の発想」論文は、先に述べたような視点を「はらむと同時に「叛乱論」によってはじまり、長崎「前衛党」論に至って完結する「党」大政同論の母斑がすでに同時に存在した

ということも事実である。我々はその内在的論理性を切開し、その思想的発想の根拠そのものを批判しつくす前に、叛乱論そのものの性格を見つゝ、それとの関連で「党の発想」を批判しつゝ、それが如何に私党論へ受け継がれていったのかを明らかにし、反証することにしてしよう。

叛乱論そのものへの全面的批判は、後論にゆずるとしても、こゝでは後論との関係上で「叛乱論」の基本性格、つまり、大衆が、運動へかかわってくるその基本構造が「近代的市民」の「市民」からの離脱、近代批判に求められていることを指摘しておく。すなわち「叛乱論」のいう叛乱は「近代的市民としての、お互いに何んのかながりのない諸個人が共同の行為を可能とするは近代の否定として一回かぎりの事象、不連続の連続の叛乱の中であって、その叛乱が孤立した存在としての個人の否定であるが故にまた近代を否定する「全体性」を帯びているという「永続革命」的図式をもとに形成されている。「党の発想」をこの文脈で理解するならば、長崎がこめていた想いは大衆の中に綱領を発見するVまたA歴史的批判の確かさV、A生活における権力の確かな暴露Vであるが、その論旨は所詮、サルトルのA大衆V図式に基づくものでしかないのである。我々が共有し、かつ彼らとの分派闘争を通すことによつて深化させて来た視角は、A近代V批判として近代的市民からプロレタリアートの階級形成を目指すとする。三木清Aアントロポロギー的人間V存在論やハイデッカー及びサルトルの実存主義に依拠した長崎的方法ではなく、近代の地平を越える主体としてプロレタリアートという階級を発見しようというマルクスの作業の継承を軸にしていたのであって長崎とは全く異なるモメントを秘めていたのである。こ

うした長崎流方法は当然のことながら党の発想のいたるところに潜在化していたし、それが私党論へと純化していったのは当然のことだったと云える。この図式を基礎にして、長崎は、党の位相をレーニン主義を歪曲化しつゝ展開しようとしたということが出来る。従つて概念的にいうならば、レーニンの切り方そのものが、内容抜き形式主義的とり入れに終つてしまつていたのである。例証するならば、「党ではなく同盟を」という発想は、自から「未だ党ならざる者」であることを自認している。「何からはじめるべきか」と問うたとき、答えはA党Vではなく、活動家組織（集団）としての同盟とされた」と述べ、更にその場合A党Vは現実に国家権力獲得をなす力量を持ったものでなければならぬという考えが前提とされている。すなわち力量とは党が現実の政治過程にもつ影響力であり、権力獲得のプログラムを持つていことであり、更にそれが綱領思想にねりあげられていることである。

こゝに党の現実における「完全性」が前提されているという見地に立脚し、同盟から党への飛躍は、議会主義政党ではなく革命党であるかぎり、たと国家権力獲得の現実性という時期だけに実現が期待されているとし、これこそ「党の自然発生論」であると規定してかかる党の発想に対し、その党における前提的命題主義への拒否的批判をつきだす余り、その論理的帰結は「完全性」を捨てた党を指し示し、党への限定性付与を逆に我々は今A党Vから始めなければならぬという強調へと転化しているのである。こゝに於て、部分的姿を通して具体的普遍性を獲得していくという弁証法的展開把握の捨象と、「完全性」の党の否定、「不完全性」の党からの出発という二元対立図式への陥没がはじまつていたのである。「対立概念

（物）は相互に对立・浸透し、統一体として止揚されて行く」という弁証法の欠如を物語っているのである。そしてその理由を、レーニンによる一九〇二年のボルシェヴィキの分離と一九一七年におけるゲデモニーの獲得とは同じ概念ではくれないと云う把握の基にもとめてはいるが、このことは党をA権力V対A党・階級Vの関係からではなく、党と大衆関係としてのみ捉えようとしていることである（この問題に関しては、既に遊撃創刊号の嵯峨みづる論文で触れられている）。では何故この様な発想が生じたのかと云えば、長崎における第一次プロレタリア革命派的思想の止揚としてのその転質の仕方そのものに問題が孕まれていたのである。即ち自らいみじくも語っているごとく、レーニン全集の「二年間」の序文、第一三巻、九七ページにおいて「経済闘争と労働組合との問題について私の見解は、文献上、しばしば誤って述べられている。だから、何れをなすべきか？」の多くのページが、経済闘争と労働組合との巨大な意義の説明にあてられていることを強調する必要がある。」とレーニンが一九〇七年のべているフレーズを引用し、長崎は第一次プロレタリアの解体と安保闘争との関係における総括を、特に革通主義的戦略の論理主義、打倒対象の一人歩き、すなわち帝国主義の動向一般に解消、資本主義がもたらす危機への洞察、その見通しの認識の拡大を戦略展望としその実践的環をブルジョア政府の政策阻止、破壊を戦術の中心問題とし、そこから党活動のスタイルを決定すると云う、すなわち〇〇闘争から〇〇闘争へというサイクルのパターンは政治組織を不断に打撃部隊による戦闘団主義に溶解し、情勢の認識、把握の拡大の内に党主体の位相を破壊してしまふ」という伝統的思考発想、パターンの止揚を、逆転倒させ、党と大衆の関係として再指定し、

「私はこの数年間、大衆の分析にその努力を集中して来た」に表現されている如く、彼のオリジナルによる、大衆の内在的問題の相対的独自分析として提出した。だが、それは権力問題と階級基礎との連鎖における党主体の位相、即ち階級対立を基底としてその矛盾として生起する諸問題に対して、種々の小ブルジョア的イデオロギーとの対決を通してプロレタリアートの独自性を獲得していくという事を全く欠如させた視角であるが故に党と大衆関係のみに視点を固定化し、結局は革通主義の止揚は反転倒しかなかったのである。そのことは「遠方から」一号、「プロレタリアについて」（咲谷論文）において、積極的にプロレタリア派を持ちあげ、その視角は異なるがその基底においては共有していると云うことが語られているところに最も象徴されているのである。以上の長崎流の方法的視角の歴史的系譜と背景を踏まえた上で、更に党の発想を追撃してみるならば「完全」な党が、決定的蜂起のとき即製されるはずもない、ローザ・ルクセンブルクの期待もむなしかつたことが強調され、そして再び革命と大衆蜂起時点だけ、全体の力量としての党を位置付けることが誤りであること云うことがくり返されているのである。この両面否定からの論理的帰結として権力獲得の現実性をもたない大衆叛乱は常にあると云う論拠から、大衆叛乱との関係性が党を持ちだされるという構成である。それは、周知のように、この組織社会にあっては、どんな個別的なものであつても叛乱である限りは、急激に叛乱の全体性と暴力性を開示するというシエーマのもとに、つまり大衆叛乱を全面的に導入しつゝ、あらゆる叛乱の中に潜在的、意識的全体性の希求のうちに常にA党V存在の根拠もまた生み出されるとし、叛乱を政治過程へ、ゲデモニーへと転化するものとしての

党が語られる。だから、党は八叛乱による権力体験の確かさの共有として指定されることになり、党と叛乱の関係は、アジテーターと大衆の関係（戦術本性）によってのみ結合されることになって、それは最終的には権力獲得の（技術）へ、ヘゲモニーへと行きつくことになる。この発想は階級を主体として党を単なるヘゲモニーとしてのみとらえる傾向でもあるのだ。レーニンが蜂起は技術であると云った意味が、技術主義的に歪曲して取り入れられているのである。レーニンは「技術」を単なる「技術」としてあつかうことや、又、「技術」を軽視する思想性を問題としたのである。すなわち計画としての戦術が党の組織建設と不可分に結合されたものとして提示されているのであり、かつそのことは具体的戦術形態（技術）まで貫徹させるも密性を持ったあくなき権力意志の主体を問題にしたのである。従ってブルジョア的觀念における単なるテクニクの問題として論じられているのではない。技術的次元にまで貫徹するリゴリズムをのべているのである。従って党の発想で語られている、政治技術はレーニン主義の「知半解である」と云える。

こうした先の図式の上で語られる「見えざる党」は、従がって叛乱と叛乱の間の谷間にあっては、大衆的には「見えない」ということを意味しているだけであって、レーニンの非合法の党とはその根底において相違している。このことは決して専制ロシアの特殊な歴史的条件のもとでのことであると言ふことを持つてその教訓を学ぶことを否定することは決して出来ない。今日の階級闘争において増々重要性を占めて来ていると云える。レーニンは非合法の建設問題を「政治警察との闘争」を主軸にすえ、手工業的な組織とその経済主義的本性との分岐として強固に中央集権化された革命家の組織

いうまでもない。問題はそうではない。一九〇二年の党も、一九一七年の党も同じ概念でくまれないどころか、我々は世界革命における過渡期段階、すなわち一国的過渡性をはんだプロ独政権の樹立すなわち権力獲得の党さえも、本質的には同じ概念でくまられると考へる。何故ならば、党の概念というものは、ブルジョア権力（支配者階級）とプロレタリア階級の赤裸々な階級対立において生起する矛盾に歴史的、現実的根拠を持つて規定されて存在するものであるのだから、世界的規模における国家、階級の死滅へ到達することをめざしては、その党とプロレタリア大衆との結合の質や、その果す役割の位相は存在するとしても、本質的には同じ概念において存在するのである。こうしたレーニンの国家と革命の諸問題についてまったく無自覚であると云うことが出来るであらう。こうしたレーニンの問題の長崎的歪曲はまた「党の狭さ」（職業革命家の党）に関する「党の発想」の問題のたて方においてもより鮮明にみることが出来る。すなわちロシア社会民主党第二次大会での党規約第一條をめぐるマルトフとの対立の意味を、その背景において存在した綱領的問題との関連で理解しようとはせず、すなわち八叛乱の全体性のうちで経験された党存在性の限定性、その「狭さ」がギリギリに確定されておかなければ、叛乱の下降期に、党組織は四散してしまふ、天下りの党主義者のおよばない、ギリギリの党至上主義レーニンの本質をくみとらなければならぬ。この二年間、我々はようやく経験のうちで、この本質をかいまみたのではなかったか、とのべることによって示されている様に、八叛乱に對する八党の狭さの対置として問題は立てられている。しかるにレーニン流に云うならば、「諸々の突発事件をあてにすることが少ないほど歴史的転換

を「何れをなすべきか」の中で提示している。合法主義部分との党派闘争を「雇主と政府に對する経済闘争」の自然成長的發展の上に自からの政治を組合主義政治に狭め、ストライキや大衆の叛乱の前に拜跪し、「政治警察との闘争と革命家の戦闘組織」を形成することを放棄し、手工業的な組織を正当化している状態は、逆にストライキや大衆叛乱が、政治警察によって解体されてしまふ、大衆の叛乱が継続することが不可能な現実に對して、レーニンは逆にストライキ闘争、大衆叛乱を組織するために政治警察との闘争の不可避性を持つて反論しているのである。つまり、労働者組織と革命家の組織との弁証法的区別性を明らかにし、かつ党の組織体系とその形態を集中性と専門化、及び責任の分散化を政治警察闘争における不可欠の組織条件として定立させているのである。そして一方では可能な限りプロレタリア大衆への党の公開性が不断に追求されているのである。「政治警察闘争」と「党のプロレタリア大衆の公開性」の側面を正しく学ぶことを捨象して、党は本来非合法的存在であり、革命の段階においてしか党は見えないと云う「見えざる党」は、まったく長崎流歪曲でしかないという事が出来る。まさしく長崎のいう党は八近代への叛乱に大衆に對して指定されていることの中に一切のレーニン組織思想との相違が存在しているのである。つまり一九〇二年と一九一七年の党は同じ概念ではなく、れなると云う長崎流の主張は革命の与件としての大衆権力、叛乱の全体的な成熟の上に立つて、党がヘゲモニーとしての役割をひき上げる段階とそうでない以前の段階を断絶せしめ、それ以前の党と、革命の切迫性における党との非連続性を語っていたのであるが、こうした発想が、後に八私党から八公党への転化という問題へと進化していったのは

に不意打ちをくわえない見込が大きくなると云う意味において、系統的に、いかなる情勢にもまにあう用意とその準備」という党建設の重要性を、まったく取りのぞいてしまふ、結局は大衆叛乱の自然発生の枠内にすべての根拠を求め、そして党か、大衆かの二者選択や、解党主義を打破できる唯一の道は、こゝでしかないとし、その要因は、党の破砕が、大衆の自然発生のうちに根拠を持つていると云う視角から、大衆の自然発生の問題を理論的に追いつめて行くことによって八党の必然性と必要性をある限定された領域で厳格に確定することが出来るとし、その主要な根拠を、大衆の成熟はそこまで達していると云う価値判断の基準の下に組み立てられているのであるが、こゝで何によりも問題における克服として模索されているところには根本的問題が横たわっているのであるが、そのことは叛乱の全体性、暴力性の開示の自然発生の質を明確に把握するのではなく、それに拜跪して美化するところに問題が秘められているのである。しかるに種々の大衆の自然発生的叛乱は、現代無政府主義的衝動や、小ブル人間主義の希求等の小ブルイデオロギーの流布に對して、このイデオロギーの外皮をまったく軽視し、その結果逆説的に党の「ギリギリの」政治の狭さが強調されているのである。こゝからこの発想が、その後、受け継がれ、旧同盟（中常通達）及び「前衛党論」（情況七四年三月号）に於て更に論理化されていったのである。すなわち「さまざまな不満分子」の「同盟への流入が避けえなくなる」これは「常に人格的問題ではなく、彼のもつ大衆部隊、運動の利害を即自的代表的形で起ってくる。我々はいままで、これらの傾向に對する不信を組織する必要があるし、出来るであらう」（旧中常通達）という形で提起されていた。しかし、これ

は前衛党論に於いて、ロシア社民党の党規約第一条をめぐるマルトフとレーニンとの対立を党が「さまざまな不満分子の避難所」となることの防止を目的としたものであったと見え、「遅れた部隊に對する先進的部隊の組織された不信」としてとらえようとしたことによる。従つて一九〇二年のレーニンの「何からはじめるか」の問いを、党の骨格の組織化からはじめべきか、大衆運動の組織化からはじめるかという対立であつたと歪曲してと見え、大衆の党への流入阻止が課題だつたとせざるを得なくなつたのだ。更に「革命の切迫性」という時代認識ではマルトフとレーニンは共有していたと考え、党への「非プロレタリア諸分子の大量の流入防止」という点では一致していたと思考している。従つて長崎は両者の党組織性格の把握を極端に二分してと見え、ローザ・ルクセンブルクのブルジョア極少数者(派)に對する「人民の党」に行きつくのか、それともレーニンの「人民の党」の原型的否認までいきつくのかという懸念の差が「さまざまな不満分子の流入の防止」(規約第一条)を強調するの差となつてとらえるに至るのである。(この点における全面的反論は遊撃創刊号感嘆みつる論文に「レーニン組織的分岐における組織思想、中央集権化思想の具体化とは何かです」に明らかになっているのでここでは除外する)

がしかし、ロシア社民党第2大会の論争の事実が、そのような水準のものではなかつたのは周知のことである。それはいうまでもなく、ナロードニキ等の小ブル革命主義や第二インターのベルンシュタイン流のロシア合法マルクス主義、(修正主義・経済主義)との資本主義批判の客観的な階級基礎との関連で生まれた組織思想上の分岐だったのである。ところが長崎はそうした綱領的諸問題との関連で革命の戦術問題を明らかにし、組織問題(組織思想)を

主体的にとらえていくレーニンの組織思想を理解することなく、すでにみたようにそうした綱領問題を切り離して、自ら御都合主義的に、組織問題を自身として形式的にみようとするとともに根本的誤りが存在するのだ。

第四章 「党の発想」における理論的基礎としての長崎叛乱論の根本的批判

こうした長崎の欠陥がどこに由来するのかといえ、すでに概論風に提示したところであるが、長崎にあっては綱領の問題、階級基礎の問題が、大衆叛乱一般として、すべてが十把一からげの八近代への叛乱として切つて捨てられているところに存在しているのだ。つまりそのことと長崎の資本主義批判のブルジョア性にその基底があると云う事も同時に云えることではあるが、長崎流のプロレタリアートの概念の現象的転倒は、既成体制、秩序からのドロップアウト、そのものが都市プロレタリア群(浪民)(すなわち大衆社会論的に云えば「カオスの、セラチン層」と云うことも出来るであろう)として措定される。

その内容はアトム化され孤立した諸個人という「近代の原理」、その社会的関係を基礎として、法や国家もまた、端的に経営のアナロジーのもとに組織されるとのべ、管理社会(テクノクラシー)の秩序、その価値体系の拘束性を持った諸個人が「ただのわたくし」として他者を発見するに至る、その個別的決意性が近代の叛乱の出発点であるとし、その離脱過程にある諸個人が現象的に表示されているプロレタリアートとしてとらえられているのである。こゝには、国

家の階級支配の性格としての政治国家等はまったく見え込む視座がないことは明白である。宇野的「労働力商品化論」とバラレルな關係に於て「近代世界の物的性格、人間実践は、觀念の発動なのではなく、第二の自然」としての人間の物質活動、自然的他者の否定としての人間化、同時に自己の自然化、物化であるという弁証法のなかで、労働実践が可能となつている。人間労働が労働力商品という物質的規定性をうけとつてはじめて商品経済の成立」ととき「それ故に近代労働実践の世界は、労働対象として物的規定をうけるかぎり人間の世界として成立しているのだ」とのべられていること、まづ何れよりも明らかにしなければならないことは、長崎の云う弁証法がマルタスの経哲草稿に依拠した自然の弁証法と唯物史観の弁証法との重層性に立脚し、人間の自然化(人間の貫徹された自然主義)と自然の人間化(自然の貫徹された人間主義)として、把握されており、それを近代における「第二の自然」と称している点である。すなわちフォイエッハ主義の本質を鮮明にし、その前提との連動の關係において初期マルタスがフォイエッハを越える地平の開示としてのべられているのであるが、「その歴史のカテゴリーを持つて更に近代世界の起動力を人間の歴史行為(労働実践)、すなわち生産実践が事象存在の形式(認識)とその行為主体の内に分裂が生起されて生産される」とし「近代の地平の明るさは自己の生成の根拠である行為の本質を忘却し、この深い闇のなかに残り、けれどもこの闇は消却しえない。かつての共同体の外にある闇は近代によって徹底して放逐された。けれどもこのことによつて、近代の労働主体は合理的形式をこらむりかつ世界を対象化しつくすこととて、かえつて行為の近代的発現形態にたいする根源的否定

を自ら内部にはぐくむ。だから近代を生成する歴史的行為だけが同時に近代の否定性を受苦しめている。歴史的实践のうちには近代を全体として乗り越える契機が存在するというのも、受苦的な行為の本質によるのである。行為は本来何かしら本質露呈的な悲劇的なものなのだ。まさしくこゝで語られていることは、きわめて文学的表現による叙述形式をとつてはいるが、自己の生成の根拠である行為の本質「人間」は「人間は直接には、自然存在」であると云うことを指摘しているに過ぎない。「自然存在として、しかも生命のある自然存在として、人間は一方では、自然的諸力を、生命諸力を、具行している。即ち一つの活動的な自然存在である。これらの諸力は、人間の中に素質及び能力として、衝動として実存している。他方では人間は、自然な、肉体的な、感性的な、対象的な本質(存在)として、動植物がやはりそうであるように、一つの受苦している制約された制限された本質である。すなわち人間の衝動の対象は、彼の外部に、彼からの独立した対象として実存している。にもかゝらずこれらの対象は、人間の欲望の対象であり、かれの本質力の活動と確証のために欠くべからざる本質的な対象である。人間が、肉体的な、自然力のある生命のある現実的な、感性的な、本質(存在)であるということ、あるいは、彼がたゞ現実的な感性的な対象によつてのみ、彼の生命を発現することができるということの意味する。……飢餓は一つの自然的な欲望である、従つてそれが満足せしめられるためには、それは自己の外部にある自然を、自己の外部にある対象を必要とする。飢餓は、肉体的外にあって肉体的保存と本質発現のために欠くべからざる対象を求め、肉体的対象的欲望である」(マルタス)「経哲草稿」においてのべられていること、人間の

本質は対象本質であり、主体が対象外的自然によって指定されてある存在であり、従ってまた自己の存在の根拠を外的自然のうちにもつ存在であるという点から必然化されるのである。この外的根源性はたゞ主体の実践を以って、認識の中へ開示されてくるのである。従って人間実践（労働実践）をおのれの存在にかゝる活動として、したがって生命活動として必然化させる人間の歴史的行爲である、主体的契機（意欲、目的）は一定の生産関係から「意識」という規定をうけることによって、単なる労働主体（自身の自然的主体ではなく）社会的主体、すなわち自然的主体を社会的唯物なる生活（生産）手段によってつかみ補足することを可能ならしめ、かくすることによって自然への働きかけをさらに拡張してゆくと同時に、みずからの本質をも変化させることにおいて社会的主体となることによって、社会的、歴史的制約を表示し、人間の生産実践になるのであるが、叛乱論ではそれが、「この歴史を創る人間の行爲は近代ではおしなべて形式的規定性をうけとつた生産実践となつていた」と語られている。行動の主体それ自身のうちに、事実存在と形式との分裂が生産されると云うことを以って近代の合理的形式と反近代的位相すなわち近代の本質、忘却と深い闇との内在的矛盾の対立としてのべられていたのであるが、これはマルクス経哲草稿の疎外された労働の問題を長崎的にアレンジしてのべているにすぎないことは明白である。

この内的矛盾の対立の外化として長崎流弁証法が叙述されているのである。すなわち「近代における合理的原理の成功はあまりにも著しいために、人は『存在するのは合理的』だと言ふヘーゲルの言葉を持ちだし、そこからの錯覚から覚醒するのがむずかしい、事実的欠乏していてこそ、それからの苦悩を感受するものばかりなのである。この鬱々若きマルクスが解明した位相が近代世界構造の矛盾が生きている存在しているとのべられていたのであるがそれが行爲への本質的を飢餓（自然的欲望）の感性的活動（行爲）として大衆叛乱の原生（原罪）がのべられていたのである。こゝに近代の宿命的な類落の姿があるとして行爲による死、反乱をめざす内的政治的人間関係、アジテーターと大衆との孤独疲労にみちた関係として日常の市民社会の政治現象がたち現われるとされている。そのことは受善的存在（感性的活動）、飢餓（自然的欲望）を若きマルクスが明らかにしている対象的自然としての人間の規定性を近代の技術的關係としての人間が対象された存在として対自化し行爲の本質的飢餓が開示されているのである。これが叛乱論の近代批判としての反近代の内容であるのだ。従って自分の行爲を全体性の欠如態として感受しているのである。その存在の行爲を役割付け、大衆にとつての飢餓はこのような行爲の本質への飢餓なのだとして、この大衆エネルギーの開示こそ、その闇の非合理体系の外に触れている精神的飢餓の反近代としての位相の現出として語られているのである。長崎流の唯物弁証法の根本的問題は、人間労働の概念をその行爲の実践概念を始原として規定してはいるが、「人間労働」の分裂は必然的に階級社会の成立と形成をもたらし、それ以来の人類が諸階層に分裂していくのは何故かという史的唯物論的視角の完全な欠如に存在するのだ。マルクスが「経哲草稿」に於いて展開したブルジョア社会に於ける人間の存在様式は如何なるものであったのか？そこで「ブルジョア社会において人間は本来の人間、人間の人間（自然な存在）」として存在しえないという主題のもとに、それは労働者の

所与の非合理性の行爲の本質などというとすぐ神秘主義、非合理主義の非難が投げつけられる。しかし近代が人間の行爲のうちで生産する分裂は一つの非合理的事実であり、この分裂は万人にとって存在する。ただしかし万人によって生きられてはいない。けれども實際近代の忘却された根拠である反規定的な事実性との相関の弁証法が生きている領域がたしかに存在するのだ。これこそ、こんにち大衆と呼びならわされている者たちの次元である」と云うことを以って語られているのである。

そしてこの大衆の次元とは日常的飢餓の次元であるとされ、普通は物質的な飢餓が想起されるけど、こゝでいうのはそうでない。「大衆の日常行爲は受善的なものとして近代の構造の矛盾をまさしく生きている。彼の存在は近代の对象的存在の地平では弁証法の一つの契機にすぎないものであり、その様なものとして自己を現実的に発しえないものだけれども、徹底してこの弁証法の素材となることによつてかえって近代の弁証法の一つの疎外態として意識する。まさしくこゝでのべられている大衆の日常的受善的存在うんぬんは「人間は対象的自然によって指定されている存在である。」「感性的であるということは受善的であるということである。」「人間は対象的自然によって否定されながら規定されているがゆえに自分の苦悩を感受する受善的存在である。人間はこのような存在であるがゆえに「自分の対象に向つてエネルギーに努力をかたむける情熱的存在」とマルクスは経哲草稿の中のべられているのであるが、すなわち感性は「実践的な人間の感性的活動として主体的にとらえられる」。このことは必然的に感性的活動へと駆りたゞせる自然諸対象のすべては、身体組織にとつて不可欠なものであるにもかゝらず

労働からの疎外によるものとされ、労働者の現実が国民経済における人間の現実にはかならないとされ、その人間の現実に対して人間の本来的あり方が対置されていた。従つて、そこでの市民社会（ブルジョア社会）の解剖は、市民社会の現実的解明からではなく、人間の哲学的把握の理念からの抽出であるがゆえに、人間の現実がその現実的存在根拠の内容が不鮮明にされ、疎外の実感についての論理は存在するが、疎外が疎外であることを説明することにいたらず、疎外された労働と言ふ哲学的圏内におしとどまっていた。その諸限界を發展止揚する地平を彼が開示しえたのは「ドイデ」に於いてである。すなわちドイデにおける協働は、「現実的生活」といわれる協働としての「社会的諸関係の総体」の意識の個的な身体存在として、すなわち「社会的諸関係の総体」、それは身体的な対象活動、協働であるところの生産として把握されなければならぬのである。従つて「ドイデ」に於いて、「一定の生産様式ないしは、産業段階は、つねに一定の協働（業）の様式がそれ自身一つの生産力なのである」と云われていることは、まさしく、生産力と生産様式の分裂（協業）が、生産力と生産関係の社会的分業と資本制生産手段の私的所有の定位とその生成こそが賃金奴隷制の基礎であり、ここにプロレタリアートの経済的解放の歴史的地位、役割が有するのであるが、そのことは同時に生産力と生産諸関係は実は階級関係によつて規定されている事をぬきにして語れない事を示しているのだ。従つて長崎の叛乱論は、階級概念をストレートに始原的労働概念としてアブオリに持ちだして、一面化させ、その結果、近代プロレタリアート（労働主体）の自己分裂としてしか把握出来ず、従つて当然その展開枠も「近代を乗り越える契機は、たゞ近代の開示した人

問の歴史的行為（労働実践）が、かえって近代の世界像の根拠を明らかにし、近代の一つの歴史的存在として断罪するカギを提供する」と云うことに表示されていること、プロレタリアートの階級的実践概念がすべて先の始原的労働概念に求められているのである。そのプロレタリア大衆の労働主体の内なる自己分裂の歴史のかつその内的論拠は宇野の労働力商品化の疎外論革命へのパラドクスで構成され、それが社会史的叙述形式を通してスケッチされているのである。その内容は宇野の小ブル資本主義観（批判）の長崎的批判的撰取以上のものでもないことは明らかである。叛乱論においてのべられていること、この「資本論」の場合、労働が有用労働との相関を離れて労働力商品として一般的に成立していることを前提にして、はじめて原理的、弁証法的に展開されるべきものというゆえんである。すなわち宇野の唯物史観は原理論の完成をもって、はじめて科学になったと主張し、マルクスの資本論を単なる「経済学」としてとらえると云う論拠のもとに、「資本の運動法則も恐慌も、恰も永遠にくり返すかの如くに」現われるほかないと、資本主義の生成、発展、没落の不可避性を排除し、客観的科学として成立せしめられているのであるが、マルクスがプロレタリアートの歴史運命の分析として解明した資本制的蓄積、「資本論第一巻第七編二四章の「いわゆるゆる本源的蓄積」を単なる資本の排他的支配、その廃絶と云うシエーマの基に、資本主義社会が階級闘争の歴史として生起する内在的根拠の側面を捨象して、一方では純粋な資本主義が原理的に資本によって解決されていると云う前提を組み立て、それにくみこめないものは、資本主義の後進性、前近代性としてくみこまざる宇野経済思想に對して近代と反近代と云うパラレルな構図の位相において政治

を労働実践において認識論において弁証法的に統一すると云う方法しか導きびくことは出来なく、この枠にいくら近代の位相の合理性の批判を接木しても何も生みださないものである。そこにはまさしく階級闘争も階級対立も生起する内在的根拠がすぼりぬけおちてしまっているのである。従って存在と認識が、階級闘争を媒介として能動的主体の実践として統一、止揚されていく回路、その総過程は歴史的遠慮性をほらみつゝ、人類の當為としてのプロレタリア共同性の必然的現出化をおしはかる新たな協働において獲得して行くことと云う回路はまったく閉鎖されてしまうのである。まさしく長崎叛乱論のプロ措定は、マルクス史的唯物弁証法に「ならぬかかれた資本主義批判の視角が欠如しているところに根本的誤りが存在していると云えるであろう。まさにそのことは「資本論」においてのべられていること、**「人と人との社会的諸関係」が人と人との物象的關係として現象する**」この転倒した資本主義社会の内密構造の分析がなされているが、「いかなる生産手段からも切り捨てられ、売らばき商品をも持っていない。その意味において自己の生活資料を獲得するための労働力の所持者、販売者としてあり、その所与としてアトムとしての自由な存在、契約的、社会關係として自由な人格、自己の労働力の自発的処分と云う、物象化された相としての關係は、貨幣所有者と労働者の關係は「貨幣はすべての人々にとっての生産の普遍的な実体である限り、直接かつ同時に現実的な共同体であり、またすべての人々の共同の生産物である」とマルクスがのべていること、ブルジョア的生産様式における人間の存在論の本質は商品存在にほかならず、人間の自由とは商品としての自由、すなわち先

的ニヒリズムとして展開しているのである。更に「労働力商品化論」をベースに人間労働が「労働力商品という物質的規定性をうけとって」はじめて、商品経済を成立せしめた、近代の開示は人間の歴史的行為（労働実践）が近代の根幹をなすものだ。その現場で生産するものとして、プロレタリアートは労働（主体）の自己分裂そのものであったとし、資本主義経済の商品化された労働力として、彼は近代の規定性を一身にこらむって行為する。労働は決して商品労働という性格には規定しつくしえぬ全体的な人間の行為であるプロレタリアートの近代の分裂は「受苦的、存在としてあった」「近代の合理性を労働という根本的行為からの疎外として意識せざるにいなないものだとし、従ってプロレタリアートにとっては、自己の存在と自己の意識（自己否定）とを必然的に相関させざるをえない。だから全体性の実現という近代の克服の意識をプロレタリアートの行為のうちではくままれて行く、こゝにはじめて克服の目的が実践行為と相互に作用せざるを得ない場が開けてくる。プロレタリアートにとっては自己の解放とは、どのみち、近代からの解放」となるのだ。近代の物象化の地平は万人のものでありながら、労働行為の現場でこの矛盾にかゝる、内在的な意味を意識し、この構造を実践的に打破せんとする運動がおこりうるものとされた。変革の行為のなかで、もしそれがどんな個別的なものであろうと、人間の全状況は開示された個人の實踐が、人間の全体性の実現をになうものとなる。」という長崎流プロレタリアートの主体的措定がされているのであるが、労働主体である人間の対象変革の能動的主体として、人間存在が対象的自然から措定された存在と同時に社会的存在として動的であると云うマルクス主義の史的唯物論は捨象され、すなわち労働主体（存在論）

超階級、超歴史的事象性ではないことは当然であるのだ。この物象化された相を現象的表示として認めつゝも、そのことに実体的本質ではなく資本主義商品経済社会における二重性、労働力の不断の売買が仮象であり、その事と自体を実体してしまう事とはプロレタリアートのブルジョア性に対する経済的隷属性の結果であることが忘却されてしまっているのである。こゝから導きびきだされる結論として、プロレタリアートの自己分裂として近代と反近代を技術論を基礎とした労働実践行為、労働対象（労働過程）の素材の事実性にその矛盾が求められて行くのである。叛乱論においていみじくも、長崎が本音をのべていること、「商品経済が労働力の商品化という元来無理な形式化を支えており」うんぬんと、べているところに象徴されている様に「本来商品でない人間労働（労働主体）が商品になる。すなわち本来単なる生産物ではなく、商品として生産として生産されたものでもないものが商品化される。こゝに無理が存在していると云うことが資本主義本質的契機の一つであることを根本的問題としてとらえ、その基底における発想は、「本来自由な労働主体」として確信され、物象化された労働者が自己を主体的奪還すると云う労働者商品化絶絶が革命の終局目標や、この様な關係の自覚した主体としてのプロレタリアート（向自的プロレタリアート）としてプロレタリアの自覚論理、まさしく資本主義批判における小ブル的反叛、小ブル的資本主義観の立場でしかないのである。まさしく長崎叛乱論はこの宇野労働商品化論に依拠して展開されているのである。すなわち、「資本主義経済は恐慌をも自分の再生の契機として延命していくのだが、この合理的体系の要ともいべき労働力の商品化は、なお人間の身体という非合理的の間に体系外に残さざ

るをえない。従ってこの点こそ、近代資本主義社会の基礎にある抽象化の秘密を明るみにだしてくる」従って「労働の身体(生)」という非合理性を合理体系に産出できないという一点にもとづいている」といふところから資本主義の根本的矛盾を見出そうとするのである。まさしく資本主義社会そのものが「人と人との社会的諸関係」

「物と物の関係」の中に完全に對象化しきれない根拠を持って成立しえたと言ふ前提の上に論理が組み立てられ、こゝに對象化された相そのものが内的矛盾の構造を有しており「労働行為の現場でこの矛盾にかゝり、この内在的意味を意識し、この構造を打破せんとする運動がおこりうるものとされた」と叛乱論においてのべられている通り、またそのことを根拠づける内容として「労働は使用のため個物を作るいわゆる有用労働をはなれてはありえない。けれども資本主義経済に組みこまれた社会的必要労働は、その具体的な素材からの具体的な拘束性をはなれて形式化される。労働の對象的な性格は労働主体に特殊な規定性を与えた。労働主体はまさになま身の人間身体は拘束性をはなれて形式化され、労働力商品として測定可能な量に形式化する。この様に人間主体も自然的素材も事実との弁証法をたち切つて形式化され、かゝる労働對象と素材相互の弁証法として、近代資本主義経済は展開される」。こゝにおいて根本的問題は、マルクスが「資本論」を展開している、価値の实体としての抽象的人間労働、すなわち使用価値と価値を形成する労働としての本質規定がまったく除外されているのであり、「商品の二要因」「商品に現われる労働の二重性」も当然ぬけおちてしまっているのである。従つて具体的有用労働と抽象的、人間労働、及び社会的必要労働との対立図式として近代とそれ以前(前近代)としてのアナ

形式としてあるのではなく、まさしく社会的実体性を持った具体的普遍性として存在するのである。また叛乱論のも一つの側面のモチーフとなつて技術と生産実践論は、武谷の「本質―実態―現象」と云う三段階論(技術論)の方法論に依在して長崎のアレンジのもとに、近代技術論として改作して展開されているのである。「決して自然對象のみではなく、人間の主体もまた労働の對象として人間である。人間から非合理的闇や神秘の彼岸が開放され、生産過程でも工学や科学においても、人間ははてしない攻撃の對象にさらされている。近代以前では、人間の科学などという冒瀆は許されなかつたのだ、近代技術の発展は、こうした労働の對象的性格の展開の表現であり、その直接の成果である。単に機械技術という成果のみならず、技術的思考の勝利である」として武谷の技術の唯物弁証法的規定の「技術とは人間実践(生産的実践)における客観的法則性の意識的適用である」といふ技術概念の本質規定とすると云うものと、人間の行為における法則の適用のフレイズの上に、技術はまさに對象による計量、測定可能なもののみをそれこそ「意識に」とりだしてくるものとみなされていると云うことを持つて、武谷の労働手段の体系としての技術本質段階概念(機能概念と実体概念を統一止揚した認識の段階としての本質概念)すなわちカッシーラの実体と機能を形式的に分離(認識の発展は実体概念を機能概念に解消するとし、概念分析を批判的止揚として確立したと称する武谷の形而学的三段階論は、人間の向自的物の概念による認識をなす実体論的段階、最後にこれが即自向自に止揚され、本質的段階に到達する方法に依拠し、技術は労働手段、従来における機械(労働用具)に限定されるものではなく、労働過程の三要素、労働そのもの、労働

ロジックのもとに語られているのであるが、しかるに具体的な有用労働と抽象的人間労働との関係も、拘束性をはなれて形式化されたとのべているが、この二つの関係性における価値の本質規定の秘密は、私的労働と社会的労働との関係としてとらえるときはじめて明らかになるのである。従つて「商品に現われる労働の二重性」の内一面では他人のための有用労働と他人の有用労働においてしか実現しない自己の人間労働として対立的に共存しているのであり、こゝに抽象的、人間労働が価値を形成する実体を規定する内的契機が存在するのである。従つて商品の価値は、使用価値の關係性をぬきにしては存在しない、商品の使用価値は単なる生産物の有用性ではなく、そのことは生産物は価値を形成しえないのであり、価値を前提とした、価値を実現する担い手として他人にとっての使用価値なのであり、こゝに「商品の二要因」がひめられているのである。つまりマルクスが「経済学批判」序説でのべている様に、労働一般として把握されるのは、資本主義的生産關係を基礎にしてはじめてなされるということであるのだ。この事をまったく対自化することなく、宇野の場合は資本の生産過程で労働価値説を論証する仕方をしているのである。又、なま身の人間身体を労働力商品として測定可能な量に形式化するのべられているが、資本の発生の直接的契機として労働力を商品化されてきたが、この資本の運動が、資本の専制を確立し、資本の独占を開示し、その結果として労働力商品化が定立されてきたのであり、資本制生産は資本家階級による生産手段の独占と二重に自由な労働者の産出を歴史的、事実上の前提とするしかるに、抽象的人間労働、社会的必要労働も、労働力商品化も、なま身の労働主体(身体)からたち切られて、単なる抽象的一般の

労働手段、労働對象の内に自己の姿をあらわしてくるという。すなわち技術が物的に對象化されている視点から、近代技術こそ、この様な思考のグロテスクにまで成果をみせているとし、技術のもとに人間の行動の本質であるとし、すなわち武谷の云うところの技術的を行為を可能ならしめる原理であると云うフレイズのもとに、武谷技術論の基底のモチーフであるところの「技術は生産と生産關係との交互關係を介してのみ、その本質を現象する。それゆゑに技術は労働過程の三要素のすべてにその実体をもちながら、そのときどきの社会的形態における技術の定在様式として現象化する。技術的定在の重点移動と云う事実性を持ち、(技術概念は十分流動的に、一社会形態における技術の現象形態にのみとらわれないつかみ方をしなければならぬ)科学的分析を可能にする唯一の要点をなす。実体の働き、の原動力、その主体的契機なる労働そのものに技術の実体を認める、この実体間の相互作用下に必然的運動、技術の現象的法則を媒介された法則が認識可能性を持たらす」本質段階に高まった技術論として論理的根拠が主張されているが、そこから、長崎は技術はまさに對象による計量、測的可能なもののみをそれこそ「意識的」にとりだしてくるものとして語られているのである。このことは「人間実践、特に生産実践は客観法則性において行なわれ、客観的法則を無視させる人間の実践は存在しない」といふ武谷技術論のテーゼに依拠し、法則(對象)を目的意識的につかみとり、現実適用する。すなわち人間実践の必然性の可能性という二つの規定がその不可分の統一において技術概念の唯物弁証法的規定とされているのである。この様な武谷技術論のモチーフを更に単純図式化させ、合目的な手続や合理的な成果につきものでないとし、更に今や

技術にとって測定可能な対象を選ぶことは問題ではない。対象化の外延的限界は原理的に存在しないのだから、すでに存在は技術の素材である。技術の問題はむしろ都合のよい規定性をとりだすことになる。この規定とはせんじつめれば計量可能としての合理性のことである。だから技術的な思考は存在するもの反合理性をことさらに忘却するのだとし、近代の科学、技術の発達をもたらした労働実践が素材の事実性との相関を捨てているところに近代の根拠への忘却は巨大な倒錯以外のなにものでもない。しかるに近代はたゞ「未来」のために苦悶する、未来は実践の限界なき無差別の進歩であり、たゞ技術的計量の問題であるとし、この長崎叛乱論で云うところの近代――近代の位相における近代批判の内実であり、そのことは近代世界像の倒錯をその根拠まで了解することが唯一近代批判の立場の意味とされているのである。

その反証としての事例を「類としての人間を想定する場合にも、歴史展望にアナロジーをもとめて自然主義的人間主義が構想される」「この美しい緑の牧場こそ自然と人間だ」とフオエルバッハは呼んでいる。けれども原自然、原人間、総じて共同体の夢よりする技術文明へのレジスタンは近代の力のまえではむなし。それというのも近代の分裂は技術主義と素材自然との対立にあるわけではないからだとし、この対立ならば、近代の地平は対象化の彼岸を放逐することによってすでに克服している。この反合理性は緑の牧場で労働する自然児の明朗さには似ても似つかぬものであるとされ、他方では、近代の演ずる未来への苦悶にたいして、ある「物質的限界」を想定して近代への批判の座を獲得することが行なわれるが、これとて一つの自己欺瞞にすぎない。近代の人間の本質的否定性は外か

れているのである。こうした傾向は、労働力手段は生産力の発展に最も大きな契機を与え、その発達を一方では無限的に強調し、その反近代の疎外形態の闇の意識を、不合理な旧い生産関係を揚棄する物質的基礎を形成する重要な契機こそ、近代が忘却したとしてそれへの不断の奪かんとして語られていることは、結局ブーリン的なエネルギー均衡論へ傾斜してしまふ本質が内在化しているのである。

近代の分裂は技術主義と素材自然人の対立ではないと叛乱論において語られているが、この構図の基に武谷の主客の弁証法、(相互媒介的な内的移行)すなわち過程の弁証法(系統的必然性)は「場所的弁証法(個体発生の際然性)に依拠して、叛乱論の全体の展開的方法的叙述形式をとっている」であり、「近代が忘却している根拠への飢餓、行為の本質への飢餓の次元である。かくして乗り越える問題は、端的に歴史的に行為する個体のきり開くべき「場の開示」としてのべられているところ以最も端的に証明されているといえよう。このことを持つて長崎は字野の三段階論の方法論は止揚したと思ひ込み、原理論のエキスをだけ長崎流に取り入れたのである。このことはマルクスが「経済学批判序説」において明らかにしている。経済学の方法、いわゆる下向分析と上向への対自化(総合)としてのべられている点をまったく無視し、結局方法の空ぶりにおわっているのであるが、この空隙を、サルトルをアレンジし対自対他の永遠的循環として、近代技術(合理性)の地平を越え、個体発生の開示の場において孤立した個人が全体性と同一化し、世界の無(アミーバの存在)に回帰すると云うが長崎反乱論における永続革命であり、マルクスのにあえて云いかえれば共産主義社会論である

らくるものではない。資本主義に内在する矛盾をあげ、これが近代の「必然的崩壊」を用意するのだと予言して待望することは、かえって内在的批判の裏切りである。資本主義社会は成熟すればするほど、一層胎内に矛盾をはらんでいくといっても、生産力の発達が解放を準備すると云うことは、全く別の事柄である。資本主義の社会的性格の増加によってその改良の根拠と余地とが生れたとしても、それは近代が蘇生する契機であるにすぎない。また経済恐慌などのカタストローフは近代の必然的崩壊の証明にはならない。むしろそれは近代の延命のための契機である。疎外感すら近代にとって必要な契機なのであるとして、①自然主義的人間(フオエルバッハ)の原始共同体への主体の回復、②「近代物質文明(技術)」の限界の近代批判、③資本主義の自動崩壊の必然的予言、生産力(発展)の思想、資本主義の改良的改革的余地と根拠、及び経済恐慌におけるカタストローフ等の近代への批判の叛乱を準備することとは出来ない。すでにこの①②③の近代世界の批判のその実践的無効性については、これまで反スタルクス主義陣営においては、それなりに批判がいろいろな角度から展開されている領域でもあり、このことを必要以上に強調されても、それら自身はあまり意味はないものであり、長崎も自己のモチーフの主張を浮き彫りにするために批判的見地を叙述した程度のものであると我々も了解しうる。すなわち問題の中心テーマの一つは長崎の近代世界への批判の地平は、先にも若干ふれたごとく、結局武谷技術論ベースであり、かつそれをより計量の単純図式化、すなわち近代技術の意識的適用、有目的とりだし(主体の技術的行為)、主観的機能化(合理性の自己目的化)としてあり、これが逆に近代技術の発達の無媒介的賛美として語ら

のだ。これが長崎の近代世界(市民社会)の批判の地平と内実であるのだ。こゝから叛乱の全体性暴力性が政治の現象学として語られているのである。このことは全共闘運動を媒介的契機にし、その指導的理論の支配的傾向として、一切を労働過程に一元化し、種々の小ブルジョアのイデオロギーとの闘いと階級的組織性の観点さえ放棄し、ドイデにおける分業に依拠した分業マヒ論―労働の矛盾、分裂の止揚から一切の運動を解釈していくと云う、現代無政府主義、アナルコサンジカリスム、小ブル人間主義の開花 知的反乱は、近代への頽落へとおしなべて解体し、荒廃していったのである。その意味においてもっとも政治的ラジカル性を持っていた叛乱論も、その思想的内実としては、戦後三大論争としてマルクス主義陣営で云われて来た価値論、技術論、主体性論等のモチーフを長崎的アレンジとオリジナルで試行したがやはりそれをこえる地平は形成されてなく、大衆的暴力の無定型性としての戦闘団主義と政治―技術であることと云うことの後遺だけを残したと云えるであろう、このことは我々側の総括としてあきらかにしていると云うことを踏まえてもらうことをのぞんでやまない。

第五章 長崎私党論の党―大衆主客対立

図式とレーニン組織思想の主体的歪曲

こうした欠陥はまた党内的編成をめぐっても「私党論」Vとして純化された、長崎とレーニンの位相の差をきわだたせることになり

ざるを得ない。レーニンは一九〇二年において党組織内における問題で「民主主義以上のあるものが、すなわち革命家達のあいだの完全な同志的信頼が、保証される」とのべている。これに対して長崎は、このフレーズをよりどころにして、「長崎前衛論」においてのべているごとく、「専制ロシアの現実」から職業革命家集団の必要性は説明しえたとしても、「民主主義以上のあるもの」は非合理的にしか説明されていないとし、この集団の存在そのものは、先験的にも、また大衆的にも根拠づけうるものではない。「完全なる同志的信頼」を正当化しうるものはないとし、こゝから党存在が本来的に私党である以外にないと結論がみちびかれているのである。そして党は本質存在において私性(党)をまぬがれることは出来なく、革命過程における自己否定が強要され、かりたてられる。そしてその党は自己を権力(反乱)に外化することによって対象的に自己表現する以外にはないとし、従って党の発想においては「党の結社の団結の基軸は、あくまで党のメンバー相互の完全な同志的信頼関係ではなく、まさしく自分たちのへてきた叛乱経験のうち生れたものであり、外部についてみれば権力体験の確かさである」とのべられているごとく、長崎の党組織観は、ブルジョア的諸個人から 出発した人間が、叛乱体験(アジテータと大衆の相互の死)を経験することによって同質的なものかへ転化したことを前提とする結合であり、その基礎はあくまでも近代の個体発生として「事象性として語られているに過ぎないのである。まさしくその開示の「場」が八党の技術、アジテータと大衆との相関とされているのである。

レーニンが逆に「民主主義以上のあるもの」としてしか云わな

云う点には同じく黒寛を引用してその批判をおこなっているが、その帰結は、黒寛的を党の「革命的技術的なたより」としてのレーニンの批判に対して「黒寛の党の組織本質論」に対してのアンチテーゼとして「戦術本質」そこからする党の「私性」にこそ求めなければならぬ」と云うことに最もよく象徴されているが、この論証の典型が「前衛論」において次の様にのべられている。「この様な機能的に自己を限定した組織は、その結合原理をいったい何によって内在的に根拠づけるのか、党が共同性を大衆の運動からも自己を閉ざしていくものであってみれば、党の内的生活が「大衆の日常生活」から切り離されて行くことは当然の帰結である。反乱の諸集団の場合には、その共同体は大衆の新たな「生活の生産」に根拠づけられ、集団内のコミュニケーションを含めて、ますます強く公的に開かれた性格を強めていく事実とまさに、対照的に、党組織それ自体は一層大衆的根拠を欠き、その「私的」な存在性格をあらわにするのだといわねばならない。党組織内部には大衆や、革命の名で自己を正当化しうるいかなる契機も存在しない。この意味で固有の党は本来的には私党なのである。」以上のごとく一方において党を黒寛的「共産主義の母体の萌芽」に求めるのに対して、他方長崎は近代世界の近代「反近代(合理性と非合理性)における拘束性を持った私性(党)」としてまったくの逆転倒として語る。そのモメントは決定的に異なるが、しかしその基底においては同質であり、黒寛的な全人民の獲得する未来における政治形態を先駆主義的に党がコミューンの萌芽に自己定在化するの に対して、長崎はその反指定の叙述形式を媒介として「大衆の自由な権利、大衆の自由以外に党を根拠づけることは存在しない」とのべられているごとく、

った と言ふ事を我々は今日的にその意味を学び教訓としなければならぬ。それはプロレタリアの共同性を意味させようとしていたのである。だがそれはもちろん、ブルジョア民主主義者とは違って、未だ、新たな社会の組織原理として革命の過程にある以上、それを先づきの理念化するとは、逆に倫理的頹落を招くし、かつ階級闘争を抽象化してしまふ危険をはらむと云う正しい予見のもとに、綱領的諸問題と戦術問題に對自化することを通して組織思想における党的団結の質を不断にとつたのである。従ってレーニンは党組織論上において必要不可欠なもの以外には党の組織的運営のあれこれの形態を直接の問題としては一度もたてゝいないのである。このことの真の意味を理解しえないその典型として、レーニンの「左翼小児病のアブオリー」な 拡大的把握をも含め「労働者階級の階級」とは、プロレタリアート自己解放の理論、共産主義思想を物質化し現実化するための媒介形態としての革命的人間の組織である。前衛としての自覚、革命への献身、忍耐、自己犠牲などの資質をかねそなえた共産主義的人間への自己変革をなしたげたプロレタリア的人間を構成実体とする強固な「共同体」(これは革命的人間への変革の場である)と、実現されるべき(コミューン) 将来社会の萌芽形態であり、共産主義的人間としては「永遠の今」(意識をもつ)としての前衛組織こそは、プロレタリアの目的を革命的实践へ適用し、プロレタリアートを階級として組織しつゝ革命をなしとげるための不可欠な手段である。」(黒田寛一「組織論序説」一三六頁)現在の革共同革マル派が存在しているのであるが、このことについては前衛論において「スターリン的党組織にたいする意識的反対が、ふたたび党の内在的根拠の問題を主題化したことは……」と

近代における位相としての自由な市民、すなわち反乱論で指摘されている 「近代にいたってはじめて人間関係は「自己」と「他者」との個々の具体的で非可逆的關係であることやめて、社会關係となる。近代の社会關係は、市民社会の「政治的に解放された」人間が切り結ぶ人間の姿である」と云う長崎のいう大衆を指すのであるが、このことは党と大衆の主客の対立図式にもとづいてのべられていることは当然であるが、何によりも長崎が指す自由な大衆はマルクスが「資本論」で明らかにしている、商品の物神的性格と神秘的性質、つまり、商品の隠された真理は、ブルジョア的の生産様式における人間の本質であり、従って人間の自由とは商品としての自由(古い生産様式からの自由)。労働力が商品として市場に現出するのは、労働力それ自身の所有者、労働力を自らものとして個人によって、商品として提供され、売却されるかぎり、売却されると云う理由によつてのみ、彼はこれを自由に処理し、なければならず、すなわち彼の一身の自由な所有者でなければならず、彼と貨幣所有者とは、市場で出会いお互いに対等の商品所有者としての關係にはいる、一方は買手であり、他方は売り手である、この両者は法律上平等な個人であるという事で区別されるだけであり、自己の労働力を商品として売るには「彼は自由な人格として、自分の労働力商品として処置しうるといふこと、彼は他方において売るべき他の商品をもっていないといふこと、すなわち彼の労働力の現実化のために必要なる一切の物財から、放免され、自由であるといふこと」において二重の意味での自由を前提としているのであり、商品は他の商品と交換しうる価値を、その商品の使用価値に素材的内容として有してあり、そして商品の価値は「人間労働一般の支出を表示し、それが価

値対象としての側面は「商品と商品の社会関係において」であり、貨幣の謎をこゝに明らかにして分業が対自化され、こうした商品の性格がその「神秘的性質」の本質をなし、物神化を起させる。すなわち「商品として売る労働力の私的所有者」の諸関係は、労働生産物の社会的関係という形態をとり「商品形態は、人間にたいして彼ら自身の社会的性格を労働生産物自身の対象性格として、総労働に對する生産者の社会関係にも彼らの外に存する対象の社会的関係として反映する」と云うことである。つまりマルクスの「経済的範ちゅうの人格化」(資本の人格化)は、「近代市民社会」という名で捉えられている物資的な生産(生活)活動にねざしているゆえにその解剖を通じて市民社会の「法的諸関係および国家諸形態」等は解明されるとして市民社会の解剖学である経済学へ向かった。「経済学批判」序言)のであり、かゝる意味をまったく対象化することをぬきにして、近代の(市民社会)「政治的に解放された」、人間と人間が切結ぶ姿等と云う長崎の宇野経済思想の変更のもとに、自由な労働力商品所有者としての近代の個人人間をのべているのであり、かゝる意味において黒寛の即時的プロレタリアートから向自的プロレタリアート、(疎外された労働)自己疎外と宇野労働力商品化との接木としてのプロレタリアの自覚論理とその本質的意味において同位相であるのだ。

すでに触れてきたように「党の発想」に内在していた偏向とは、いうまでもなく、階級的基礎と綱領問題との関連で革命の戦術問題―組織問題を捉えていく組織思想という視座が欠落していることによつて生み出された偏向であり、長崎へ党―大政同Vこそその純化であるということが出来る。こうした根本的誤謬が生み出される

ところの根拠はへ叛乱Vの基礎と意味を、自然発生性を単純にへ近代の叛乱Vへと一面的に美化し、それとの対比で、党をぎりぎりの限定性で確立しようとしたことにある。つまり叛乱大衆から党を区別するのは、固有の政治の限定性と「狭さ」であるとし、その限定性の内実こそ逆の問題であったと云わねばならないのである。すなわちへ大衆叛乱は党の政治の総体性を崩し、実践的政治思想の全体を要求するといえ、そのことによつてかえって再び「政治の技術」としての党の政治を露呈させる、叛乱大衆の自然発生暴力は、いくら破壊力を発揮したとしてもそれ自身がヘゲモニーと制度としての政治革命をもたらすものではない。Vといった内的論理の下に近代の宿命としての党の存在性のへ私性Vをテクニシャンとしての盟約集団として措定しようという方向が「党の発想」には内在化していた。それは、叛乱大衆が自然発生的であるというのには、政治の技術の立ち遅れとしての自然発生性であるといふ切られているところに最も象徴されているのだ。従つて党が意識し叛乱への外的自己(他者)としてテクニシャンが提起する以外にないと定義付けることにおいてのみ党の限定性、叛乱大衆との区別性が語られているのである。

従つて、こゝからは、叛乱の暴力性の開示を革命的政治として対自化し、プロレタリアートの大衆的権力闘争機関として形成して行くことと云う視点は生まれようはずがなく、一切が叛乱大衆の暴力性をいかに政治II技術に結合させる回路を形成するかに至少化されてしまふのである。だから、叛乱大衆が如何なる政治的結合を通して権力斗争への階級的組織主体への飛躍の回路を形成するなどは不問に付されてしまふのである。以上の様な問題内容は今日における現実

的傾向として、種々のノンセクト集団が、全共闘運動の解体の総括なしえず、政治II技術主義におち込み、技術の食ひ逃げとその日暮しをサークル主義的に展開している否定的現実をとらえるならばより鮮明に理論的破綻が現実化していると云えるであろう。

こうした組織論、つまり、党と大衆の分離論をアブオリに、その背中合せ的存在としてとらえ、こゝから導びきだされる固有の党そのものが機能的媒介の手段(技術)として位相され、この発想は、第一次安保闘争における総括として、旧関西ブントの政治過程論(その後第二次ブント形成期における一つの指導理論として影響あつた)と同位相的内容をはらんでいることをみぬくことが出来る。

前衛党論においては(戦術本性)、その思考法は、革共同的な党が国家にとって代る倒錯性のアンチとして提起されたこの議論は、大衆の内なる国家の幻想性を戦術を媒介とした国家権力との実体的対決の中で暴露し、徹底した民主主義II二重権力状態に到達せしめるといふ発想であるが、これと長崎のへ党―大政同V論の構図はその意味で、根底的なところで同位相である。その意味で、長崎のへ党―大政同V論は一方で、階級形成を独自化して、大政同を革命戦略と措定(大衆権力論)し、権力(政治)との関係で党をへ技術Vとして措定することによつて権力闘争の時代にも耐えぬけるのではないかと願望した最後の「政治過程論」ということができる。こうした発想はへ動揺する同盟論Vとして「党の発想」において端的に表現されているのである。党と同盟分離論で長崎流レーニン組織思想の核心がみちびきだされていたのであるが、こゝから党↓私党、同盟↓大政同と云う二元的組織図式が生起する内的論理が準備されていたのである。すなわち叛乱大衆↓活動家組織↓党、ないしは合

法的大衆運動↓半合法的拠点活動↓非合法の職業革命家という図式である。それは単なる意識の上昇過程、その濃淡において区別するものではないと押さえられているが、その対置の内容は、叛乱の経験、各個人においては権力体験としての一回性の事象に求められており、その叛乱大衆の洞察が直観的には党の綱領思想にまでつきささり、しばしばこれを越えることを示した、つかみとっている暴力の全体性について、この系列のなかに認められた序列は端的に「政治」の枠組の「狭さ」の順序であるとし、この政治II技術性 をどれだけ意識化しているかと云う序列であるが、こうした位置を持つへ党Vは、当面、大衆との直接的关系を断たねばならないとし、別にへ党の活動Vと大衆暴力分子とを包含するへ同盟Vを分離する。同盟は当面、各拠点での叛乱を再発生させることをめざす、この大衆叛乱の組織体としてのコミュニケーションの内部で党の活動家(同盟員)と大衆が一般に云う「指導と被指導」の関係を結ぶ、コミュニケーションへ内部Vでへ党Vと大衆の関係が自然に発生するものでなければ、叛乱の外からへ党Vが介入するものでもないといふ両側面の否定の上で、当面へ党Vと叛乱の分離をへ党Vと同盟の分離として表現するへ党Vとして出発させることを持つて、そのへ党Vは同盟を通じて戦術としての外から叛乱に見出するのは、自己の綱領思想の実現である。この様な党から分離された同盟は本質的に各拠点での大衆の中にしか存在しえないが故に、党の政治(技術)と叛乱大衆の暴力の間で動揺する存在であるとして規定し、それは動揺することに意義があるとされ、その事を通して拠点におけるみずからの組織的自立をはかっていく、拠点同盟は自分が、党の下部組織であるという位置付けを拒否して、大衆暴力分子ともに拠点で自立する。この動揺

する同盟論が大政同論へと後になって純化して行くのであるが、こゝで問われていた問題は、再三再四述べているように、叛乱大衆の内にはすべてが開花されるとして美化され、「党の発想」の中で正しく展開されているところの「綱領」を大衆の中に発見するということは党の実践にとってどういふことなのかという意味を突きつめて向うことを抜きにして、そのことを階級基礎・綱領問題を問うことを回避して、大衆叛乱・近代否定・綱領とした上で、政治（技術）大衆叛乱を長崎叛乱論の文脈にそって、その上で「同盟」を位置づけたところに問題があったのである。この事の一つの歴史的論証として、「普通、レーニンの組織論では、大衆運動へと下降する段階的組織論によって党と大衆蜂起との間隙は埋められているのだと理解されていた。党は活動家・大衆組織という系列である。六〇年ブンドの学生組織でいえば、同盟、活動家集団、社学同、自治会大衆、図式であり、しばしば現実の運動で、同盟の社学同化、等が指摘された。この順序は、党綱領への大衆の、知的上昇の順番だと思われ、この序列が、日常的に制度化された場合、それが容易に官僚制の組織に形を変えることもまた指適されてきた」（結社と技術）。すなわち意識の上昇過程としての、過程の意識としての党に対する否定、我々もその提起されている限りにおいて共有して来たのであるが）からただちに「中間」組織を大衆に対する党の「下部組織」のごとく見なすことはあやまりである。この様な「中間」組織は、大衆蜂起の無限の爆発的破壊力の前に自爆してしまい、「セクト」と「大衆」へと二極分解をとけてしまうことになること云う事から、すべて問題がたてられているのであるが、この様なことを止揚するものとして党と同盟の分離が強調されていたのである。このフ

が横たわっているものであり、これは第一次ブンド以来のルカーチ的「理論と実践の媒介としての組織」と云うその無規定性を持ったものである。政治組織の理論、実践であること云うことが転倒して把握されていたのである。従って革新的発想における「党」としては理論とは何か、「党」としての組織とは何かと云う設問はその転倒した把握の結果の問題指定であり、結局は、対象実践活動としての組織実践主体の歴史的形成自身を、世界的な政党の存在との関係とみずからの依拠している階級基礎との関係においてとらえかえし、それを綱領問題として具体化することが出来ず、不断に理論の一人歩きと、一方ではプロバ、パーな「大衆組織」に溶解し、大衆運動の指導部を党の成員として構成すると云うことを不断に持たらしめたのである。また党にとっての組織総括と個人の総括とはあらかじめ分離されて語られたり、また同様に政治総括と組織総括とは始から切り離して提起され、党の分権主義と個人主義の裏返しての客観主義総括や、技術的総括に外在化させてしまい、組織実践主体と運動主体の質における転質の位相をぬきにして、最後に何々思想、（論）がなかったと云う見落し総括しか導きださなく、そのことは不断に「立派な理論さえあったら」と短絡したり、「死を決意できる共產主義思想」「万人が認められる方法論体系等と云う観念的党派へ上昇してしまうのである。このことは「ブンドについて」（青春期）映谷漢がのべている様に、「党の理論の不安定性にたいする、理論的な歯ドメとはなにかこれせんじつめればブンド（この「理論に憑かれた党」）の理論経験だったと、私は感じている。」とべられていくがこれこそ小ブルインテリゲンチヤアの日々の不安感情の気ふく激しい組織的質が、理論の不安定に投影されて行くの

レーズのもとに展開されていた「不安定で動揺する同盟」論は、藤本進治の「階級形成論」とその論理的枠はまったく同じであるといえる。大衆の内的矛盾（二重性）の展開の外化は先進的労働者集団の矛盾の媒介的手段に転倒の進展、組織の二重性の展開過程にこそ主体と手段の転倒が止揚されるというプロレタリア大衆の自己否定として問題がたてられている。すなわち「党の発想」で云うところの「動揺する同盟論」と藤本の「先進的労働者集団」は同位相であり、党はこの集団、（同盟）を媒介として大衆との結合の回路を見出すことができること云うフレイズのもとに語られているのである。藤本進治の場合は、党主体は階級の外部に強要された論理的な主体として定立され、大衆は強要されていなく、いかにその自己否定をはかって行くのかと云う事にモチーフがおかれているのに対して、長崎は党は外的他者として私性（党）であり、藤本進治とはまったく逆に大衆叛乱によって永続革命の全過程を疾駆するものへかかりたて他者においてしか自己を実現しない党の自己否定としてとらえられているのかの内的論理としての相違がある。にせよ党主体が階級形成の媒介的手段として機能主義的に把握されている点は同様なのである。もちろん藤本進治の場合は、全国政治新聞と先進労働者集団がその媒介として位置づけられているのに対して、長崎の場合の「戦術」は「動揺する同盟」を通してであるかの差は存在するが、いずれにせよ両者ともプロレタリア大衆（叛乱大衆）の外に党は存在するという命題を立てている以上、それは当然の論理的帰結なのだといわれねばならないのだ。従って長崎のテクニシャン集団の成員、政治イコール技術としての党主体の位相を階級形成の媒介的手段として機能主義的に把握せんとする党組織観

であり、そのみずからの告白としての以上の問題ではない。何故ならばこの様なことは不断にブルジョアイデオロギのもとでプロレタリアートに日々再生産されているのである。従ってそれは一般的に理論のニヒリズムでもまた理論の宿命と云う情感的メンタルなことでない。確かにブンドイズムと云われるものは、現実を生起する階級闘争に対して「実践の理論」として不断に追求して来たことと云えるが、しかし党の独得な政治理論と党の活動スタイル、作風との結合の問題、離反、乳離としてその特色があるのではない。この様な問題の抽出は逆にすべての成員の個人的能力とその資質の問題を、還元させてしまうのであり、こゝに一人一党的組織観が存在させられるのである。このことは闘争、運動側からとらえるならば「闘えないう組織は解体し闘うことによつてのみ再生が獲得される」ということとに表現される様に革命的敗北主義の精神とその組織観にもとづき、闘争の極限化、戦術の高次化を追求することによって大衆の自己否定を繰り返す、というジャコバン主義的精神をその運動の理念としていたと云うことである。その事は不断に闘争のための理論として欲求されて来たのである。その意味において運動の党であったと云えるのである。しかるに我々は第一次ブンドがそうであったように「階級意識の最高形態としての党」と云う観念的抽象物を排除しなければならぬ。「未だ党ならざるものは」に於ける「過程の意識」としての党の克服は、党と同盟の分離論においては克服、止揚は出来ないものである。それは同盟の解体であり、私党を準備する以外になく、政治局の党でしかなくと云うことであつた。しかるに同盟の中にもう一つの党を形成すると云う、旧再建委の「中常通達第3」の党の骨格と形成にみられる内容にしか結実しないの

である。更に第一次ブンドの最終的局面的経験の枠から、長崎のレーニン組織思想の核心が、その他の諸組織から党組織を厳しく区別し限定する政策にこそあると云うことから打ちだされてきたのであるが、この側面的強調によって、党と同盟の分離論が提起されているのであるが、このことをレーニン組織思想の核心として語ることは、結局福本イズムの分離におちいるのが関の山である。まさしく旧再建委の問題は、綱領問題を射程に入れた党の改組として同盟の再生が要求されていたのであり、そのことを第二次ブンドにおける分派闘争総過程において開始された綱領論争を、綱領主義と云うレッテルのもとに、誰れかが綱領の草案を提起し「この指にとまれ式に」問題をみることによって、綱領など形成しえないうと云う根強い理論的ニヒリズムが横たわっており、旧来の綱領主義にたいする一面的批判の正しさを保持していたがそのことがあまり強調されるあまり即時的反響を落ち入っていたのである。そのことの止揚を分派闘争と云う血の代償を通して我々が今日獲得した地平であるが、「遠方から」グループは「散る花より、登る月を待とう、余が暗愚なるゆえに」、「この様な事態を悲しみ、かつ私のこの数年にわたる教育のいたらなさがこの様な結果を招いた不明をはじる、貴公達に迷惑をかけたのう」と云い残り新左翼グットバイ路線への旅路へと類落していったのであるが、我々が組織思想と分派闘争以降云って来たのは、以上のブンドが持っていたその党の組織観の問題性、及び階級形成の方法、弁証法的基礎として来た政治理論的誤謬を総括することを含めて我々は主張しているのである。そしてそのことをレーニン組織思想に、真の意味で学び現代的な対自化を通して、我がものとして来たのである。「遠方から」グループの諸君の様に党

組織中核の形成をなしとげることが、我々の党形成の相対的独自性と党形成との関係における階級形成の内的連関性としての同盟の組織論における方法的視座である。その意味において、旧再建委の組織論のモチーフを、単なる継承発展ではなく、解体止揚として我々が獲得してきた痛苦な主体的な知的営為の地平がある。この困難性をいかに止揚していくのか、党と大衆の対立図式に純化したのが今日の「遠方から」のグループであり、ことに松本礼二にいたっては「東風」の座談会の発言にみられるごとく、「人より生活感情ではおくれをとりたくなかった。大衆の生活的位相（利害）における生起する権力の確かさの暴露、権力体験の確かさだけを唯一のよりどころに、民衆の人としてすべて回復することにおいて、私のブンドについての総括の祭典とノスタルジアが開始されており、私にとってのブンドとは何かと云う設問形式に落ち入り、その迷路的な心的露出の自己史の物語りは、かつてのある党の「全共闘」が「人生論」で組織しているという批難とある側面で違っており、ある意味において正しい側面を指摘しているのである。闘いによって開示された地平は、意識しようがしまいがまたその実現主体としての組織運動の質的内実が形成されているかどうかは別として、とわれない問題が根底的につきだされてきたのである。このことに真に答える党が今まで未熟であったという意味において、我々がその歴史的教訓を主体的に引き受けなければならないのである。

大衆の図式的構図とその概念をあれこれと語ることに努力熱中することではなく、党建設の具体性の下に現実的に建設することであるという正しい真理のもとに我々は、この間その作業に計画的に着手して来たのである。すなわち旧再建委の中等通過系3において、「大衆組織（権力）」と党との関連の問題の現実性を理解するとともに、大衆闘争に対する党の位置、性格が矛盾したものでしかあり得ない点をはつきり意識した上で我々の党活動を開始してきたのである」とのべられている点に最も象徴的にあらわれているがごとく、この矛盾した関係およびその矛盾の二重性こそ、どの様に止揚する回路を党建設とその戦術型構築のうちに見出し出していくかという問題としてたてなければならぬのであり、矛盾した関係として党の位相と大衆運動組織問題を、その現象的表示をそのままに固定化させ、その意識の自覚から党活動を出発させるということは「党と大衆」の対立的な主客図式化しか結局は見出し得ないのである。このことはあらゆる闘いの大衆的決起は、物象化された相対の発現形態を通してしか出発しえないと云う事の本質的把握が秘されているのである。この点はすでに長崎叛乱論における思想的問題として明らかにして来たのでここではあえて重複を避けることにする。

これらの批判を通して、組織と運動との関係、及び非公然活動と公然活動の正しい解決のあり様を明らかにし、すなわち組織建設と運動との関係を押えた上で、権力関係を基底とした階級関係の総体と諸階級勢力の分析のもとに、党の計画としての戦術と階級形成戦における組織戦術の二つの戦術の二重の展開を同盟が不断に追求し、その戦術的点検と検証を通して、綱領的具体化（権力問題）と党の

第六章 正木論文における長崎私党論のエピゴーネンとしての位相と珍発明

「党の発想とは何か」と長崎私党批判、その理論的重心である「叛乱論」の根底的批判によって、『「長崎私党論」等と云うのは歴史の偽造である』とする正木氏の主張が、理論的確信のなきによるコジツケの批判にすぎないことがまったく明白になったのである。

更に正木論文そのものの内在的批判に入ることにする。党の発想を極端に単純図式化した内容が旧再建委「同盟論文集」正木氏執筆の「革命論構築的方法的諸前提」中の「党と統一戦線」三身一体論による観念革命論批判の中で明らかにされている。この論文は党と大衆の分裂の根拠は、国家と市民社会の二重性に根拠持つと云うことを前提として展開されているのであるがこれこそまったくナンセンスなまわりない。「党の発想とは何か」において長崎は、党と大衆の分裂等とは一語も語っていないのであるが、正木と長崎の思想的差異を浮ぼりにして行く意味において重要な点であるのだ。まず何によりもブルジョア社会（階級社会）の成立と存立条件が本質的に解明されていない。第一に国家の階級支配の性格に対してまったく無知であると云うことである。国家は生産手段の私的所有と賃労働維持を前提として存在しているのであり、資本主義生産様式は、賃労働制がもつ抑圧搾取、収奪の階級支配様式を日々再生産す

ることが可能であることにおいて、ブルジョア民主主義的・上層構造を成立させているのであり、くに帝国主義列強下においては、体制内の地位にある合法的国民政党、大衆政党を了解し、議会制民主主義を形式的媒介（集票）として国民的コンセンサスの支配様式集票機構を完成させているのである。その意味においてブルジョア国家は階級支配の道具である。あらゆる形での従属、社会的悲惨、精神的退化等のプロレタリアートの苦悩が、物と物との関係、人と物との関係性において物象化された相として発現するのは、まさしくプロレタリアートのブルジョアジーに対する経済的隷属性の結果であるのだ。

すなわち資本主義的商品経済社会において、資本の人格化、商品の物性的性格は、商品が商品であることの残った価値規定が「抽象的な人間の労働」なるものであり、それは「社会実体」でありかかると「社会的実体の結晶」として、価値「商品価値」が物として存在するのである。かゝる二重性における仮象性こそ市民社会の位相を様相しているのである。ブルジョア生産様式における人間の存在論的本質は商品性存在であり、その限りに対して自由な存在として「契約的」社会関係で有り、この階級支配様式こそ、マルクスがドイデで明らかにしていることとくあくまで「支配階級の思想は当代の支配的な思想」であるのだ。

更に資本は民族と国家の総括の大に定立されているのであり、ここにブルジョアの特殊利害を共同の利害として、国家、民族、（国民）と云う大義の名目の下に、法と秩序による階級支配が貫徹されているのである。政治国家と市民社会は二重性を持つてると云う位相はこの様な意味においてである。資本の発生の条件「労働対

象と労働者との分離」と資本の現在の条件を混同し労働力の商品化を一面的にとらえそれを現実化の条件としてブルとプロの階級対立の歴史的な性格を明らかにしえないのである。党と大衆が分裂していると考えること事態、超階級的な小ブルイデオロギーに汚染されているのである。

第二には、政治国家Ⅱ市民社会の秩序が解体し、革命情勢になった時こそ、党と大衆の全面結合Ⅱ党の階級の中への溶解、階級の前進への転化が成立すると云うモチーフは、一見当然すぎる程の常識的主張に思えるが、これは「党の発想とは何か」において提示されているモチーフを、より一層単純化させ、党の前提的命題の自己完結的発想の批判の視点を、革命の結果（終局）からの逆規定から党と大衆の結合論を語っているのであるが、この様な予定調和図式こそ、逆の意味で党の自然成長性以外のなにものでもないのである。党派の独善主義、主観的恣意性を排除しようとするあまり、革命情勢待望論に落ち入っているのである。革命の権力問題（国家権力打倒）を遠い未来の問題にして現実の實踐をその彼方におしやうしてしまうのである。従ってそれまでは無責任で無規定な私党でよいと云う合理化されるのである。第三に「党は階級の外部の私的存在にすぎないのである。いかなる特権的位置も与えられていない。反乱大衆がいかなる公的位置も持たない私的存在としての階級闘争へ出発するのと、全く等価ではないのである。大衆は権力への形成過程、すなわち階級形成過程において公的性格を獲得してゆくのであり、党もまたそれへの結合を通して、階級の部分、階級の発現様式に転化するのであって、逆転して考へてはならない」と云う発想は、まったく

△過程の意識の党としての擬似前衛論であり、その党のフレーズを引きのばしたに過ぎないのである。当然党が階級の外部に私的存在として登場してくるのである。このフレーズで云うならば、階級社会の成立以降、党と大衆は非和解的に分裂していったと云う説明しかできなくなるのである。こゝに長崎のエビゴネンとしての悲劇性が存在するのであり、以上の様な正木流説明をしてしまったのである。以上の様な旧同盟論文の延長上において「遠方から」二号においての正木論文は我が同盟に対して次の様なわかつた様なわからない様な批判を展開している。「党が現時点で大衆にとって私的集団ではないのだと理解されなかり、我々が「階級形成」という用語を使うことの意味は分りはしないのである。遊撃派の諸君のごとく、アプリアーに大衆と共に存在すると主張する諸君が「階級形成」というとき、それはスターリン流か又、黒寛流の大衆が党の云うことをきくようになるあるいは黨員になるといふこと以外を意味しないのである。我々が「階級形成」といふとき、それはプロレタリア大衆が自らを権力主体へ組織してゆくことであって、この過程から大衆組織の内部に生ずる指導関係は党と大衆の間の指導関係とは異なり、大衆にとって、公的な権威として存在するのである。この公的権威の成立自体、プロレタリア大衆の階級形成の表現となるのである。このことの区別を厳密につけることなく、それどころかこの混同を「権力斗争の時代の地平」と主張し、この区別をしようとする我々を、近代主義だとか、ブルジョア思想だとか云うのだからおそまつなものである。党がプロレタリア大衆にとって、革命にとって公的権威であるのは事後的にであるのだ。一見これは革命とその政治指導組織たる党にとって逆転した構造にみえるかもしれない。だ

が物象化され、倒錯された相においてしか、発展しえない革命にとつて、党と大衆の関係もまたこの様な倒立の関係においてしか、発展はありえないのである。これを党は階級の一部だしあるいは代表だ、と未来において立証される「本質規定」を無媒介的に主張するかぎり、プロレタリア大衆の「階級への形成」は「未来永劫」ありえない。党の存在条件は、事後的に大衆の代表、革命の代表であることと云うことは云うまでもない。共産主義者の党がプロレタリア大衆の前衛であるという「本質」は革命の結果としてしか顕在化しえないし、それゆえに前衛の存在が、大衆の階級的自立を妨げはしない、と云う構造が成立しうるのだ。事前にこの「本質」を主張することこそがスターリニズムであることを我々は第一次ブンド以降の運動と組織作風として明確化してきたのであり、主張してきたのである」とのべているのだが、正木論文は、党の根拠をどこに見すえるのか、我々は、何によりも現にある階級対立に置くことと云うきわめてマルクス主義的視点から唯物史観（弁証法）と階級闘争と云う視座に立脚し、かつ資本主義批判を根幹にすえ明らかにして来たのである。この様な我々のまったく正しい主張にたいして、アプリアーに党と大衆が共に在るとのべていると、驕気になって批判し、そしてスターリン主義だ、黒寛イズムでしかないと云うまじったくのデッチ上げのデマギーを行なっているのであるが、この様な俗物批判と低水準にうんざりしているのであるが、あえて革命的に解答しておくならば、階級対立に党の根拠を措定すると云うことと、党形成、階級形成における相対的独自性としての区別性と云うことを、正木論文は合成された誤謬の把握にたつて党と大衆の混合（同）であると我々を批判しているであるが、それはまったくの誤解どころか、珍解であ

ると云えよう。我々は階級形成をなにかしらそれ自体を独自化させ
し、その上にたつて党の分離論を強調する党と
階級の二分法の主客の対立図式を根底的に批判して
来たのであり、従つてこれらの我々に対する予見的心配
としての批判は、党の同心円拡大やセクト主義の困い込みでは、真
にプロレタリア大衆の階級形成を押しはかることは出来ないと言
う程度の位相での批判でしかないのである。我々の党、階級の二元主
義や党、階級の混合(同)等の把握の誤謬のつきだしに対して「遠
方から」グループは悪しき一元論へ即時的に反発するあまり、それ
こそ未来永劫ありえない党(私党)——大政同論を接木して来たので
あり、そして彼らの私党は革命期にちよつとプロレタリア大衆に対
してお手伝いをすれば良いのだ。何故ならば革命は大衆の事業と云
う命題をふりかざすことにおいて一切免罪されると思つてゐるか
らである。この様な命題をふりかざすことが革命にとって重要な
ではない。これこそ階級闘争を一般的に抽象化して語つてゐる見本
であるのだ。かつて第二次ブンドも大衆闘争、運動こそ母なる大地
であると云う正しい理念のもとに、大衆を思い切り決起させる実践
的展開を、どの党派より大衆性を持って、大衆の内的自然発生性と
そのラジカルな戦闘性を糾合して来たのである。しかし党形成が部
分的には綱領思想をはらんでいたが全体として戦略—戦術による一
致としての結合でしかなく、大衆闘争の指導部、その戦闘団として、
フラクシオンとしての同盟に不断に溶解していき、従つて大衆運動
の解体が党の解体につながり、又戦術上の統一一致が党の分裂、分解
を招くと云う位相で幾度か我々は痛苦な経験を経験を強要されて来
たが、しかしだからと云つてアブオリにブンドには党がなかった式

の総括を我々が拒否して来た意味を再度とらえ返す必要を遠方か
ら」グループの諸君は考えてみたらどうか。まさしくブンドは運動
の党以上でも以下でもなかったと云う冷げんな事実が権力闘争の一
時代性が顕在化されて来るなかで、すなわち階級闘争の煮まじり権
力の反革命を引きだす端初において不可避にその存在根拠がとわ
れたのであり、この否定的現状に対する打破として我々の今日の党
建設の主体的課題があるのだ。この様な教訓を忘却し、徹底した分
離論をレーニン主義組織の核心問題としてつきだし、一方大衆叛乱
暴力性の開示—技術(政治)に短落させ、そこにおける党と叛乱と
の関係を、ロシア革命の二重権力状態をアナロジー化しその下じき
のもとに与件としての大衆権力(大政同論)が革命の戦略概念とし
て語られていたのである。(この点に關しての批判はすでに我々は
遊撃創刊号において過度期世界の現実が強要する諸問題との関連で
その二重権力論としてのヘゲモニー論を鮮明にしてあるのでこゝで
はあえてふれないことにする。)このことを前提として組みたてら
れていたのが「長崎前衛論」の骨子であったのだこれが旧再建委中
常通達3においての党の骨格形成に向けての政治理論的背景であ
つたのだ。この中常通達3の中で「第一次、第二次ブンドのテツ
(党建設の自然発生性)を踏まなないために大衆運動の指導者(師団
長)の連合体には絶対にしてはならない。第二次ブンドの特徴であつ
たように大衆の部隊長がその利害を背景にして中央部を構成するこ
とは組織原理として否定せねばならない」と提起されているがいわ
ゆる部隊形成論的組織形成すなわち現場主義足を持つてゐるかいな
いかと云う諸傾向、比喩的に中核は上からの官僚統制党、ブンドは
下剋上の党といわれて来たことであるが、中常通達においては克

服する作業の本格的第一歩の取り組みの姿勢は打ちだされていたこ
とはたしかである。そしてこれらの傾向に対して不信を組織する必
要があるとのべられていたのであるがこのことを持つて前中常解散
文章(遠山漢氏)の中でいみじくもべている様に、党の骨格形成
は(通達3)は全同盟に対するPBの党派闘争であったのだ、諸
君は気付かなかつたのかと提起されていることにも最も象徴され
てゐること、PBが相対的独自性を保障したフラクシオンの分派と
して位置してたと云う事を意味するものである。この遠山漢氏の
泣きことは、何故PBが当初意図した如く党派闘争の組織的貫てつ
が果しえなかつたかについては何ものべられていないのである。こ
のことは自らの指導の不確信さをインベイしてゐる何ものでもない
ことの証明であり、いつのまにか同盟員の主体的把握の無自覚性に
責任が転嫁してゐるのである。逆に云うならば同盟総体から逆に
不信をつきつけられていたと云うことをもつと深刻に総括すべきで
ある。

すなわち「動揺する不安定な同盟」を前提として、かの悪夢の全
団員会議なるものの開催に象徴されてゐること、党外党をも
含めて、党と同盟の分離を形態主義的に先行させ、その会議の内容
も盟約として儀式を行なつたと云うことにおわり同盟が同盟として
自立する契機は一向に実現しえなく、その矛盾のバラスシートの上
に党員の誰れもが責任をとらない同盟に提言できると云う奇妙な形
骸化された体制の成立を結果せしめ、政治局は二面相の顔を持ち、
ある時は同盟から無責任であり、ある時は同盟の政治局であつて、
同盟の指導部であると云う御都合主義的使いわけこそまさしく私党
の完成実態であつたのである。

こゝには単なる倫理的モラル性ではなくレーニン組織思想の中央
集権性の具体化としての党に対する責任と云う問題はカケラもない
のである。これが長崎が強調してやまなかつた厳格な党組織と他の組
織区分こそレーニン組織思想の核心であると云う実現の内実であつ
たのである。従つてマルクスが共産党宣言においてのべてゐるご
とく「共産主義者は、理論的にはプロレタリア運動の諸条件その進
路、その一般的结果を理解してゐる点で残りのプロレタリア大衆に
先じてゐるとはいえ共産主義者は、他の労働者党に對立する特別な
党ではない、共産主義は特別な原理を掲げてプロレタリア運動をそ
の型にあてはめようとするものではない」といった意味をもつと深
く私党派の諸君は理解すべきであるのだ。我々は何にかしら党
と大衆の關係性論を、それ自体を取り上げ概念的に種々の角度から
の見方論を行ない何かしら価値付与しようとする問題をたゞ来たので
はない。しかるに正木論文においてのべられてゐる「階級闘争に關
する組織論には、それほど多くの種類はない、目指す目的が多少の
違いがあつても闘争の組織論としてみるかぎり、彼らが気がつ、た
通り、党—大衆の二分法の組織論、党—大衆の二分法の否定の
組織論に究極的に大別されるのであつて、共にさまざまなバリエ
ーションを持つてゐるが、一方を批判すれば他方に乗り移るもので
ある」と称して「党—大衆の二分法の否定なる組織論」は第二次ブ
ンドの分派闘争において「党—大衆図式の止揚」を主張した叛旗派組
織論を俗っぽくし、スターリニズム的改変を行ったものであると云
う批判は、まったくまとはずれである。こゝで再度、旧再建委にお
ける組織論のモチーフにあえて立ち入り問題を鮮明にするならば特
にPB多数派の発想の基底的党観は、スターリン主義II日共のアン

チデーゼとして「政治革命においての人民の頭脳、党」と啓発されるべき。大衆」という構図の基に常に全人民の先駆としての「前衛」または「党の啓蒙主義化と墜落がおきると考える（人共産主義的人間）等々にはあえて自ら善と主張する組織はすべてスターリン党のレベルに属するのだ」と云う即時的反スタ主義の内実は、必然的に党を必要悪の紋章にしてしまふのである。この一切はかつてのセクトナンバー6のSSI集団に表現されたところの、吉本隆明流の「一切の『前衛的』コミニケーションの否定」か、かつての「先駆」一号における芳村三郎論文の「労働者階級の自己権力（党）」、等の反スタ非前衛主義のバリエーションは、大衆の自律化、労働者階級の自己権力ソビエト主義、ソビエト運動、コミニオン運動を一方では不断に発生させ、他方では吉本、谷川 等の大衆の中におけるナシ・ナリズム、大衆の風俗的土着のエネルギー論として不断に流布するのである。この様な系譜的思考に長崎の叛乱論をベースとしてプロレタリアートの概念の現象的転換（脱階級論）とがかさなりあっているのが彼らの理論的現実であり、従って正木論文は革マルのプロインスターの立場とあまり変らない、ソフトスターリン主義、ハードスターリン主義等と云うプロスタ、反スタを語っているのであるが、これはまさしく正木論文は、いまだ反スタトロツキズムと反スタマルクス主義のイデオロギーの内実の位相に在ると云う自己の理論（思想）的姿にまったく無自覚であるのだ。従ってスターリン主義批判も亦めかしい神話の崩壊、反日共イコール反スタと云うまったくの即時的反スタリン主義の位相でしかなく、この位相を以って党と大衆の有り様の問題の価値判断基準として問題がたてられているのである。しかるに我々は旧同盟論文集における正木論文

が提起している第二次ブンドの日向派と叛旗派との党派斗争の過程において、党一軍一統一戦線的論の三位一体論による観念的革命論批判の中で日向の革マル主義への屈服、斗争形成に関する党組織への一元論（円心的拡大路線）、叛旗の共同体の社会主義主義「党一」大衆」の止揚の一元論、三身一体論の社会革命の構造的解消の批判は相対的優位性を保持していたことを、清算するつもりは毛頭ないし、その意味においては我々は継承して来ているのである。問題としなければならなかったのはこの様な批判の内実の提起はきわめてある意味では左翼的常識であるところの、革命の結果をまたなければ党は何ものも正当化しえない、そのことを現に自己主張するのはスターリン主義に属するのだとし、党に対する責任の問題も、すべて倫理主義であるとし取り除き、無規定な党の本質としての私党が語られ、一方ではソビエト、コミニオン等の大衆権力機関の自然成長を待望することを前提とした党一」大衆の対立図式の固定化は、革命の国家権力の把握におりた地点で等価交換されると云うシエーマこそ決定的問題であるのだ。あえて「私党」うんぬんと云うならばみずからいまだ革命的少数派としてしか現実階級規定力を持つていないと云う自らの主体的条件の位置の問題として論じられるべきものであり、それを超普遍化することは二重の意味において間違っているのだ。また「遠方から」2号において彼らの主張が最もも端的に要約されている箇所を引用するならば「ブンドは党と大衆のダイナミックな関係を復権することから出発した。しかし更に第二次ブンドと全共運動の経験は、党と大衆」の図式は、大衆の党」の密通関係を徹底的に暴露し解体した。この経験を通じて我々は一方で大衆運動の自立の観念を徹底化し、他方でまさしくこれに對

応して、党」の観念をあるかぎりの地点にまで追いつめることを余儀なくされた。これは、党」や「大衆」の神話、両者あい密通しての神話のまさにつきつめた解体であった。ある意味では赤軍がおこなって来たことであり、まったく別の意味で我々が追求したことであり、我々はこのぎりぎりの党地点を仮に「私党」という概念で呼んだのである」とのべられているが、私党一」大衆同の二極分離、すなわち党一階級（大衆）の主客二分対立図式の固定化が彼らの到達した結論であるのだ。これに對して、同盟の改組を通して党建設と階級戦線の構築という一つであって二つの問題を単一の統一した指導のもとに可能とする党建設が要求されていたのであり、この事を分派闘争を勝利的に獲得することを通して我々はその実現の第一歩を強固に我がものとして来たのである。そのことはレーニンの「プロレタリアートと農民の革命的民々主義的独裁」一「労働同盟」というロシアにおけるブルジョア民主主義革命の戦術（云々ゆる二つの戦術）内容を教訓化し、すなわちレーニンはプロレタリア階級の独自性を断固として擁護、確保した上で、ブルジョア民主主義革命における戦術問題として提起したのであり、我々は当面する革命は社会主義革命（プロレタリア独裁）であり、その戦術は「権力奪取」、すなわち「武装蜂起」の一点に集中させ、あらゆる諸闘争の反乱を系統的に準備していくことであり、それとの相関において、階級形成戦における組織戦術としてプロレタリアートの民々主義的変革の遂行を日程のぼせて行く。物象化された相としての大衆決起、闘いを領導し権力闘争の水路へ、党の戦闘陣型体系のもとに包括することがとわれているのである。従って我々は革命の根本問題である権力問題に打倒すべ権力と樹立すべき権力に対する態度を党

の綱領的位相において一切あいまいにしてはならないのである。主観的にいくら革命的であっても、現実によつてくつがえされるといふことである。以上の我々の政治態度こそ、遠方グループの二重権力（ソビエト権力）論の長崎流焼き直しを根本的に批判して来たのであるが、現代帝国主義段階においてはより一層反動的にならざるをえないのである。正木論文の古めかしいスターリン主義批判はかつて第一次ブンドが日共に對して批判していた位相での展開でしかなく、この即時的反スタ主義の内容は、イデオロギー内実としては、反スタマルクス主義及び政治理論として反スタトロツキズムとして、ありそれの一変種として反スタ非前衛主義（党は必要悪の紋章、大衆自立）は一切の価値基準の判断を党と大衆との関係に求めそこからスターリン主義批判を行なうと云うのが正木論文に示されている即時的反スタ（小ブル的反発）主義の位相であるのだ。この様を視座から党と大衆の密通構造関係なるものは、結局自称レーニン主義者によくある、自然発生性も意識の萌芽であるから「意識性」という言葉は内部と外に密通される用語として使われていると云うレーニンの「何ををなすべきか」の外部注入論の教条的理解の批判をタテにして我々を批判しているつもりになっているのであるが、それもかつての日向派と同位相的にアナロジー化しているところに正木論文の貧困性とその低俗性があり、我々が過去への先祖帰りであるとする心的配の批判を行なっているのであるが、それは「隠居」理論の投影からは、そうしか見えないのである。すなわち党と大衆の主客の対立図式からは、すべてスタ組織論と云うレッテルしかはることができないのであるのだ。エリート意識だけがとりえの正木氏は、我が同盟を三流党派よびして自己をなぐさめているのであるが、

その様な小ブル的貴族的美意識は革命にとって障害であり近代が忘却した非合理の闇の中にも投げ捨てるべきであることを助言しておくこととする。

第七章 長崎前衛党論Ⅱ 正木論文のレーニン「なにをなすべきか」の一知半解性による同盟に対するヤユ的批判の自己破綻

では最後の問題に移ろう。「遠方から」一号の正木氏の編集後記に「レーニンの『外部注入論』なるものは自称レーニン主義者達の考えるように『注入』に意味があるのではなく、自らの思想を階級の『外部』である与自己認識した点にあると我々は考える。これを『意識性』などという言葉であいまいにしてしまつてはならない。『意識性』という言葉は内部と外部を密通させる用語として自称レーニン主義者によつて使われている」このフレーズのもとに二号の正木論文において、「党と大衆」というあいまいな図式によつて再び「党」と「大衆」の神話、「党と大衆」Ⅱ「大衆の党」の密通關係を温存したいと願うしかないのだ。「ブンドを離れた他の諸党派と同じように」うんぬんと我が同盟を批判しているが我々が旧再建委の分派斗争を党建設に結合させる闘いを経る中で獲得して来たレーニンの組織思想の問題をまったく理解する水準にない。「遠方から」グループは、我々を何にかしらレーニンの「外部注入」論を教条的歪曲して、自己隨着に落ち入る自称レーニン主義としてなぞらえ、我々にたいしてハレンチな批判を行なっているが、これはまったく

なわちレーニン自身が「外部注入」論の文作にあつたつて、カウツキーからの引用をフレーズにして展開されていると云ふ事実からも云えるのである。「社会主義的意識はプロレタリアートの階級斗争のなかへ外部からもこまれたものであるものであつて、この階級斗争のなかから原生的に生れてきたものではない」という点に最も端的に象徴されているのであるが、第一次ブンドの崩壊以後形成された社会同解放派のイデオログである滝口弘人「共産主義Ⅱ革命的マルクス主義を奪還するための闘争宣言」の論文においての第四章でレーニンの「何をなすべきか」の基礎的命題とされてきた「外部注入論」Ⅱ「外部からの意識の持ちこみ」Ⅱ「外部注入論に対する全面的な批判が展開されており、このことが社会同解放派の一つの理論的党派性をなしていたことは周知の事実であるが、こゝで再度要約的に抽出してみるならば、先の「何をなすべきか」のレーニンのカウツキーの引用文を引きだし、「この言葉が共産主義的意識がただ理論的に意識にすぎない限り正しいとおさえた上で、しかし全体として誤っている。なぜならば、共産主義的意識はプロレタリアートの存在と分ちがたく結びつけられた意識、何によりまず革命的な実践的意識であり、この意識こそ歴史において本當の現実性と力を示す意識なのである。実践的意識としての共産主義的意識は、まさに、プロレタリア階級斗争が原生的に生み出すのである」レーニンは、カウツキーと共に、理論だけを共産主義的意識とみなして、これを固定化してしまつたこゝから結論的に要約するならば、レーニン主義Ⅱボルシェヴィズムは、プロレタリアートが階級意識Ⅱ共産主義的意識を生み出すことを否定する。プロレタリアートの階級意識とプロレタリアー党は、プロレタリアートの外部から与えら

と云つてよいほどまとはずれの主観的な想ひ込みの批判であることはいうにおよばない。この正木論文における我々への批判の内容は、長崎前衛論に依拠し展開されていることは明白であろう。長崎前衛党論の中でレーニンの外部注入論について次の様を評価を打ちだしている「あの悪名高い『外部注入論』は、教養あるブルジョア、インテリゲンツィアによつて仕上げられた社会主義イデオロギーの外部注入として、いまだに宇野派などの政治理論に口をはさむときに使われているが、こうした形態の外部注入論などはカウツキーの啓蒙主義にすぎない（事実レーニンのこの定式はカウツキーの文章通りのひき写しであり、今日それがそっくりレーニンの言葉として適用しているのは奇怪な話だ）しかし実際には、レーニンの戦術思想こそ、反乱大衆にたいして党の実践が本来的に『外部』からの介入であることが明るみにだすのである。また、レーニン自身の組織論にそくしてみても、その他の諸組織から党組織を厳しく区別し限定する政策こそが、彼の組織思想の核心なのだと考えている。この核心くらべるならば、『何をなすべきか』の一つの柱である『社会主義意識の外部注入論』などは、何程のこともない啓蒙主義的組織論にすぎない。もちろん『外部注入論』は悪しき前衛党論としていまでも生きており、普通レーニンのものとしてひきあいにだされる外部注入論が文字通りのカウツキー理論の引き写しである事をもみても、レーニンの核心がこゝにないことは明らかであろう」とのべられているのである。こゝにのべられているかぎりにおいての「外部注入論」に対する批判は二面的に正しい指摘であることは我々もいさゝかも否定しないであらう。すなわちレーニンの「何をなすべきか」にも誤解される要因が存しているということである。されるほかはないとされているが、したがつて、レーニンの前衛党は、厳密にはプロレタリア党ではない、それは社会主義的階級中間層の支配する党、完全に、觀念とされたプロレタリアの党である。プロレタリアートは単にプロレタリアートの意識にすぎないとされる組合意識ばかりではなく、多かれ少かれ階級的利害の全面的対立という階級意識を、現状を廃棄し転覆しようとする政治意識（プロレタリアートの存在（生活過程Ⅱ実践）。ブルジョア奴隷制の結果の一面に對立するのではなく、その前提に敵對する。これが階級の存在の秘密である）、共産主義的意識を生みだすし、生みだすことができる。それは単に労働組合ばかりではなく、自分自身の党を自ら生みだす。従つてレーニン主義それは、それは存在と意識の二元論であり（非マルクス主義、反プロレタリア的体系である）、解放の意識的担い手は、労働者自身ではなく、社会主義的階級中間層であり、現実の労働者階級はその補完物にすぎない。それに第一に、共産主義Ⅱ革命的マルクス主義を社会的中間層に切りつめて、独立自行する「イデオロギー」となした、第二解放のための党と全労働者階級から超越させ、第三に、プロレタリアートの革命的階級への形成を外からの意識のもちこみに切りつめた、その歴史は、まさに、プロレタリア解放の自己疎外の過程であつたと結論付けられている。まさしくレーニン組織思想の真ズイをまったく理解することなく、レーニンの「カウツキーの引用文」にレーニン主義のすべてが根源性を所与していると珍解し、反レーニン主義を打ち出されているのであるが、これは自称レーニン主義の外部注入の教条的理解把握、反面教師の意味では一定の批判の有効性を保持したが、すなわち「意識のたらしこみ」Ⅱ「天下りの注入論」批判としてあるが、しかし結局はレーニン

主義組織思想そのものの全面否定に立脚するがゆえに、自称レーニン主義者の対極（アンチテーゼ）としての即目的反発、批判としてしかないのである。この社会解放派の滝口論文に典型的に表示されている様に、レーニンは社会主義意識はプロレタリアートの階級闘争の外部から持ち込まねばならないと極論してとらえてしまひ、これを一面的に教条化としてとらえる部分とそれへの即自反発のゆえにレーニン主義の全面否定か、またこの中間部の人達はその両側面を何んとか止揚する回路を見出そうとして接木的な区別と連関の使い分け的なスロラの組織論が革マル派に典型的に象徴されているのである。レーニン型の前衛党論の一面性に関する組織本質的反省と称して、レーニンの「何をなすべきか」が「職業革命家集団」を労働者階級の外部にあるものとして前提的に把握され、「いわゆる職業革命家集団が労働者へその外部から働きかけることによつて労働者を現象的に左傾化させるとか、また一方では前衛党は職業革命家集団の歪少化と極端化の必然的結果として前衛党のスターリニスト的疎外が発生せしめると云う論拠から党は外にあって内にある。」すなわち外部からの働きかけと、内部からの闘争と云う区別と連関論が黒寛の組織論序説で語られているところの「労働運動の内部に実存してたゞかう前衛組織基本組織としての経営細胞とその外部の指導部（職業革命家集団）とが前衛党の構成要素として、それらの本質的かつ実体的同一性を確保し実現してゆく場合には、『外部』とが有機的に統合された統一を確保 実現してゆく場合には、『外部』と、『内部』とが有機的に統合された統一な闘争の全面的な推進はプロレタリア階級の内的可能性の現実的展開となり、かゝるものとして解放の必然性は指定する前提、その絶体的基礎が、ほかならぬ

革命的な階級論なのである」かつての日向派（戦旗派）の諸君の軍隊をウクライナとする階級闘争、等の主張もこの論理をアレンジして語られていたのである。革マル派の「プロレタリアの本隊」とその唯一の党、「党」革命の主体たるプロレタリアート」と云うパリエーションの基に日本の反スタ、主義運動語られているが、その実践の内実は民々主義運動と組合主義的政治への拝跪を露呈しているのである。このことが当然レーニンの中央集権思想を否定していくのは当然である。結局は、党は内において外にある組織図式は「はしのあげ下げの意識の濃短の均一化、平準化」としてのべられていくと云うことである。

レーニンの「何をなすべきか」中での「外部注入論」において根本的に問題とされていたのは、職業革命家集団が社会的意識（イデオロギー）をプロレタリアートの階級闘争の外部から持ち込まなければならぬと思ひ込みに把握されているところに混乱の原因があるのだ。この意味の次元においての長崎前衛論における啓蒙主義的組織論批判は正しい指摘であると云える。又正木氏がのべている「自らの思想を階級の『外部』であると自己認識した点にある」と云う指摘も反面正しいと云えよう。しかし、レーニンの云うところの社会主義的意識は、科学的な社会主義の発生と成立のことに他ならぬのである。「何をなすべきか」の中で次の様に明記されている。「およそ労働運動の自然発生性のまゝに拝跪すること、およそ意識的要素の役割を軽視することは、とりもなおさずその軽視する人がそれを望むと望まないとにまつたかゝりなく労働者にたいするブルジョアイデオロギーの影響を強めることを意味する。」ということである。イデオロギーの過大評価、意識的要素の役

割の誇張、等々について論じる人々にはみな、労働者が、自分の運動を指導者たちの手からもぎとり、さえすれば、純労働運動は独自のイデオロギーをつくりあげることができると、また現にくりあげつゝあると想像しているのである。だがこれはひどいまちがひである。さらにレーニンは「社会民々主義的意識が、プロレタリアートの闘争の必然的な、直接の結果の中から生まれてこない、社会主義の学説と階級闘争はともに資本主義社会の物質的基礎に根ざしているのであるが、同時平行的に生まれるのではなく、それぞれ異なった前提条件から生れるのである。そして社会民々主義的意識が一つの科学的な世界観として完成される」とし労働運動がこの意識と結合されない限り、それはブルジョアイデオロギーに影響されるとし「なぜ自然発生的運動、最小抵抗線をすゝむ運動は、ほかならぬブルジョア、イデオロギーの支配にむかひてすゝむのか、それはブルジョアイデオロギーが社会主義的イデオロギーより、その起原においてずっと古く、いっそう全面的に仕上げられていて、はかりしれないほど多くの普及手段をもっている、単純な理由による」すなわちこの単純な理由にこそ根本的問題が秘そんでいるのである。レーニンがこゝで明らかにしていることは、プロレタリア大衆に内在化する意識のもう一つの側面、すなわち「生活の慣習の力の恐しさ」資本主義社会の属性、寄生性に規定されている点こそブルジョアイデオロギーが日々再生産され影響を与えて行く点である。レーニンはこの点への鋭い洞察を持って、主張しているのである。長崎前衛党論は、資本主義社会との関連での対象化を捨象して、党とプロレタリア大衆との関係からのみとらえようとするから、レーニンの組織を「遅れた部隊にたいする先進部隊の『組織された不信』としてつくりあげよう

としたとか、「人民の党」の原理的否認にまでいきついたのである。等とする歪曲的極論へみちびかれていくのである。以上で明らかなくとくレーニンが社会的意識としてのマルクス主義の科学的な社会主義の学説（発生と成立）のことに他かならないのである。それとレーニンが労働運動と社会主義を結合しようと提起している社会主義的意識の「外部」からの持ち込みと混同されてはならないのである。「階級的、政治的意識は、外部からしか、つまり経済闘争の外部から、労働者と雇い主との関係の圏外からしか、労働者にもたらすことができない、この知識を汲みとつてくることのできる唯一の分野は、すべての階級および層と国家および政府との関係の分野、すべての階級の相互関係の領域である」、すなわちレーニンはこゝでは、社会的意識は「経済闘争の外部」から「労働者の雇主に對する圏外」から注入することを主張しているわけではない。労働者の階級闘争も「また社会主義的意識をくみとつてくることの出発領域」として、この知識をくみとつてくる領域のうちの一部分に含まれているのである。従つてこの視点に立脚することにおいて全人民的政治闘争の回路形成と大衆的権力闘争（革命的な政治闘争）の意義がより鮮明になるのである、かつ全面的政治暴露の重要性も明らかになるのである、今日の問題に引きつけて云うならば、「春闘構造」解体と云う我々の政治主張は「歴史的妥協」「階級協調の和解」「保革連合」の攻勢の本質を見抜き、それ故に春闘構造の下で抑圧され、ばじきだされている部分に依拠する階級的基礎の解明を通して明らかにして来た点こそ、まさしく共産主義運動と労働者運動の結合の問題としてとられていくのである。まさしくあらゆる改良闘争は資本主義生産様式の生み

たす諸結果の闘いであるが、この闘いは物象化された相としてしか出
発しないのであり、この様な闘いの位相を利用し、プロレタリア解放
の闘いの条件を有利にして行くところの戦闘的プロレタリアートの
陣型へと集約されていかなければならぬのである。

まさしくレーニンの「何をなすべきか」における外部注入論を全
て「純粹意志が革命原動力」とみなし社会主義のための闘争と労働
者階級の闘争を切りはなして考へるは逆の意味で経済主義であるのだ。こ
れがレーニンが云うところの帝国主義的経済主義なのであり、この
裏には労働者階級の闘いが即経済闘争であると固定化されているの
である。以上の点を踏まえて明確にしなければならぬことは、正
木論文及び長崎前衛論は、外部注入論批判の前半は正しく後半
はあやまっているのである。何故ならば、正木氏は自称レーニン主
着者が混同している「外部」の意味は指摘しているが、ではレーニ
ンの外部注入は長崎前衛党のべているカウツキーの引うつしであ
ると理由も含めて一切捨てさり、外部注入論にレーニンの組織の核
心がないとして、党組織の厳格な区別と限定がレーニン組織思想であ
るといふ形で対置しているが、「外部の注入」として問題の二つの意
味の位相の違いを理解しえなく、一方の誤まるところを正木論文は自
然発生性と目的意識性のレーニンのフレーズを先のレーニンの外部
注入論の誤まれる把握批判に基礎おき、そこから党一大衆の密通構
造に落ち入ると批判しているのであるが、これはやはり根本的であ
まりである。まず第一に「労働者の雇主に對する」（経済闘争）
の外部から持ちこむ意識と云う意味において明確に理解されてい
なく、又レーニンのべている自然発生性（要素）とは本質上意識性

る労働運動の初期にみられるその闘争の異様なはげしさ、その多様
さや執拗さは、相互扶助や、賃金値上げの経済闘争から、工場法改
正運動、議会改革運動などの行政的闘争から、またオウエンらの空
想社会主義にもとづく協同組合運動、機械のうちこわしからの小暴
動や騒擾にいたるまで、ほとんどすべての種類の労働運動が物語っ
ているように、これがレーニンが云う原始的「一撥」の暴動、この
噴出する労働者の闘争への破壊的エネルギーは、持続的な回路を見
出すことは出来ず、内部に蓄積された巨大な瞬間的、自然発生性その
ものエネルギーは、無政府の闘争、衝動的暴動となつて幾度となく
その爆発をくり返すより仕方がなか、たのである。しかしレーニン
はこの原始的な一撥、乱反射的蜂起においても「そこには意識があ
る程度めざめたことをあらわすのであった」としてとらえ、つまり、「労
働者は、自分らを仕込んでいる制度が確固不動のものであるという
古くからの信仰を失って、集団的反抗の必要を……理解しはじめた
とは云わないが……感じはじめ、上長への奴隷的従順をきっぱりと
捨てたのである。だがそれは闘争であるよりも、はるかに多く
の絶望と復讐心との現われであった。」しかし「九〇年代のストライ
キは、これにくらべてはるかに多くの意識のひらめきを示している。
すなわち明確な要求を提出したり、どういつ時機が都合かをあ
らじめ考慮したり、よく知られている他の地方の事例や、実例を検
討したりしている。等々。一揆が抑圧された人々の蜂起でしか
なかつたのたいして、組織的なストライキはすでに階級闘争の芽
ばえにすぎない。それ自体としてみれば、これらのストライキは組
合主義的闘争であった。まだ社会民主主義的闘争ではなかつた。そ
れは労働者の雇い主との敵対のめざめ示すものであつたが、しかし

の萌芽形態にほかならないということは、一つにはその歴史的側
面との関連のべているのである。「有名な一八九六年のペテルブル
ツクの産業戦争のあと、労働者のストライキも同じような全般的な
性格をおびるにいたつた。ストライキがロシア全土にひろがったこ
とは、新しく高まりつゝあつた人民運動の深刻さを明らかに立証す
るものであつた。このストライキ運動こそ自然発生性的なものとし
て認めなければならぬであろう。しかし、自然発生性といつても
いろいろある、ロシアの七〇年代、六〇年代にも（それどころか一
九世紀の前半にも）ストライキもあつたし、自然発生性的な機械の破
壊等ともなつたのである。

こういふ「一撥」にくらべると、九〇年のストライキなどは、意識的
と云つてもよいくらいである」とのべられていることは、まさしく
このことはマルクスエンゲルスも明らかにしている様に、イギリスの
様に労働者階級が最もドラスタチックに現出した国にあつても、し
かも一八五〇年にいたつても、労働者の政治闘争の主要な問題点は
土地問題であつた、この様な龐大な貧民大衆はまだ農民の絆をた
つことができない状態であつたのである。「労働者の主要な部分は
以前の農民か、あるいは生き生きとした農民の記憶と本能的な農民
的な態度を持った人々から成つていた。彼らは工場を嫌つたが、そ
れが工場が恐ろしく悪い条件で恐ろしく長い時間苛酷で厭わしい規律
の下で働かねばならぬ憎むべき場所であつたばかりでなく、またそ
れが新奇なもので、習慣的生活様式を破壊した主要な手段だつたから
であつた。最も基礎的な点において、チャーティズムに至る、否
それを含めてあらゆる労働者階級の暴動は一つの農民運動であつた」
（「コール」「イギリス労働運動史」）に示される様に多くの国におけ

労働者は、自分たちの利害が今日の政治、社会体全
体と和解しえないように対立している意識、すなわ
ち社会民主主義的意識を持つていなかった」まさしくこれである。
階級対立の非和解性を基礎として階級闘争の原則の確立その意識か
らの実践的対自化と云う意味において「九〇年代のストライキは、
『一撥』にくらべれば非常な進歩であつたにもかゝらず、やはり
純然たる自然発生的運動の範囲を出なかつた。その意味で自然発生
性は目的意識の萌芽形態に他ならない」とレーニンが提示したのであ
る。レーニンが「何をなすべきか？」の中で「だからこそ意識性と
自然発生性との関係という問題はきわめて大きな一般的関心をひく
のであつて、この問題については非常にくわしく論じなければなら
ない。」と強く言つていふごとく、組織と運動との関係における二
重性を持った矛盾を、抽象的なものから具体的なものへとまさくす
ることを通して、すなわち大衆の自然発生性を契機とした運動内部
における目的意識性の萌芽としての自然発生性がかゝえ込んでいる大衆の
自然成長性における矛盾、まさしくこのことは「人と人との社会
的諸関係」が「人と人との物象的關係及び物と物との社会關係とし
て現象的に表示する」転倒した資本主義社会の特殊的存在規定性
の内密構造において生起しているのである。従つて物象化さ
れた相対的商品所有者としての存在」として、政治的位相で云うな
らば、組合主義的意識に行きつく必然性をもつのである。このこと
に關してレーニンは、雇主と労働者と云う商品の交換關係において
最低不十分なが明らかになっているのである。「経済闘争とは、労
働力を販売するいっそう有利な条件を獲得するために、労働条件と
生活状態を改善するために、労働者が雇い主にたいしておこなう集

团的闘争である。この闘争は、必然的に職業的闘争である。」とのべられているごとく、「本質上、この暴露は、その当の職業の労働者と彼らの雇い主との関係をとらえただけで、それによってなしとげられるのは、労働の売り手が、この「商品」をより有利な条件で売ることは、また純商業取引を基盤として買い手とたゞかうことを学びとったことだけであつた。こういう暴露は（革命家の組織がそれを一定のやり方で利用するときには）社会民主主義的活動の端緒とも、構成的部分となることのできるものであつたが、しかしまた「純労働組合」闘争と非社会民主主義的な労働運動とにみちびくものとなりえた（そして自然発生性の前に拝跪するときには、そうなるはかなかつた）。社会民主党は、労働力販売の有利な条件を獲得するための労働者階級の闘争を指導するだけでなく、また、無産者が金持に身売りしなければならぬような社会制度をなくすための彼らの闘争をも指導する。社会民主党は、ひとりのその当該の企業集団にたいしてはなしに、現代社会の総ての階級に対して、組織された政治暴力としての国家に対して、労働者階級を代表するのである。」とのべられている。

つまり、組合主義政治と社会民主主義政治の相違の問題を労働運動の問題に引きつけて明らかにされているのであるが、しかるにこの様な資本家とプロレタリア大衆の種々の闘いが、当然にもツアの専制支配下において、強要された現実には、レーニンが「何をなすべきか」の中でも明らかにしているごとく、「政治的自由の行なわれている国々では、職場的組織の相違が明瞭であるのは、労働組合と社会民主党の相違が明瞭であるのと同様である。もちろん後者の前者に対する関係は、各国それぞれの歴史的法律的その他の条件

と革命的積極性を育てること」としてのレーニンの外部注入論の現実的根拠が存在しているのである。しかるに正木論文は、大衆の自然発生性と、共産主義者の目的意識性との関係を、運動内部の矛盾として統一的にとらえたと云うことを、矛盾対立としてしか見ないがゆえに結局は、「レーニン主義の基礎」で語られているスターリンの自然発生性、成長性の根拠をすべて捨象して目的意識性ということを主意主義的に置き交える発想。すなわち自然成長性と意識性との問題として機械的に分離し、折衷主義的に定式化されているのと、レーニンの外部注入論とはまったく別種なものであると云うことを真に学ぶことをせず、スターリン的内容の基礎のもとで内と外の密通関係等と云う静止的な図式をのべているのであるが、これも正木の珍発明でしかないことはいふまでもない。あえて私分法的に云うならば自らの立脚点の自己破産は、もはや火野本人への道、「セクト 第六」への回帰しか残されていないのである。こゝに正木論文の悲喜劇性が表示されているのであると云えよう。旧再建委における「大衆の問題意識をくみ取って大衆に投げ返してやる」とか「個別闘争の徹底化、深化」等の方法的内容は、歴史的現実の要請としての実践的側面としてあつたが、他方ではやはりレーニン「何をなすべきか」の「手前勝手な理解にもとづく側面も決して軽視しえないのである。以上の両側面を我々は現在革命的に止揚する地平に到達していると云うことが我々の正木論文批判においてより鮮明になつたと云うことができるだろう。まさしく我々こそ旧再建委の革命的止揚派としてあると云うことがこれで何によりも明確になつたであらう。

に応じて不可避に変化する。けれども、労働組合の組織と社会民主々の組織が一致するようなことは、自由な諸国では問題にならない。ところがロシアで一見したところ、専制政府の圧制が社会民主主義組織が労働組合組織の間の相違を消し去っているかのようである。これはあらゆる労働組合サークルが禁止されており、労働者の経済闘争が主要に現われ、また道具であるストライキは、全体的な刑事上の犯罪となつていふことにおいて明らかである」とのべられているようにロシアの歴史的現実条件下にあって、積極的に社会民主主義政治の展開、全面的政治暴露を通じて煽動することを媒介として、「経済闘争そのものにできるだけ政治性を付与するということである」

とか「経済闘争は、大衆を積極的な政治闘争にひきいれるためにもつとも広範に適用されるべき手段である」という主張を論拠にしている経済主義者の潮流部分に対しての党派闘争を通して、レーニンは経済闘争の位相をより実践的問題としてつぎだしながら明らかにしているのである。「革命的民主主義は、改良のための闘争を、つねにその活動にふくめてきたし、今でも含めていふ。だが、革命的な社会民主主義は、政府に各種の施策を実施せよという要求を提出するためにはなしに、この政府が専制政府であることをやめるといふ要求を提出するためにこそ、経済的煽動を利用するのである。そればかりではない。革命的な社会民主主義は、この要求を、たんに経済闘争の基盤のうえに提出するだけでなく、またおよそあらゆる社会生活の現われにもとづいて提出することを自分の義務と考えている。一言でいえば、革命的民主主義は、改良のための闘争を、全体に対する部分として、自由と社会主義のための闘争に従属させるのである」こゝに社会民主主義の政治の展開（政治暴露

（※注釈、一九六五年十二月一日「共産主義」復刊一号における「戦後政治過程の終焉」咲谷漢の論文は、戦後秩序の擬制を反帝意識の突出によって赤裸々に権力との対時関係において煮め上げ、暴露すると云う反帝斗争論の一つのモチーフになつていた点において、我々は歴史の意味を踏まえて評価する。我が同盟の重要な参考文献の一つである。）



2-5 Was' übrigens' bis in' der' Logik' enlose Rechtgläubigkeit „Stiftners“ (gegen) sophie (bisher schon daran gesehen) darin bei Feuerbach (sehen) finden, dessen Illug für (Sankt Max) Jacques 80 - und (gesehen) „erkühnen“ 81-82 wenn' den 18 Sankt Bruno, dessen (Profession) F en von (Illusionen) Vorstellungen (die chen (über) von' ihren' bestimmten e

『党—大政同—路線の理論的基礎—長崎『叛乱論』政治的共同性の構造』の内的解体とその地平

唯物史観・共産主義と綱領問題

山下 誠

第一章	科学とイデオロギーの分離—宇野方法論批判と第一次 ブンド革通主義の長崎的総括の破綻	52
第二章	長崎叛乱論の近代主義的位相と価値形態論—サル トルの挫折と世界の無—永続運動の悲劇	60
第三章	サルトル—長崎的相剋図式の超克とマルクス主義の世 界観—唯物史観の根本的視座とは何か	69
第四章	「叛乱論」の自己否定—「政治的共同性の構造」の再 度の破産	78
第五章	おわりに—全総—二全総路線を更に前進させるため に	87



empirisch) heuchlerisch festhalten.
i° ihm° bis irdischen° Welt° aufzei
hrase° vorkommenden 33 u
-38 Jahrbüchern (u. A. p. 72). Inde
des) damals (bei Gelegenheit eines
allgemeiner philosophischer Ausd
er° (Redeweise°) Phrasologie° gesc
9b1/ traditionell (und zufällig sich
„Gattung“ pp° 40-41 Veranlass
cklungen) die wirkliche Entwicklun

へはじめに

同盟第二回全国同盟員総会は、一全総において獲ちとられた同盟の革命的視座とその視座をより拡大—深化する総会として決定的な前進をもたらした。遠方派の同盟からの脱落、資本主義体制への明確な屈服がそのエセ左翼的言辞にもかかわらず、今や同盟内外にわたって明確な事実として認識され、彼らはその腐敗と墮落した姿を自から満天下にさらしている。

しかしながら、われわれは、彼らを革命的戦線の外に放逐したことに満足するだけではない、彼らの腐敗と墮落の根源をより明確にし、その思想的根拠そのものも解体しつくさねばならない。そしてまたそのことは同時に、われわれが、第一次ブント—第二次ブントの闘いの血の教訓をまさに「血の教訓」として受けとめ、われわれ自身の血肉と化することもあるのだ。なぜならば、長崎叛乱論から私党—大政同論への道は、日共との分派闘争をその階級の基礎の問題、つまりは「党の根拠」の問題にまで深化させずして、宇野経済学と黒田疎外論に依拠して別党コース（ブント第三次綱領草案）へと進んだ第一次ブント—第二次ブントの一つの必然的な結果だからである。

長崎は「ブントについて」の中で、××論にもとづく戦略主義の止揚について語り、大政同論こそ、そうした過去の革通的な戦略王

義を止揚した革命戦略であると主張しているが、われわれはそうした主張そのものが、旧来の思考の延長線上に存在していることを発見しないわけにはいかない。そうではなく逆に、私党—大政同論に至って完結した長崎の体系そのものが、「価値論なき原理論」（宇野経済学）に立脚した、唯物史観と革命思想を根底から洗い流した小ブル思想に立脚したものに過ぎないのだ。長崎がフアンストの理論家カール・シュミットを無批判的に引用し、「政治とは敵と味方を峻別することである」と説くとき、政治はその階級基礎を有さない、根なし草の共同幻想へと短絡していく。だからこそ、彼らは、ブルジョアジーへ屈服したばかりか、右翼—フアンストと手を結びその運動の基盤は同一である等とホザクことになってしまったのだ。

したがって、われわれは、長崎私党論に至る長崎の全理論が依拠している宇野経済学そのものの非マルクス主義的性格を暴虐つづ、長崎理論の小ブル的性格を対自化せねばならないだろう。

第一章 科学とイデオロギーの分離—宇野方法論 批判と第一次ブント革通主義の長崎的総括の破綻

(一)

長崎は「ブントについて」(遠方創刊号)において次のように語る。「実際、当時の同盟文献にさっとでも目をとらしてみれば、『世界経済論』や『日本経済論』ともいべき論文が法外なスペースを占めていることに気づく。この事実はすでに『東大意見書』も指摘したことだが、現実のブントの大衆闘争がどのような理論を要求するかという観点からほとんど欠除していることは悲しいことだ。……その意味からすれば、安保闘争ははじめて同盟のあらゆる理論活動を現実の大衆反乱のもつ問題から出発させるべき転換点に位置していた。……革命の通達派はまさにこの地点にたつて、『実践的理論』への同盟の性格転換を要求した。だが彼らは同時に、この『実践的理論』が左半世界についての分析的理論(一種の政治—経済論ともいべき政策論)の性格をもつべきことは疑わなかった。……今日からみれば、『同盟の理論の破綻』の根源は、『自己金融論』や『政策論』も含めて、おおよそ『一論』にあったのではないことははっきりしている。こうした分析的理論を同盟がこなさしうる実践的作風についての理論——つまり後にみるように階級形成論や組織

論のレベル——こそが、実は党の固有の理論の仕事であることを、同盟ははつきりとつかむことができなかった。」

この長崎の平易な発言の中に「叛乱論」—「前衛党論」—「大政同論」をつなぐモチーフをみてとることができる。すなわち、ブント一五年を生き続けてきた革通派「長崎浩」のそれは個別的総括であるとともに、理論家「長崎」の理論的総括であるといってもよい。

つまり、長崎の「革通派」総括の位相は、この発言の中にもみられるように「世界経済論」「日本経済論」といった「分析諸科学」に对立して「党の理論とはなにか」という問いを発すること自体にあるといつてもよい。そうであるからこそ、かつての分派闘争の直接の対象であったプロ通派とも、この一点でのみ和解することが可能となる。「プロ通派は党指導による、労働者階級の武装」の欠除を推論する。しかし、この結論の相違はみかけほど大きなものではないし、結論自体の無内容さについても両派ともかわらない」と。

こうして長崎は、一方で大衆運動そのものの理論として「叛乱論」を全共闘運動と安保闘争の総括をふまえた形で提出しつつ、それを「大政同略」という党にとっての「戦略」論へと変型し、党の組織論を私党論という形に定式化した。

われわれは、今まで、こうした長崎の体系に対してわれわれの根本的視座からする批判を行ってきたが、ここでは彼の「○○論」批判を部分的に行なうのではなく、彼の全体系に即して問題にせねばならない。

先に引用した彼の発言でもみられるように、われわれは、彼のこうした「社会批判学」からの「党の理論」の分離という問題意識そ

のものを吟味することから開始する必要があるだろう。このことは長崎が「またマルクス主義諸学の内容を精緻にする——」宇野教授が一生かけて「つくりあげる——」ことによつても、根本的に代位しなす」とか「いまだに『党派の機関紙』に宇野経済学の批判などが長々とつたりする悲しむべき現実も、この『悪戦』の後遺症の一つである」となど、半ば、ヤユして発言している宇野との日本の新左翼の悪戦苦闘の歴史をいわば、長崎が素通りして無意識にか意識的にか宇野の思想的枠内からしか出発し得ない自己を正当化することを物語っている。こうした長崎とわれわれとの根本的な相違はそれはあらゆるところにおける思想的対立として表面化せざるを得ないが、マルクス主義を現代史証科学をつぎぬけた地平で定位置せようとするのか、それともマルクス主義を近代諸科学(ブルジョア分析科学)の位相にひきもどし、一方において「科学」としての純化とイデオロギーの対立という二元主義におとしこめるのかといった差であるといつてもよい。たとえば長崎浩のエビゴーン正木真一が「遠方から」(二号)で、ブルジョア諸科学の手法をかりて「党—大衆の二分法の組織論」と「党—大衆の二分法の否定の組織論」に究極的には大別されるのであって「などと述べている思想的水準の低さの問題も実はこの問題と関連する。

彼らのことばでいえば、問われている問題はエビゴーン正木が「レーニン主義の復権」などと、未だマルクス主義の「伝統」の尻尾をつけてしか発言し得ないのに、彼らのイデオログである長崎がレーニン主義を学ぶと称しつつ、レーニンを形式的に捉えることによつて革命論をマルクスレーニン主義から切りはなし、「現

象学と実存主義」に基礎を置こうと涙ぐましい反革命的な努力を重ねていることなど理解の外にあるようだ。長崎がフアンズムの理論家カール・シュミットに異常な興味を示し、「政治とは敵と味方を峻別することである。」といった政治の現象にしか興味を示さず、階級の本質性という事に關して一貫して語らないことを見ればそれは明白なことなのだが……。

このような方向へと長崎を押しやったのは、言うまでもなく、先に引用したように第一次ブントの総括(革通派)であったことは明白なことだ。それはすでに叛乱論における宇野経済学の扱い方の中にあらわれている。叛乱論第二章の「戦後精神の敗北」の中で、長崎は、宇野理論の歴史の意味を、「資本主義の崩壊は科学的必然なのではなく、むしろ、この必然性は実践活動のうちこそ確保されるところという宇野理論の主張を、私たちは額面通り受けとつてこの『実践活動』をプロパーにひき受けるべく政治の領域へ出かけて行った」ことに求めている。つまり、スターリン批判によつて崩壊したマルクス主義の神話—党が価値であり同時に科学であるという神話からの飛躍、スプリングボードとして宇野経済学が位置づけられることになったのである。「科学」と「実践」の分離を基礎として、「実践」が全面的に解放されたことを長崎は評価するのである。——これが彼のマルクス主義からの飛翔の第一歩であったといつてもかまざる。しかも、このような分離は、宇野の資本論の原論への純化の理論的—実践的な結果である以上、長崎の思考も、この「純化」を内的に取り込んだものであることは自明なことである。したがってわれわれは、こうした長崎理論の根底にある宇野理論そのものの「

科学」と「イデオロギー」の分離論の基礎」にあるところの資本論の「原論への純化」の問題をみなければならぬ。(宇野経済学についての批判は、様々な角度からなされているが、ここではさしあたって「科学とイデオロギー」の分離と「労働力の商品化の問題」「価値形態論」の問題にかぎってみることにしよう。)

宇野経済学の特徴は「純粋な資本主義社会」なるものを想定するところから開始されたがこの純粋なる資本主義社会を想定するということは、一切の不純な要素を切り落すことを意味している。そして、この不純なる要素の代表がまず第一に労働者階級の資本に対する反抗があることは自明であるが、これを切り落すところから宇野は出発する。宇野はいう。「資本論でマルクスは、例えば労働日でも賃金論でも、階級闘争として論じようとするのだが労働力商品化が前提されると、階級闘争は背後にかくれるのです。なぜなら商品の売買なんだから外形的には階級がないわけです。それをマルクスは何か階級闘争というのを言わずにいられなかったのではないかと思うが『共産党宣言』と同じように階級闘争の歴史として解明しようという傾向が強い」と述べている。問題の核心はここにある。つまり、宇野は「純粋の資本主義社会」を想定することでもって、いわば、労働者の反抗という歴史の必然性を捨象した。労働者はすでに宇野のコトバでいえば、そうした労働力の商品化という外形を与えられることによって、非人間化つまりは物と同様に与えられるべきものとなった。ところで、歴史の発展動因である労働力がこのように静止させられれば、歴史は、その歯車を止めざるを得ない。

のではなく、物理力としての生産力に求めざるを得なくなるのも、また、論理的必然なのである。宇野はその「経済政策論」において、帝国主義段階の成立を重工業に求める。すなわち、その第三篇、第一章第一節での資本の集積の増大と重工業における固定資本の巨大化についての記述が次のような一節で始められていることに象徴される。「重工業、特に鉄工業の十九世紀後半における発展は、その経営に要する資本を異常に増加することになった。それは鉄道の普及による鉄の需要増加を伴って行なわれた製鋼法の進歩とともに鋼鉄の使用を増加し、ますます大規模の溶鋼炉や製鋼炉が作られることになり云々」そして続けていう。「それは単に資本主義の発展に伴う資本の集中、集積の増大によるものとはいえない。綿工業によって代表された産業資本の時代にはみられなかったような固定資本の巨大化をもたらしたのである」と。

宇野の段階論＝帝国主義論が、固定資本の巨大化＝重工業の登場として展開されるを得ないのは、すでにみたように、歴史の動力を、「労働」とその社会的編成」に求めるのではなく、歴史を物理的力能としての「生産力」の発展へ求めたことの結果であることはいうまでもないが、それは、「労働」と「労働者階級」そのものもつ意味を「労働力の商品化論」によって切つ捨て、「労働力なるもの」を具体化し、物象化してとらえた結果であるといえるだろう。そもそも「労働力なるもの」がそれ自身として「物自体」として存在しない以上、問題は、現実の労働者がそれぞれの意図の下に、資本と対立し、あるいは協力して、生産を行っていること自体が「生産力」なのであるという視点の欠如が、いわば「物理的な生産力」をして歴史の主役にせざるを得なかったのである。

ここで、いわば原理論が成立することになるのだが、宇野も認めるように、こうした純粋の資本主義というのは、歴史的に実在しよるはずがない。そこで、宇野はいう「しかし歴史的發展は決してそういう純化を一筋に続けるものではなかった。資本主義は十九世紀七十年代以後漸次にいわゆる金融資本の時代を展開し、多かれ少かれ旧来の小生産者の社会層を残存せしめつつ益々発展することになったのであって、もはや単純に経済学の原理に想定されるような純粋の資本主義社会を実現する方向に進みつつあるものとはいえない。なったのである。すなわち経済学は、ここにおいて原理のほかに原理を基準としながら資本主義の歴史的發展過程を段階論的に解明する、特殊の研究を必要とすることになったのであった」として、原理論を歴史の現実から切り離さざるを得なくなるのである。

そして、しかも「一定の生産様式ないし、産業段階は、つねに一定の協働の様式ないし社会の段階と結びついているということ、そしてこの協働の様式がそれ自身生産力なのである。」「社会的威力、すなわち幾重にも屈折された生産力——これはさまざまな諸個人の企業において制約されている協働によって生成するものだが——それは協働そのものが自由意志的ではなく自然的であるために、諸個人には、彼ら自身の統合された威力とはみえず、疎遠な彼らの外部に自存する強力のごとくみえる。」(ドイツ・イデオロギー)とマルクスがドイツ・イデオロギーで明らかに述べているように、生産力とは協働の様式、諸個人の分業のありようであるとするならば、労働者と資本家の関係と協働をばらむ生きた関係として描くことを「労働力の商品化」なる言葉でもって切つ捨てた宇野にとって今や歴史の発展の原動力は「労働」とその社会的編成」にある

こうした宇野の思想は、また、自らが資本論を純化したと称する「原理論」においても「歴史の主役Vの無視として表われざるを得ない。宇野は自からの原理論の積極的意義を「労働価値説の論証は、従来の方法とは異って、資本の生産過程」において行なわれねばならない」と述べているが、実は問題は、ここに存在している。

宇野のマルクス批判は資本論が、「より複雑な労働は、ただ数乗された、またはむしろ数倍された単純労働にすぎないものとみなされ、したがってより少量の複雑労働がより大量の単純労働に等しいことになる。この還元が絶えずおこなわれていることは、経験の示すところである。或る商品がどんなに複雑な労働生産物であっても、その価値は、その商品を単純労働の生産物に等置し、したがって生産者たちにはそれ自身ただ単純労働の一定量を表わすにすぎないのである。種々の労働種類がその度量単位として単純労働に還元される種々の割合は一つの社会的過程によって生産者の背後で確定され、したがって生産者たちにとっては慣習によって与えられるものである」と述べ、価値の実体が、資本の生産過程の分析以前に与えられている点である。宇野によれば、こうした論証では、「価値の実体が労働によって形成せられるということをお論証しえない、いわゆる商品生産一般において論証しようとしたために、複雑労働の単純労働への「還元」をも、生産者の背後で確定されるものとせざるを得なくなったのである」というのである。つまり論点は、次のことにしぼられているといえよう。マルクスが「経験が示すところ」といい、「生産者の背後で確定されたがって生産者たちにとっては慣習によって与えられるものである」と語ったような「共時的・通時的抽象」を如何に評価するのかといった問題である

といえる。「純粹な資本主義」に問題を純化しようという宇野にあって、こうした「共時的・通時的抽象」は問題にならないのはいくまでもないことだが、逆に、そのことを無視することによって宇野が得たのは、「労働力商品」の実体化であったということである。労働価値説を「共時的・通時的抽象」をもって実体化することを拒否した宇野は、逆に、価値法則の鉄のごとき貫徹を実体化し、労働力なるものが一定の価値で常に実在し労働力商品の価値が一定であるが故に価値論が定立できるのだとしてしまっているのである。宇野はいう。「それはまた一方ではそれぞれの商品の生産に要する労働時間を一定の社会的基準に一樣化すると同時に、他方では全社会的労働力をそれぞれの商品の社会的需要に応じて配分することになるのであるが、個々の資本にとっては、いわば外部から強制された法則として作用するのである。」

つまり、宇野は、ここで二重の誤りを犯しているのだ。すなわち、マルクスが、唯物史観として描き出そうとした「歴史は階級闘争の歴史である」という視点を資本論の中から二重の意味でとり去ってしまったということ、これである。「共時的・通時的抽象」としての労働価値を形態論の展開以前に実証しようというマルクスの意図には、A歴史の主体VがA労働とその社会的編成Vであるということの意味する一つまり本源的な意味で人間の労働は協働であることとを示すと同時に、その協働が資本制及びそれ以前の社会にあっては、自由な主体同志の平等な協働としてあらわれなくて、自然的な、したがって生産力に規定された階級的な分業としてあらわれ、そうした労働とその社会的編成が遂に「日々くりかえされる抽象」をむき出しの原理とする資本制社会に至ったという歴史観、そうした

的唯物論と経済学)二つには、この科学的洞察にもとづく「社会主義的政策」であって、これらが彼らに役立つのは、自然科学的認識が技術者に役立つのと同じである」と語っているのは、宇野とそのエビゴーンにあてはまることであろう。

フエツチャーによれば、そうした傾向の発生は、ヘーゲルとマルクスの基本関係をそれ以後の理論家たちが把握していなかったことに求められているが、われわれは単にそのみが問題であったのではないと考えるを得ない。むしろ、そうではなく、マルクスレーニン以降の「資本主義の没落」「帝国主義」の問題を、まさに宇野がその展型であつたようにA歴史の主体V労働とその社会的編成のありようを、主体として分析することを放棄した裏には、先進帝国主義本国における革命の敗北が存在しており、この革命の敗北が歴史的主体の敗北の固定化、労働力商品化論を発生させたともいえることはいないであろう。このことを論証するのは本稿の主題ではないので、この問題は別稿で追跡することにした。

(三) ところで、わが長崎は、宇野による科学とイデオロギーの切り離しから出発する。つまり、彼の出発する地点は、主体の敗北が固定されてしまった「労働力の商品化」が既定事実となつた地平なのである。歴史的主体の敗北を前提とし、そこから切り離された第一次ブンドの出発の悲劇性はここに象徴的に存在しているといえよう。それは二重の意味で悲劇的だったといえる。長崎自からも「ブンドについて」で告白しているように、スターリン批判によって「党

た歴史観から必然的に成立する社会主義思想にもとづいてのみ、資本制社会の解明とその批判が科学的に成立するという根本思想を流し流してしまつたのである。

以上述べてきたことを整理して言えば、宇野は、資本主義を実験室に入れることでもって、そこから注意深く、唯物史観を抜きとつたといふことができるだろう。つまり、歴史の主体がA労働とその社会的編成のありようVにあるということ、一つは労働価値説を労働力商品化論にすりかえることによって抜き去り、一つは歴史の発展要因を物理的な生産力に置き換えることによって骨抜きにしたのである。したがって、宇野の経済学は、こうすることによって、A科学Vとなつたのである。たとえばイリテック・フエツチャーが、マルクスとヘーゲルの基本関係を「ヘーゲルでは「世界精神」(神)が、人類の発展過程のなかでその「適切な自己意識」へと運動する歴史過程の主体であるから、究極的には歴史の全体的意味が神学的であるのに、マルクスでは世界精神のかわりに「人間の社会」(はじめは漸次に一つの統一体となる)があらわれる。」といふ「ヘーゲルの世界精神が発展の行程で一段階づつ先行するために、個々の国民的精神を利用するのと同じように、人類は、社会発展の一定の段階でいわば歴史の進歩の担い手となる偉大な階級を利用するものである。……マルクスにおいては世界歴史がプロレタリアートの革命的行動のなかで実践されるのである」と述べているのは正しい。そしてフエツチャーが、このことの確認の上で、こうしたヘーゲル的要素をマルクス以降の「マルクス主義」は見失なつてしまつた結果、「マルクス主義は二つの補完的な部分に分解せざるを得なかつた。一つには、社会発展の法則に関する純科学的(没評価的)な学説(史

の神話)が崩壊し、党が歴史的主体でありかつ実体であるというスターリン主義が音を立てて崩れ去る一方、彼と第一次ブンドの前には、現実の労働者階級は体制内化し、日共と社会党の影響化にあり、「別党コース」をとつたブントの前には極く少数の戦術左翼的な労働者が存在したとはいへ、主要には、「全学連」しか存在しなかつたのだ。「若き革命家たち」が、その一時期において、日本共産党との分派闘争をあきらめざるを得なくなり、別党コースが必然化するや否やこの悲劇が待つていたことは自明なことであつた。

だが、しかし、日共との分派闘争を通して革命主体の再構築をやるうとしていた一時期においては、つまり、党V主体・実体であるという思考からの解放が、階級を主体とし、それとの関連で党の再建を思考した一時期においては問題は別に立てられたし、立てようとしていた。たとえば、山口一理が、プロレタリア通信の一号において、「六・一事件を契機として開始された学生運動に対する破壊的批判とトロツキストの策動云々のカンパニア、大量処分と云う一連の事件は、日本共産党の党内闘争の集約的表現であつた。だが今日われわれは六・一事件がひきおこした重大な党内闘争に於ける影響を無視することは許されぬ。党大会を直後にひかえ、抗しがた指導部に対する責任追求の声のたかまりのうち、この事件は官僚主義者に好餌を与えた。」と述べ、「そして何よりも学生の中にあつた革命的部分は日本共産党内の革命的労働者から隔離され孤立させられた。革命的共産主義者の結集と統一された組織的行動の必要こそ、六・一事件は雄弁に教えているのである」と総括し、日共との分派闘争の強化を訴えていた。

そしてまた、その後のブンドが、長崎のいうように、帝国主義を

めぐる論争に浮き身をついやさねばならなくなるなどとは異質な次のような主張をみると、われわれは、そこに長崎の位相とはちがった可能性を評価する。すなわち、「問題は、日本ブルジョアが帝国主義的に自立したか否かではない。共産主義者が資本主義の生産関係の打破に本質的な目標をおいているか否かにある。…従属か否かを討論してから社会主義が人民主義かを論議しよう」という巧妙なトリックで討論をすり変えようとしたときに、宮本顕治の土俵中にひきづり込まれねばならなかったのである。

山口一理が提出しようとしたのは、科学とイデオロギーの分離でもなければ、また、党の物神化による「科学」と「イデオロギー」の党による独占化でないことは、この引用のかぎりではたしかである。それは党の綱領と組織の一体化であり、遠方派が主張するように「党と大衆の二分法」か「その否定」かというレベルを越えようとしたものであったことはたしかだ。それは少なくとも、歴史的主体としてのプロレタリアートをわがものとし、それとの関連で党を位置づけようとする動きであったということができよう。

だが、そうした山口一理らの試みは現実化はしなかった。問題はここから始まるのだ。今、さしあたって、だれが疎外論と宇野経済学と「裏切り史観」をブントに持ち込んだのか問うことは意味のないことだ。ブント第三次綱領草案は、この三つのアマルガムにしかならなかったのは、記録された歴史を読む限りにおいてさえそうし九山口一理たちの敗北の結果であることは自明だ。かくしてブント第三次綱領草案は一見、異和観をもつかのようになり、その裏一致している三つの発想の奇妙なシンフォニーをなした。

①現在の自称「共産党」はプロレタリア革命をひきのばし、敗北

革共同とブントの分裂を必然化する問題であるのだが、いわば、そうした、現実を如何にして打破するかについてで方途が別れる。すなわち、そうした体制内化した、つまり、労働力商品である労働者が如何にして本来の労働者になるのかといった主体の自覚の問題の提起がそれである。本来の自己の奪還―疎外論の登場の持つ意味はその方向であったということができる。

こうした革共同主義に対して、ブント主義といわれるものは、いわば、そうした労働者の体制内化を前提にした上で、資本が展開する矛盾に目を注いだ。革共同主義およびそれ以降の二次ブントの方向は、大きくいえばそうした方向であったということが出来る。ここでは、主体の客観的位相が問われることなく、反帝と帝国主義打倒が絶対化される。われわれは、こうした二つの位相を、過程

の党の過程の意識として総括してきた。両者に共通していえることは、共に、体制内化し、労働力商品化している―労働者階級を出発点とした歴史観であるということである。したがって、そうした歴史観に立つかぎり、現実には起っている世界階級闘争―民族解放社会主義革命の地平を正當に評価できないのは当然だったといえる。たとえば、ブント第三次綱領草案が、後進国革命について触れているのは、次の二箇所のみであり、しかもその内容たるや、資本の論理の絶対化の上のみ立っていることは当然だといえは当然だが、現在の地平から振り返るならば驚かざるを得ないだろう。少し長く引用しよう。

「後進国における民族革命の中で、自己のブルジョア的発展をとげようとする民族ブルジョアも必然的に国家資本主義的な方策をとるようになった。プロレタリア運動はここでも明確に自己の権

させ、資本主義を生きのびさせてきた。これを打開するためには、裏切りをつづける自称「共産党」のかわりに真のフロレタリアートの指導部―断つたる革命の決意につらぬかれた新たな前衛党をつくらねばならぬ。(裏切り史観)

②労働者階級の日々の労働は、ただ資本家階級の富を肥やすだけである。…労働者は働くことによってますます自からを資本家の鉄のくびきにしばりつけるのだ。(疎外論)

③あらたな延命の形式、それは国家独占資本主義である。国家独占資本主義は、原子力産業、電子工業、合成化学工業などの導入、軍事技術の一層の発展などにみられるすでに巨大に発展した生産力を、資本主義がみずからの自由な運動様式の中に包摂しえなくなつたことを示している。支配権を握る株主は、中小株主を無力化し、会社の利益をかならずしも全部配当にあてることなく、会社の内部に留保し、固定資本の巨大化にともなう莫大な資金を調達する機構としてそれを確立する。この自己金融の結果、資金は資本市場の制約から解放されて…。(宇野経―自己金融論)

「裏切り史観」「疎外革命論」「宇野経済学」の三位一体的展開は、これまで述べてきたように、党は「歴史の主体であると同時に実体である」というスターリン主義の完全な裏返しであることは自明であろう。図式化して示すならば、「党の裏切り」によって「革命の敗北」がもたらされ、その結果、労働者の体制内化がまき起った。そしてこの体制内化の結果、「労働力商品化」論を基礎にしたいわば「敗北の固定化」を基礎にする宇野経済学が従来のスターリン主義的な現状分析よりもよく歴史の現実をとらえているかの如き外観を呈することになる…といった事態である。そして、そこから先は

力の確立の任務に直面しているのである。植民地の民族革命運動も本国のプロレタリア革命とともに、単一のプロレタリア革命を形成する方向に進んでこそ勝利の道はひらけるのである。」

「だが、帝国主義者との協調の夢やふれたスターリン主義官僚は、この危機にあたってソ連邦国境の安全のためコミンフォルムを結成し、ブルジョア支配に対する階級闘争を民族独立と民族主権の擁護の闘争にすりかえた。」(第一次ブント、第三次綱領草案)

ここに表明されている歴史認識は、帝国主義(資本)の論理の絶対ともいえる貫徹とそれに協力するスターリン主義の力の過大な評価であり、逆に言えばブント以外の階級の力量の無視であるといえる。植民地の民族革命運動はブントが行うところの「本国のプロレタリア革命」に従属するものではなく、民族―社会主義革命の独自の展開によって一定の勝利を獲得しつつあることは、今日の時点で、すでに自明な歴史的事実であり、しかも、その革命の現実性自体が帝国主義の運動を逆規定している事実をみるならば、第三次綱領草案の位相が、前に述べたように「革命の敗北」を全世界に引き伸ばし、「敗北の絶対化」の上で問題をブントという主観の絶対化の上に打ち立てようとしたものであることは明らかになるであろう。こうした思考は、その後(第二次ブント)の展開によってベトナム解放闘争を契機としてブントからは放逐されていったが、両革共同には、そのことは、未だ「反スタ」教条主義となつて維持されている。そして、中核派が、黒田哲学と岩田理論の野合として存在しているのは、第一次ブントと同位相の地平にしか彼らが存在していないことを物語っていると見えるだろう。

第二次ブントが、いわば、その組織をかけて自からの地平にとり

込もうとしたのは、そうしたベトナム解放闘争をはじめとする後進

国の闘争の現実性が突きつけた地平であったということが出来る。

それは、米帝を中心とするドルーポンド体制を根底から揺さぶり、

先進国叛乱を必然化させ、歴史の主役が誰であるのかというこ

とを明白にしたのである。したがって、現在、問われているのは、

党主体・実体であるスターリン主義への単なるアンチテーゼであ

るところの、別な党を歴史の主体・実体とするイデオロギーの建設

でもなければ、また労働者階級の敗北の絶対化の上に「学問」を利用

する主体の問題としては立てられないことはたしかなことであるは

ずである。階級を歴史的主体として確立するマルクス主義の復権が

問われているのはたしかだといつてよい。

さて、遠方派のイデオロギーである長崎は、そうした現在の問題

には全くといってよいほど無自覚である。彼の出発点は、あくまで

も宇野が提示した「科学」と「イデオロギー」の分離であることは、

前に引用した「ブントについて」という小論が分析的理論（宇野経

をはじめとする学としての社会科学）をこなしている「党の固有」の

理論が課題だったという問題の立て方をしてのこと自体が、今な

お彼が、宇野を自明の前提として出発していることを示している。

そしてまた、そのことは前衛党大政同論の基礎をなすものが「叛乱

論—政治的共同性」の構造にある以上、われわれは次に叛乱論のもつ

意味について、問題にせねばならないだろう。

※もちろん、こう述べたからといって歴史の一時期における反スタ

ーリン主義思想と宇野経済学の示める位置と否定的のみ扱えては

ならない。それは、全世界の階級闘争がくぐらねばならぬ歴史的過

程であって、その歴史的意義については別に稿を改めることにする。

第二章

長崎叛乱論の近代主義的位相と価値形態 論—サルトルの挫折と世界の無・永続運 動の悲劇

(一)

ここでも、宇野の影響が強烈であることに驚かされる。しかしな
がら長崎の場合、宇野の受容の仕方が他の宇野派のエビゴーンた
ちとちがって、いわば、分析的理論としてどう宇野派を使うのかと
いうことではないことははっきりしている。それは宇野の基本的枠
組みを思想化したレベルで展開されている以上、宇野の主流として
処理するよりか、むしろ、新カント派以来の現象学—実存主義、つ
まりはブルジョア思想として処理するのが正當かも知れないが、彼
自からが、叛乱論において「資本主義の崩壊は科学的必然性なので
はなく、むしろこの必然性は実践活動のうちでこそ確信されるとい
う宇野理論の主張を私たちは額面通りに受けとった」と公言するか
らには、またその「叛乱論」の基本的規定が「労働力商品化」に求
められているからには、ここから始めるのが正しいことのように思
われる。

そしてまた「叛乱論」が第一次ブントにおける彼の活躍とその挫
折の総括の書であり、また同時に、遠方派が「ブントは党と大衆の
ダイナミックな関係を復権することから出発したが、しかしさらに
第二次ブントと全共闘運動の経験は、党と大衆」の図式、実は「大
衆の党」「党の大衆」の密通関係を徹底的に暴露し解体した「など
と勝手に位置づけ、持ち上げている「全共闘運動」に対する影響を

与えたということを考えてれば、単に長崎の理論を批判するだけに
とどまらずこの批判的検討が重要な意味を持っていることは自明で
あろう。

「一九六〇年の私たちの政治闘争にあって、自分を政治家だと自
認することが私たちの顕著なモットーだった」という冒頭で始まるこ
の小論は、独自の政治の潮流を作ろうとする党「アジテーター」と
大衆との人間的格闘—弁証法の問題から開始される。「他者として
の大衆」（対他存在）をアジテーターが自己に獲得することを目指
す。つまりは「他人の死」を求めることであるが、それは逆に大衆
の側からいえば、アジテーターと同一化することを意味するわけで、
「アジテーターの死」でもあるという、対他—対自関係から開始さ
れる。（こうしたアジテーターと大衆の関係は、長崎前衛党論におけ
る場合には、「私党」と大衆の関係として再指定される。「党の戦
術は党の綱領」を反乱の大衆権力に実現する実践である。戦術は
形成途上の大衆権力に対する党の現象形態であり、原理的にいえば
党は戦術としてしか反乱においては現象しない。つまり叛乱論に
あっては、アジテーターと大衆の関係であったものが、「戦術本性」
として前衛党論では中心的にとらえられることになる。）こうした「相
互の死」の追求というモチーフは、サルトルの議論とも相似である
が、われわれはマルクス—宇野の価値形態論の展開にも同じ図式を
発見することができるのである。たとえば、それは、リンネルの所
有者が上衣の所有者に相対峙したとき、リンネルの価値が上衣によ
って表示され、また逆に上衣の価値がリンネルによって表示される
という、結果的には「相互の価値」が「相互の使用価値の死」によっ
て実現されるといふ関係と同一であるといえる。

しかしながら、そうした「交換」は、相互の主観性によって成立
するものでしかない。たとえば、上衣の所有者が自己の上衣をリン
ネル—ヤールに値すると主観的に考えたとき。しかしそのこ
とは、リンネル所有者が自己の—ヤールのリンネルが上衣—着に
値すると考えないかぎりなんの意味をもたない。アジテーターの「ア
ジ」が入るか否かは、そうした関係と全く同一である。よし、マル
クスにならって、原初に行きありきとしよう。長崎はアジテーターの
アジが大衆に入ったものとして次に進む。マルクスが交換が行なわ
れたという前提から、交換価値を引き出すのと同じように長崎も、
先に進む。「してみればここで記述では、アジテーターと大衆は
とりたてて最初から別人としては考えられない」として両者を等置
したのちに、「アジテーター自身、もとはといえは市民社会の政治
過程におけるアトムであったのであり、この市民の自己否定を通じ
て市民と反市民との葛藤を生きたべく決定したのであったはずであ
る。大衆もまた自分の内部に自己とは異なるもの——むしろ自己の
否定態——との葛藤を引き受けて旧き規定性から変換する」

ここで行なわれたことは商品が使用価値でありかつ交換価値であ
るといふこと——つまり交換価値（価値）としての反市民、使用価
値としての市民という関係とそれは相似である。そうした関係を導
き出した上で、長崎は価値の実体をつぎのように提起する。（ただ
しアナロジーはここでは使用価値と交換価値との関係でマルクスの場
合と逆転した関係に立つ。つまりマルクスが価値形態で指定したの
は交換価値⇄実体であり、長崎が価値として提示するのは、そうし
た交換価値（形式）を価値の実体の問題として提出するのではなく、具体的
人間労働（使用価値的側面）に立脚して否定しようとしたために生まれた逆
転であるといえる。

マルクスが積極的に価値として措き出した抽象的労働は長崎にあっては否定の対象であるという関係にある。

「自己規定とその否定との避けがたい運動は、近代の技術的關係の根拠ともなっている。……近代の政治の地平で形式化された人間が叛乱をめざす政治的関係のうちで自分がまた他者であることを生きる時、絶えず、自己の疎外感を殺害しより越えて人間の全体性へ接近していくことが可能であろう。」

つまり、「相互の死」を通ず抽象によって得られたものは、「疎外感を殺害してより越えて人間の全体性に接近していく」ことであつた。言葉を換えて長崎は、それを「近代への叛乱」というふうにも表現する。

さてここで問題は、様々な角度から出てくる。まず第一点は、叛乱の本質を「近代への叛乱」「人間の全体性への接近」として提出することの可否であり、第二点は、第一の論点とからみあうが、こうした展開をしたこと自体から発生する「具体性」からする「抽象性」批判に短絡する傾向の問題。誤解をおそれないえば、使用価値による交換価値批判に革命論が歪曲されることである。

そして第三には、「近代への叛乱」「全体性への接近」という形での本質の提示では、本質(実体)の提示になつておらず、それは、「への」「接近」である限りあくまでも運動であり、形態論の自己展開に終わる危険性がつきまとうということである。

上に挙げた一、二、三点のうち第三点目は、(一)の問題とからみながら、最終的には私党(大政同論)として完結し、宇野経済学が「価値論抜き」の資本論」として完結するように、「価値論抜き」の革命論」として長崎理論も完結するわけだが、ここでは、その問題

を第四章にまわすことにして、まず、(一)(二)の問題をみていくことにする。

つまり、叛乱の本質が、あくまで「叛乱」である以上、そしてそれが運動であるために、長崎は次のようにいわなくてはならない。「アジテーターと大衆の弁証法のなかでは行為主体は絶えず反自己へと直面せねばならず、こうしていわば世界の無へとさしかけられるのであり、この孤独と疲労のために彼は関係から脱落せんとねがう」

なぜ、叛乱は「世界の無」へとむかわねばならないのか、そしてまた、いつでも何故アジテーターは永遠にアジテーターであり続けねばならぬのか。長崎はその理由を(三)近代世界と叛乱において説明する。彼のいうことを聞いてみよう。

「もともと、労働は他ととり替へ不能な個別者の行為だつた。(傍点引用者)注意せよ！」が、近代になると、「共同体内部での自からが使用するための個別的生産は姿を消し、かわって近代労働は測定可能で相互に比較できる等質な社会的労働となる。労働主体にしても独自の固定的な身分としての存在ではなく、相互に等質で交換可能なアトムとなる。つまり労働は「労働力商品」として、生産の力でありながら同時に素材となるわけだ。……人間はこのように形式的に把握されているために彼の身体的存在は闇に没して、ただ抽象的の一般者として世界にかかわらねばならない」。彼のいいたいことはこの引用につきるのだが、ここでの彼の論旨を要約すれば、本来、具体的、個別者の労働であつたものが、近代世界になつて抽象的労働という規定性をこうむることによって、一切が、形式化し、数量化し、技術化した、したがって、こうした規定性

に対する叛乱として近代への叛乱があるのだということにつきる。否結論を急がずたいくつだが彼のいうことを聞いてやろう。「たとえば資本論の場合、労働が有用労働との関係を離れて労働力商品として一般的に成立していることを前提にして、はじめて原理的、弁証法的に展開されるべきものといわれるゆえんである……労働実践が素材の事実性との関係をすてていること、この近代の根拠への忘却は巨大な倒錯以外のなにものでもない。「たしかに」と彼はこの後でつづける。そうした倒錯が破られる瞬間が恐慌であるとのべ、「これも原理としては、商品経済が労働力の商品化という「元来無理」を形式化を支えとしており、労働身体という非合理性を合理的体系は産出できないという一点にもとづいている。」というのだ。

すてにみてきたように、長崎の場合、マルクスが使用価値と交換価値の矛盾によって展開した「資本論」の「使用価値」を「具体的有用労働」に置き換え、「交換価値」を「元来無理な労働力商品化」形式化」に置換したものであることは明らかだろう。この置換はさしあたって、そういわれなきことではない。商品における二要因、使用価値と交換価値の二面性「具体的有用労働」と「抽象的人間労働」へとマルクスの場合においても相対しており、それ自体としては、そう無理なことではない。だが、しかし、マルクスは革命の本質を「具体的有用労働」の復権として長崎のように描かなかつたことはたしかである。また、長崎が、宇野に依拠して誤るように「労働力商品化という元来『無理』な形式化」をこうむつた結果、恐慌が発生するのだ——などとマルクスは説いていないこともたしかなことだ。

宇野から「科学」と「イデオロギー」を武器として手にした若き

革運派の革命家は宇野理論を宇野とは全く違った方向に適用しようとした。宇野が「労働力商品化」をもって恐慌の必然性を説明し、この恐慌によって資本主義社会の完結性としたがって歴史性を明らかにし得るのだと説き、自からの任務を、そうした数量化社会の分析「物象化構造の物象化された位相での整合化へつき進み、徹底して、「人間」の問題を意識的に排除し、科学としての経済学を追求したのに対し、長崎は、この同じ「労働力商品化」を「近代一般」に拡大し、「数量化」「形式化」という概念を導き出しつつ、それらに対して、生身の人間という対立概念を設定することによって、いわゆるイデオロギーの問題を全面化させ得ると信じたのだといつてよい。文学的に表現すれば、「徹底した合理主義」こそ実は「徹底した人間主義」であるということなのである。美しくいえばプロレタリアートは「受苦的」であるが故に情熱的であるというあの逆説に身をゆだねるのだ。長崎が宇野から読みこんだのは、実はそうした逆説だつた。彼のコトバでいえば、「こうした倒錯」を彼はやってのけることを決意したのであるといつてよい。だからこそ、彼は冷たく、「分析的理論はそれはそれとして利用できる」とか、彼以降の新左翼たちの宇野理論の「分析的理論」としてのよみこみをさめた目でもってその中味は一ページも目を通さずして、「いまだに『党派の機関誌』に宇野経済学の批判などが長々とのつたりする悲しむべき現実」などと「悲しむ」ことができるのである。

宇野の「科学」と「イデオロギー」の分離という理論的な構えは、長崎によって「使用価値形成労働」ないしは、「具体的有用労働」と「抽象的人間労働」の分離となつて現われ、「具体的人間労働」による抽象的労働の批判となつて、「革命(叛乱)」論の基礎

にすえられることになったのである。しかしながらこの二つの対立は、「近代の労働」に内包する労働の二面性である以上、「近代」の内部においてこの対立は止揚されるわけは原理的にいってあり得ない。それは「近代」の止揚を提起する地平からでなければ解決のつかぬことは自明である。だからこそ、長崎も、そうして規定した「叛乱」が「世界の無」へと行きつかざるを得ない自己撞着として措かざるを得なかつたのだ。そして長崎によれば、それは「近代の宿命」ということとされるのである。だが、問われているのは、そうした解決不能の悪矛盾ではないはずである。ここでは、そうした悪無限を越える地平として、マルクスの『資本論』を中心とする諸著作があつたはずであり、そうしたものとして「科学」と「イデオロギー」の統一、価値と形式の分裂という近代哲学の地平をこえるものとしてマルクスが存在していたはずであることのみを指摘し、その地平の原理的展開は後にゆずるとして、長崎の叛乱論がこの問題を如何に解決しようとし、当然のことながら、失敗に終わらざるを得ないかを見ることにしよう。

(二)

それでは、そうした叛乱の主体とプロレタリアートの関係は、「叛乱論」にあつてはどのように措定されているのだろうか。

それはいうまでもなく、「労働力商品化」という元来「無理」な形式をおしつけられているプロレタリアートの運動として開始されるのだが、叛乱の対象が「近代」一般であるため明確にはされない。「資本主義経済の商品化された労働力」として、彼は近代の規定性を一身にこらむって行為するのだが、労働は決して商品労働という性

ところで、こうした叛乱、「非合理性」の噴出はなにに向かつて闘いを開始するのか？もちろん「近代」であるが、具体的にはそれは？彼はそうした叛乱の外的性格をみようとはしない。それはあたかも、叛乱それ自身——個々の労働者が非日常にのめりこむ際の内的スリル（禁じられた掟）を破ることの「おもしろさ」といった個々人のかつとうの問題として語られる。

この奇妙さは、「叛乱それ自身の記述」に固執したためでも、また彼がのべるように、内的連関を叙述した後で「近代世界との衝突」をのべようといつて、その問題に移るのだが、それですむといった問題ではない。本質的なことをはらんでいる。より本質的には「具体的有用労働」による「抽象的人間労働」批判という図式の中にすでにそれははらまれている社会主義論の問題と関連せざるを得ないのだが、その批判は後にゆずるとして、ここでは「労働力商品」に転化している過程として描かれていた結果であることを指摘しておく。 「私」の自己否定、黒田の疎外論哲学が「永遠なる今」に至る「自覚の哲学」として語られるのと同じ位相に存在している。長崎の場合の位相は黒田とはちがって、それは論理一般ではなく、「アジテーターの戦術」を媒介として、大衆が反近代化としての自己に目ざめていくという構図をとっているが、結局は「本来の自己」の回復運動であることにおいて、黒田疎外論や疎外論一般と同一地平における議論であるのだ。

こうした地平こそ、いうまでもなくマルクレーゼ等の初期マルクスの解釈であり、疎外論「経哲手稿」時のマルクスの立場以下のものであることはいうまでもない。しかしながらマルクスは、そうした

格には規定しつくしえぬ全体的な人間の行為である。そこでプロレタリアートは近代の分裂を糊塗することも傍観することもできない。まさに「受苦的」な存在としてあつた。彼の行為はこの分裂を生きたこと以外にはありえない。「労働力商品化」——「近代一般」の問題を拡大した彼にとっては、労働者個々人の前に立ち表われる「資本家」、そして、そうした「資本家によって搾取されているという現実」はもはや問題にならない。「労働力商品」化という事態を彼に強要する存在も、さしあたって問題にならない。なぜなら「叛乱」としては、個々の労働者が、あたかもなんの強制もなく、自から進んで「労働力商品」となりさがり、その結果、「近代」という「幻想」もしくは、共同の主観性が、個々の労働者を支配し、それが全社会的なものになっているという事実こそ問題の確心はあると彼は思っているようだ。「くりかえすけれども」と彼が強調するのは「それは資本主義の法則性が生産する絶対的窮乏の次元ではなく、近代が忘却している根拠への飢餓、行為の本質への飢餓の次元である。かくして近代ののりこえの問題は、端的に、歴史的に行為する個体の切り開くべき問題となる。」と語るのを見れば、それは明らかだ。

したがって、こうした「歴史的に行為する個体」としてしか、プロレタリアートは措定できないのであって、彼にとっては存在として開始したプロレタリアートだけが、プロレタリアートとよび得るのである。「労働力商品」という近代の規定性から、たえざる脱出、「無規定な私」へとつまり、「生の私」の発見へと向かうたえざる運動体としての個体がプロレタリアートなのだというわけである。

たあるべき姿の労働」と「現に存在する労働」の矛盾として問題を立てようとする地平を超越し、歴史的な地平に「労働」と「分業」の問題を再度、位置づけ直すことによつて、人間の問題を歴史的な存在の問題として明らかにしたことはいうまでもないことである。（疎外論から物象化論へ。『唯物史観と資本論』）。

ところで「本来の自己」「反近代としての自己」とはいつたい長崎にとってなにであらうか。問題はここでたちまちにして破局へと向かわざるを得ない。たえざる規定性を近代として切つてすてた後の彼に残るのは、無規定な生身の私であり、したがってそれは「無」でしかないのである。彼はいう。

「アジテーターと大衆の弁証法のなかでは行為主体はたえず反自己へと直面せねばならず、こうしていれば世界の無へとさしかけられる」

これが△叛乱▽、もしくは彼のいう革命の本質的命題である。△世界の無▽へ向かつた永続運動が△近代の否定▽としての叛乱現象の本質であり、こうした叛乱現象を歴史的な本質の進行↓下敷として△革命▽が存在すると彼は思考する。したがって△革命▽は、△叛乱▽にとっては非本質的な技術の位相としてとらえられることにならる。

「こうしていま、近代における無数の叛乱が何であつたかがみえてくる。たとえどんな地域的であつたりたらないものであつても、叛乱は近代そのものへの叛乱なのだ。近代世界がその根拠を失わないかぎり、近代の根拠にかかわるものとして叛乱はつねにある。叛乱が権力を獲得するか否かは叛乱にとってなお本質的なことではない。

叛乱の歴史は権力の展望なき永遠の叛乱の連鎖であったし、これからもそうであろう。」と叛乱の本質を再総括した後で、叛乱にとつて非本質的問題であるヘゲモニーの問題に論点を移行するのである。

(三)

われわれは、その問題、(私党—大政同論)の問題に移る前に「相互の死」として△アジテーター▽：△大衆▽の弁証法の問題を長崎と同じ思想的位相で提出しているサルトルの問題でみることにしたい。それはなにも、サルトルを長崎が如何に剽窃したかなどといったことを問題にするためではない。問題は、ヘゲモニーの問題(党の問題)が長崎—サルトルにあってはいかにとらえられているのか、および、その両者の誤謬を更に明確化しつつ、長崎的オリジナリティをきわだたせつつ、それをのり越えるためにあるのだ。

真木悠介は、サルトルの共同性、溶解集団の問題を次のように要約しつつ提起する。

「そこではもはや、他の人間の実践は私の実践にたいしては相剋的でなく、逆に私の実践の、つまり私自身の意図していることの彼処における遂行である。

新しく到来した他者の力と拮抗するものではなくて、逆に私自身の力の増大である。私は私が後において集団へと到来するのを見る。」

この共同の意志を表現する実践において、彼は私の分身であり、私は彼の分身である。

だが「バステューユへ」とさげすぶ。そして全員が出発する。このときの△合言葉▽は服従されるわけではない。たまたま無名の

しかしながら、この「叛乱」、サルトルのいう「溶解集団」は、いわば、集列性の否定であって、本質的には否定を媒介とした結合でしかない。したがって、その集団は不安定である。「たとえバステューユは占領された。敵の姿は見あたらぬ。ろう下や広間や階廊を絶えず列をなして行き交うバリの民衆の中に、もちろん、いままお共同の恐れは存在するものそれは直接になまなましい目標や脅威としてはもはや現前していない。彼らをきんみつに団結させていた状況の、タガがゆるむ。」

長崎は、こうした叛乱の革命を「祝祭と同じように、叛乱もそれ自身のうちで自己を表現しようとする。自己を破壊し、自己を実現することに執中して、叛乱者は無慈悲な権力が門口にせまっているのを忘れ、しばしば気づいた時にはおそすぎる。従来の敗北した叛乱の例について、反革命の力に対する無邪気ともいえる無関心ぶりが指摘されるのだが、これとして叛乱が内的に成熟してはなかつたからではない。……技術的關係の次元で外部とかわることが、かえって叛乱の内的關係をだ落さすのをおそれているわけだ」と述べる。

ここから叛乱論にあっては、叛乱の外部からヘゲモニーの問題が提出されているのだがサルトルは、叛乱の内部から、「けれども、ここでこの集団を解散し、もとの集列性としての日常に回復するならば、明日は力をもりかえした国王の軍隊によるようしゃのない弾圧がまっぴかりである」として、集団の永続化の問題を登場させてくる。それはいうまでもなく、集団の各成員が将来もうらぎらないことの未来の自己限定に基く、「自由な自己束縛の自由な關係」としての「誓約者集団」である。これが長崎にあっては、大衆自身の

だれか一人が、(たとえはたまたま高所に立っていたものが)先にさげんだという偶然性はなんら重要性をもたない。それは私の意志でもあった。そこにあるのは、いわば自己表現の共同性である。」

サルトルにあっては、他者は、もろもろの人間の欲求の渦まぐらにあって、常に相剋性としてとらえられる。それは、より根本的には「稀少性」の枠の中では、必需生産物が破壊されるという可能性としてとらえられていることを特徴とする。誤解をおそれずいいうならば「万人の万人に対する闘争」という近代の地平を継承しているが故に、諸個人の相剋性として全世界がまずもって措定されざるを得ない。そうした世界の中において、集列性の世界を否定し、共同性の世界をいかにして樹立するかというのがサルトルの問題領域である。

サルトルがいうところの「集列性の世界」とは、いうまでもなく近代市民社会であり、それは、人間たちの欲求、目的、実践のバラバラに相剋し合う状態であり、サルトルは「この集列性のなかにある限り、人間たちがどのようにその自由を疎外され、自己自身をもう一つの△他者▽として見出すに至るか」を展開しつつ、「このような疎外からの解放の道は、人間たちの企ての相剋性の地平である『集列性』そのものの否定としての、共同の企て、実践の中にのみある。」と結論するのである。「このような△コミューン▽原理にもとづく人間たちのつながりをサルトルは『集団』とよんで、集列性を原理としつつ、加工された物質からその受動的な統一性をうけとるような社会性としての『集合態』と區別し「集合態の集列的な属性からその直接的な対立物としての集団の噴出してくるさまを、いわば、長崎のいう「叛乱」を描き出すのである。

盟約に基づく、「大衆的政治同盟」であることは言をまたないであろう。

だが、ここでは、長崎の「大政同」とサルトルの誓約者集団の比較はしばらくおくとして、サルトルの誓約者集団の行方をもうすこし追求しよう。

こうした誓約者集団が、その内部に機能分化をとげざるをえない。かくして、誓約者集団は、「組織集団」へと転化し、組織集団の形がいはへとつき進むことになる。「集団はあるものではない。それはたえずみずからを全体化し、爆発し(離散)によって、あるいは骨化によって消滅する。」(サルトル)として、それは解体されることになるのである。

したがって、サルトルにあっては、叛乱は永続的にくり返しあらわれ、しかも、それは、一切の問題を解決することができないのである。

長崎も、当然のことながら、こうした叛乱のだ落をくりかえし指摘する。たとえば「両者(アジテーターと大衆)の本質的關係はその様々の頽落形態と相関せざるを得ない」「叛乱の自己運動の構造がアジテーターと大衆の相関相こくの關係としてとらえられたとき、同時にこの政治的人間關係の弁証法から叛乱者は容易に転落することもまた指摘された。叛乱において燃焼をとげるまで停止しえないアジテーターと大衆の相互転化の運動は、最初からあるいは中途で、おのおの別々の人格へと分解し、両者の關係は硬直して指導と被指導の關係となる。……こうした人間關係の頽落は、内在的にみれば『弁証法の疲労』とよぶべきもののためにおきる事柄であった。」

すで見たとように、長崎の「叛乱の頹落」とサルトルの「Aコミュニオン」の骨化Vとは同じことを意味していることは明らかである。もちろん、だからといって長崎「叛乱論」がそのままサルトルの引きつらうつしだというつもりはない。長崎とサルトルは、共に「近代」、『集列化』に対する否定として『叛乱』『集団』を対置することにおいて一致している。そして『叛乱』『集団』が共に「近代』『集列化』からの内的否定を意味している以上、そこで指定される個人も、共に『近代的市民』として描かれざるを得ない。したがって両者とも、「叛乱の頹落」、コミュニオンの骨化として、叛乱の限界を描き出さざるを得ないところまでは共通している。

しかしながら、この段階から両者の相違もまたきわだたててくる。つまり、長崎は、すでに述べたように、「近代からの叛乱」の本質を長崎はマルクスの宇宙的歪曲によって規定していることによってその差は明確になる。つまり「近代の叛乱」は、具体的有用労働の復権↓生の人間の全面開花↓近代の闇↓世界の無として積極的に指定されているがゆえに、長崎叛乱論はいわば人類の未来史を軸として、それとの関連で叛乱をとらえつつ、叛乱の限界を知るものとしての「党」を叛乱の外部に指定する点でサルトルと相異しているとしてよさう。

「こうして、叛乱にヘゲモニーの問題が生じてくる。けれども、ヘゲモニーは叛乱それ自体の構造から生まれてくるものではない。叛乱内部の人間関係の弁証法にみられる自己破壊↓自己実現の熱情はそれ自体「指導」とは無縁な人間の歴史的行為の熱度そのものである。叛乱はコミュニオンの内なる祝祭につかわれている。だからヘゲモニーの問題は叛乱の原基的構造に対して外からやってくる。」

たが故に、近代を止揚する新たな世界を積極的に開示することができないという矛盾に行きあたらざるを得なかったのだということができよう。

サルトルを批判して真木悠介が次のようにいうのは、したがって長崎にもあてはまることなのである。真木はいう。

「個体の多数性、相互の他者性という規格の永続的な否定といつた、はじめから挫折を宿命づけられたところのみによってではなく、まさに稀少性の世界における、個体の多数性、相互の他者性という、人間と社会の存在論的な規格そのものを、諸個人の生の弁証法的な豊饒化の契機に転化せしめること、永続する現実的なAコミュニオンへの展望はただ、このような相乗性においてはじめて拓かれるだろう。……すなわち、それは、溶解的な共同性の幻想をその原理とするコミュニオンではなく、諸個体間の弁証法的な相乗性をはつきりとその原理とするコミュニオンでなければならぬ。」

では、どうやって、それが可能なのか。すでに見てきたように、それは近代の地平を出発点とすることはできないことは明らかである。まさに、われわれは、ここで「近代」そのものを相対化する地平―すなわち歴史の推進力そのものとその思想的地平をわがものとする以外に、もはや近代からの脱出は不可能である。プロレタリアートをマルクスが革命の主体として指定してきた意味をここでわれわれはみなければならぬのだ。

その問題に入る前に、われわれは、サルトル的世界観対他―対自の近代的認識論そのものを存在論とともに問題とする次元に歩を進めよう。

したがって、そのヘゲモニー(党)は、二重の課題を背負うものとして考えられることになる。つまり、サルトルが叛乱の内部から導き出した誓約集団と同位相の叛乱の推進者としてのアジテーターの役割と同時に、近代の権力と対峙する綱領(反近代という世界の無へと向かう運動の把握)によって武装されている叛乱の外のA党Vとの二重のものとして考えられる。(後になって長崎は、この関係を「動揺する同盟」と「党」、あるいは「大衆的政治同盟」と「党」の関係として別のことばでくり返しているが、その原理はここに与えられている。また党を「叛乱体験、権力体験」を経たものとしているのもこの点に関連するといえる。)「図式的にいえば、叛乱のヘゲモニーは叛乱者のかかえもつ弁証法のみならず、対象化された存在相互の弁証法をも二重にひきうけねばならないのである」というわけである。

われわれは、サルトルとの対比を行いつつ長崎叛乱論の位相を明確にしてきたが、こうしたサルトルとの相異の存在にもかかわらず、われわれは、長崎の議論も、本質的にはサルトルと同位相の近代主義の変種としてとりあつかわねばならぬだろう。

なぜならば、その通時的歴史的構えにもかかわらず、サルトルと同様に近代的自我と近代哲学を出発点とした近代の否定であるが故に、サルトルにあっては、それ自体確定不能な永続的運動として指定されるのに対して、長崎はその永続的運動を歴史的に引きのばすことによって、逆にその結末を「世界の無」として終わらざるを得ないという関係に立っているからである。より直接的にいうならば、両者とも、近代を否定する歴史的な主体を指定することができず、近代による近代の自己否定としてのみとらえることしかできなかつた。

第三章 サルトル―長崎的相剋図式の超克とマルクス主義の世界観―唯物史観の根本的視座

(一)

いりまでもなく、マルクスは、長崎やサルトルのように、近代否定の近代として、社会主義―共産主義を永続的な運動として一度だつて描いたことはなかった。また、長崎のように「具体的有用労働」による「抽象的人間労働」批判としても、「使用価値」による「交換価値」批判としても描いていないことはたしかである。むしろそれではなく、「使用価値」と「交換価値」の矛盾は、互いに無関係な商品相互の交換を促進する矛盾として描かれているのであって、それ自体「止揚」さるべき課題であったはずである。したがって、また、サルトルがいうところの「近代的」な人間関係そのものもやはり止揚さるべきものであるとはいりまでもない。われわれは、ここで、サルトルのいり対他存在論の構図を、長崎的な「相互の死」の弁証法、また、資本論がいりところの二商品がぎり結ぶ「関係」を念頭に置きつつ、のべることによって、近代的な世界観そのものの位相をより鮮明にしつつ、プロレタリア的世界観の位相を定位し、われわれが遠方派に對置した「階級対立に根拠をおく党」の位相をさらに明確化しておこう。

サルトルは『存在と無』第三部の「対他存在」において「私」と「他者」の関係を、克明に分析している。いりまでもなく、サルトル

ルにあっては、私と他者の関係は「相剋」としてとらえられているのだが、その関係は、二商品が互いに対峙しているときの関係性とほぼ類比的にとらえることができる。つまり商品Aは、商品Bに相対峙するとき、商品Aの本質である価値は、商品Bの肉体（使用価値）によって表現されるという関係性と、サルトルがいうところの他者にみられることによって、はじめて、私は私を即自的に意識するという関係性は相即である。そしてまた逆に、私が「主観—私」として他者をまなざし返すことによって、他者は、他者自身を一つの身体的存在として「意識」するのである。だから、この二つのことからは、特権的第三者の立場からみれば、私と他者とはそれぞれ「主観」として相対峙しているかもしれないが、それぞれの位相からは、他者が「主観」である限りは、私は対象（客体）としての即自的存在であり逆に私が主観である限りは他者は対象としての即自的存在であるという関係に置かれている。こうした関係は、二商品が相対的価値形態でありながら同時に等価物ではあり得ないという商品の存在形態と同じである。

マルクスは、「こうして、価値関係の媒介によって、商品Bの現物形態は商品Aの価値形態になる。言い換えれば、商品Bの身体は商品Aの価値鏡になる。商品Aが価値体としての、人間労働の物質化としての商品Bに関係することによって、商品Aは使用価値Bを自分自身の価値表現の材料にする。商品Aの価値は、このように商品Bの使用価値で表現されて、相対的価値形態を持つ」とのべている。

またマルクスは『資本論』第一巻第一章の「商品の呪物的性格とその秘密」において、「私は……他の商品すべての商品に対して頭

で立っており、そして木頭からは、机が自分勝手に踊りだすときよりもはるかに奇怪な妄想を繰り広げる」とのべた後で、その妄想そのものは、「商品を生産する労働の特有な社会的性格」、つまりは私的諸労働とその社会的性格の問題に求めている。こうした商品間の関係は、いかならば、私的諸労働者同志の関係であり、したがってそれは、近代的市民相互の関係であることは言をまたないであろう。「他者」と「私」は、いわば、サルトルにあっては、互いに無関係二者が、相互に「他者」を人間として認識する手続きを述べたものだが、問題は、互いに無関係な、という問題領域の設定そのものからして、こうした市民社会的関係そのものであるといえる。互いの私的労働としては相互に無関係でありつつ、その労働の社会的性質（人間としての同質性）を持たざるを得ない（サルトルにあっては二者の相関関係あるいは他者を認識上の問題としてとりあげざるを得ない）という場の設定自身が問われざるを得ないのだ。

したがって二者の関係そのものを「無関係なる二者」としてではなく、そうした地平そのものを「無関係なる二者」としてとりあげざるを得ないはずである。

「サルトルは、我々」という在り方を全くとめないわけではない。しかし、それは、存在論的な関係ではなく、たかだか第二次的な従属的な経験ではない、と彼は主張する。第三者のまなざしに共通にさらされている対象的存在としての我々、つまり「客体—我々」ということは対他存在の特殊な場合に認められる。だが、「主観—我々」ということは、「一つの単独な意識のうちにおける単なる心理的主観の出来事であり、いかなる『共同—存在』をも実現しない」し、そもそも、かの相剋という関係を基盤にして派生するも

のに過ぎない、というわけである。」と広松渉は、サルトルの説を述べた後で、「人間存在は、果たして相剋を本質としているのか？」人間存在のあり方は「共同現存在ではないのか？」と疑問を発し、共同現存在としての人間存在のあり方を協業の問題としてとらえようとしている。

そして広松渉は、こうしたサルトルの「まなざし」論を受けつつ「まなざしは、サルトルが誤認するところと異なり、まなざされた相手を脱自的に変身せしめることがあっても、凝固させるものではない。まなざしは一種の『呼掛』である。私はかの撰訳の定型化の際して、いな応答の決意に際して、当時他者の一定の役割の在り方を期待的に表象する」と、「役割存在」を持ち出して問題領域を、無関係な二者から、「協業」する二者の問題へと進める。

「私の投企は、その都度すでに、他者との共役的な役割存在を志向する。この際、謂うところの、共役的な役割は、期待された無為々はもとより、敵対的格闘のときをも包摂しうる。われわれとしては、この広義の、共役的な役割、の間主体的遂行を協働——（Zusammenwirken）と呼ぶことにしよう。役割行動は、役割が本源的に共役的であるかぎり、必然的に「協働」である。視角をかえていえば脱自的に投企される対他者の—対自的役割存在は、主体と主体の出会いにおける間主体的（共同主体的—相互主体的）な協働的存在であり、この意味での「共同現存在である。」（広松渉「人間存在の共同性の存立構造」）

われわれにあえて、サルトルの「存在論」をひきあいにし出し、広松渉の反論を永々と引用したのは、哲学領域へと問題を単に広げたことは、単にサルトル「存在論」よりよく批判するためではなく。

すでにのべたように、サルトルが、無媒介的に前提としていた「無関係な二者」という問題設定そのものの止揚、それに代わる「問題設定」がなされぬ限り、「近代」による「近代」の否定というアポリアを打開できなかったが故に他ならない。広松渉の「問題設定」そのものが「無関係な二者」というサルトルの次元を越えた「問題設定」であり、いわば、サルトルとは次元を異にする異質な世界観にもとづく「存在論」として存在していることはいうまでもないことであろう。

そしてまた、我々は、こうした「近代哲学の地平」を越えるものとして、マルクスの地平が存在していたのであり、その地平こそプロレタリアートの哲学の地平であり、「唯物史観」そのものであり、こうした哲学によってのみ、マルクスは資本主義社会を相対化—歴史化ができたのだということが出来るだろう。



マルクス・エンゲルが、疎外論から飛躍を遂げ唯物史観の確立にむかうのはドイツイデオロギーの執筆を期にしていることであるが、ここにおける重大な論点の一つに「社会的関係性の総体」という歴史のつかみ方が存在しているのは衆知のことである。それは、いうまでもなく、ヘーゲルの「絶対精神」を、フォイエルバッハ的な自然・類的存在としての人間によって置換し、この主体の自己疎外と自己獲得として歴史を指し、その上で「疎外された労働・疎外された生活、疎外された人間」を「私有財産」の対極に描き出し、その止揚によって共産主義を位置づけようとしたものからの飛躍であった。つまり、「経哲草稿」時のマルクスにあっては、「人間なるもの」がその歴史的具体性において、歴史的实践において、その社会的共同性を通して、自から変っていくものとしてとらえられてはいず、「人間の本質」なるものが第一次的に存在し、その自己疎外と自己獲得として思考されていたのである。(たとえば、本格的な黒田哲学批判は別にゆずるとしても黒田寛一が、「『表現の行為』として意義をもつ人間労働は、物質の特殊性として意義をもつ社会において物質の普遍性を表現し、後者を前者へ現実化する(生活手段の実践的な創出)のです。これは物質の普遍性が直接的に個別的なものとなる(対象的生産物の生成)とともに、物質の個別性として意義をもつ社会を発展させる、という物質の自己運動の社会的な形態を主体的に表現したものにほかなりません」というとき、このフレイズの「物質」を「精神」と読みかえてみると、ヘーゲルの図式と同一になる。これは、いうまでもなく、黒田のマルクス主義が、

は、その発展のある段階で、それらがそれまでその内部で運動してきた既存の生産諸関係とあるいはその法律的表现にすぎないものである所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。そのとき社会革命の時期が始まる。」という経済学批判の序文は、こうしたマルクスの思想を鮮明にしている。

人間史を人間的協働という観点からみると、その内的編成は、その「物質的生産諸力」によって規定された様々の「生産諸関係」をもって発展してきたが、そうした「生産諸力」「生産諸関係」は、基本的に「分業」(広い意味での)によって支えられていたことはいうまでもない。分業(共同体内分業、共同体間分業を含む)の発生によって、分業の固定化が生産物の配分様式の固定化を生み出し、階級が成立する現実的条件が発生するわけだが、マルクスは、こうした階級社会を含む全歴史的過程を、いわば人間の協働という視点から見ることによって、「生産諸関係」と「生産諸力」という概念を導き出したのである。つまり序文がいうところの「彼らの意志から独立した彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係に入る」「人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定する」というのは、まさしく

「人間は彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいる。これらの生産諸関係の総体は社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であり、その上に一つの法律的および政治的上部構造がそびえたち、そしてそれは一定の社会的・政治的および精神的生過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。社会の物質的生産諸力

は、その発展のある段階で、それらがそれまでその内部で運動してきた既存の生産諸関係とあるいはその法律的表现にすぎないものである所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。そのとき社会革命の時期が始まる。」という経済学批判の序文は、こうしたマルクスの思想を鮮明にしている。

こうした疎外論の文脈にそっているからに他ならない。しかしながら「ドイツ イデオロギー」以降のマルクスは、こうした立場を根底的に止揚し、「人間なるもの」を歴史的・社会的被拘束的な存在として規定しなおしたとすることができる。それは、「過去」においてそうであるばかりか「未来」に対してもそのような存在であり、したがって人類史とは、長崎のように「世界の無」への飛翔として、いわば、その終末を現在から予言できるものであり得ないことを同時に意味している。

疎外論にもとづく、初期マルクス流の歴史観では、そうした意味での歴史的存在被拘束性が明確にならぬばかりか、疎外の回復をもつて「人類史」は終わりを告げざるを得ない。共産主義は人類の第二段階だと規定したところで、それが類的人間の全面開花とされてしまいうのは、ヘーゲルが、絶対精神の人類史における完成を市民社会―国家―人倫に求めたのと大差なく、単にそれを「未来化」したに過ぎないのである。長崎が人類の終末―世界の無として、指し示したものと「永遠なる今」として共産主義を指定する黒田とは、ベシニズム、楽園主義の差はあっても本質的には、歴史的存在被拘束性というところを見ない、したがって、歴史にピリオドをうたざるを得ない、観念論に他ならないといっているのだ。マルクスは「人間はつねに自分が解決しうる課題だけを自分に提起する。なぜならばもっと詳しく考察してみると、課題そのものは、その解決の物質諸条件がすでに存在しているか、またはすくなくとも生まれつつある場合にだけ発生することが、つねに見られるであろうからだ。」と述べた後で、「ブルジョア的生産諸関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である。敵対的というのは、個人的敵対という意味で

人間史を人間的協働という観点からみると、その内的編成は、その「物質的生産諸力」によって規定された様々の「生産諸関係」をもって発展してきたが、そうした「生産諸力」「生産諸関係」は、基本的に「分業」(広い意味での)によって支えられていたことはいうまでもない。分業(共同体内分業、共同体間分業を含む)の発生によって、分業の固定化が生産物の配分様式の固定化を生み出し、階級が成立する現実的条件が発生するわけだが、マルクスは、こうした階級社会を含む全歴史的過程を、いわば人間の協働という視点から見ることによって、「生産諸関係」と「生産諸力」という概念を導き出したのである。つまり序文がいうところの「彼らの意志から独立した彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係に入る」「人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定する」というのは、まさしく

「人間は彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいる。これらの生産諸関係の総体は社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であり、その上に一つの法律的および政治的上部構造がそびえたち、そしてそれは一定の社会的・政治的および精神的生過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。社会の物質的生産諸力

は、その発展のある段階で、それらがそれまでその内部で運動してきた既存の生産諸関係とあるいはその法律的表现にすぎないものである所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。そのとき社会革命の時期が始まる。」という経済学批判の序文は、こうしたマルクスの思想を鮮明にしている。

質的諸条件」とその主体としてのプロレタリアートが指定されることになるのである。

(三)

マルクスが価値実体を抽出するのは、周知のように資本論第一章の冒頭、つまりは、価値形態論の展開に先行する第二節であること、をわれわれは銘記せねばならない。ここでマルクスの価値実体の抽出を順に追ってみよう。

「二つの商品、たとえば小麦と鉄をとってみよう。それらの交換関係がどうであろうと、この関係は、つねに、与えられた量の小麦がどれだけかの量の鉄に等置されるという一つの等式で表わすことができる。たとえば、一クオターの小麦＝aシェントナーの鉄というように。この等式はなにを意味しているのか」と、まず問いを發する。そしてそこから「両方とも或る一つの第三のものに等しいのであるが、この第三のものは、それ自体としては、その一方でもなければ他方でもない。だから……それが交換価値であるかぎり第三のものに還元できなければならないのである。」として、二商品の関係からいきなり「そこで商品体の使用価値を問題としないとすれば、商品体に残るものは、ただ労働生産物という属性だけである」として、価値の実体の抽出を行っている。

「労働生産物の有用性といっしょに、労働生産物に表わされている労働の有用性は消え去り、したがってまたこれらの労働のいろいろな具体的形態も消え去り、これらの労働はもはや互いに区別されることなく、すべてことごとく同じ人間労働に、抽象的人間労働に還元される。」（誰が還元するのか？）

「私的社会的性」は克服できぬという近代の地平の克服Vに着眼していたが故に、その地平の宣言としていわばこうした価値実体の形態にさきがけての提示が行なわれたのである。こうした視点からみるときにのみ、先にあげた三つの疑問は、了解することができるであろう。つまり、したがって「還元する」主体は、さしあたってはブルジョア社会には、内在しようはずはなく、A商品所有者でも、B商品所有者でもない。それはA・B両商品所有者の行為を人間の協働の歴史的一形態とみなし得る、全歴史を協働という視点で見るところの特権的第三者マルクスそのものであったということができ、また、だからこそ、そうした協働の「現象形態にかかわりなしに」「さしあたって、みるという地平が確保されたのだ。そしてまた、そうした人間の協働を有機的主体と考えるがゆえに様々な労働が、人間労働（協働）そのものの有機的な一分岐としてつまり、同一の「同じ人間労働とみなされ」得たのであり、そうみなすことこそが重要であったのだ。

こうしたことは、第四節「商品の呪物的性格とその秘密」においてさらに明白になる。マルクスは、商品交換を原理とする資本制社会に對して、まずはロビンソンの労働をもってこれと對比する。

「経済学はロビンソン用語を愛好するから、まず島上のロビンソンに出てきてもらうことにしよう」として、ロビンソンの労働を引き合いに出すが、これはなにも古典派経済学の文脈にそうためだけではない。なぜなら、マルクスはロビンソンの労働をのべた後で、「ヨーロッパ中世に目を転じ」、「農奴と領主」「臣下と君王」「俗人と聖職者」による「私的従属関係」にもとづく社会を、資本制社会に對比しつつ、再び、ロビンソンを引き合いに出し、社会主義

「研究の進行は、われわれを価値の必然的な表現様式または現象形態につれもどすことになる。しかし、この価値はさしあたってまずこの形態にかかわりなしに考察されなければならない。」（なぜ？現象があつて実体があるのではないか？）「商品世界の諸価値となつてあらわれる社会の総労働力は、無数の個別的労働力から成っているのであるが、ここでは一つの同じ人間労働力とみなされる。」（なぜ、勝手にみなせるのか？）

「だからある使用価値を価値量を規定するのは、ただ社会的に必要な労働の量、すなわち使用価値に必要な労働時間だけである」。以上が、マルクスの価値実体の抽出の方法であるが、ここで問われねばならないのは、まず第一に二商品の等置から抽象的人間労働に「還元する」主体は誰かという問いである。つまり、A商品（所有者）なのか、B商品所有者なのか、それとも特権的第三者なのか？という問いであり、第二に、なぜここでは「現象形態にかかわりなしに考察」したのかであり、第三に、様々な人間の労働が勝手に「ここでは同じ人間労働力とみなされ」てしまうのはなぜかということである。

周知のように宇野は、こうした立論の裏に秘そむ問題を問おうとはせず、「非科学的」といって切つて捨て、「現象形態」からはじめるのであるが、われわれは宇野とは逆にマルクスが、価値形態論の前に実体論を置いたことに、重大な関心を払わざるを得ない。

前章との関連でいうならば、マルクスは、商品の現象形態の分析から生み出されてくる論理は、互いに「無関係な二商品」が市場において出会うブルジョアの私的社会的性Iを指し示す以外にはなく、そうした論理とは位相の異つた地平に立脚せぬかぎり、ブルジ

を説明しようとしているのをみれば、マルクスの「思惑」はすでに明らかであろう。

マルクスは言う。

「最後に気分を変えるために、共同の手段で労働し、自分たちのたくさんの個人的労働力を自分で意識して一つの社会的労働力として支出する自由な人々の結合体を考えてみよう。」として「社会主義」をもち出し、「ここではロビンソンの労働のすべての規定が再現するのであるが、ただし、個人的にはなく、社会的に、である」とのべている。すでにみてきたように、マルクスにあっては、協働を一つの有機的全体とみなしていることが、ロビンソンの労働の主体を社会へと置換するというこの手法をみれば、明確であるといえよう。このように置換した後でマルクスは「社会主義」を説明し、次のようにいっている。すこし長くなるが引用しておこう。

「ロビンソンのすべての生産物は、ただ彼一人の個人的生産物だったし、したがって、直接に彼のための使用対象だった。この結合体の総生産物は一つの社会的生産物である。この生産物の一部分は再び生産手段として役立つ。それは相変わらず社会的である。しかし、もう一つの部分は結合体成員によって生活手段として消費される。したがってそれは、彼らのあいだに分配されなければならない」。さて、こうした価値実体論の形態論にさき出つ提起が、いうところの「関係の第一次性」つまりは、近代の地平にマルクスが対置した歴史を人間の協働においてみるという、歴史的かつ社会主義的地平と相關することはすでにみてきたところだが、それでは、そうした地平そのものは、近代Vの地平といかなる相關関係を有するのであるか。こうした問いはいりまでもなく、資本制社会が最後

の階級社会であること、またその主体的担い手がプロレタリアートであるという点と重大な関連をもつことになることは自明であろう。

マルクスは、「日々行なわれる抽象」によって「いろいろな労働種類がその度量単位としての単純労働に換算される」。それは「一つの社会的過程によって生産者の背後で確定され、したがって生産者たちにとっては、慣習によって与えられたもののように思われる」と価値形態論の展開に先立ってのべている。問題はまさに「そうした抽象」「慣習によって与えられると思われる」といった事態が問題なのである。このことはいうまでもなく、一方においては、そうした抽象が行なわれ得るということ自身が、すでに、先にのべた「特権的第三者」——歴史を一つの有機体の立場でみようという視点——の内在化を示すと同時に、それが「意識的」ではなく、自然生得的であるが故に、「慣習によって与えられるように思われる」わけであり、資本制生産様式そのものの過渡的姿をさし示す指標となっているのである。

そしてまた、こうした「抽象」「慣習」は資本制社会にあってはそれ自体としては、無関係な諸商品の「形態論的」な展開によってしか、根拠を有するものでしかありえない。なぜなら、「商品の「交換」それ自身が、それ自体としては、交換の背後に存在する。人間は商品交換しなければ生きていけないから、交換をするように義務づけられているから交換するのだ」といった二商品の交換の背後に秘そむところの、人間的協働を前提とせぬ限り、説明できぬものでしかないからである。たとえば、マルクスがどんなに価値形態論的

ことができる労働力として、人間の労働力をその地域的、共同体的制約から解放した。

だが、それは、逆にいえば「すべてを作れる」が故に、生産手段と結合することをぬきにしては「すべてを作ることができない」労働者を前提にしていたのだ。ここには「鎖より他に失うべきものはなにもない」プロレタリアを登場させることになるのである。

しかもその労働者は、労働力の売手として市場にあらわれる互いに無関係な「自立した生産者」としてばかり存在するものではない。すなわちそれは、工場！生産の場においては、結合された「労働力」として、協働を行なうことにより、自からを協働の主体として不断に認識せざるにはおかないのである。こうした階級の成立はいりまでもなく、互いに無関係な他者として、向き合う資本制のイデオロギー、その哲学とは、異なった地平を提示するはいりまでもないことであろう。

マルクスが採出した「協働」に立脚して歴史をみつめるという思想は、こうした意味で、そうしたプロレタリアートの地平をさししめずものであったということができる。そしてまた、そうした「歴史観」のみが「万人の万人に対する闘争」「根拠を有さない世界」としての近代の地平を、スミスの「神の手」による「予定調和」の世界の根拠と、その物神性をあばき出すことが可能だったのである。

だが、そうしたプロレタリアートの世界観は、労働者個々人に本質的に備わらざるをえないとしても、それは必然的に自然発生的に生まれてくるものではない。ここでプロレタリアートによるブルジョアジーとの闘争の問題との関連で階級形成の問題がうかがいがっ

展開」を純粹に考えたところで「原初に交換ありき」と事実性を前提にせぬかぎり、その現象形態を展開しえなかつたということはこのことをさし示している。こうしたことは、サルトルが「存在と無」において、たまたま私が他者を「みている」——それはなぜかを問うことなく——という事実からしか、そうした事実性の前提においてしか、出発できなかったことと同じであり、また長崎が「アジター」のアジが入ったとしよう」という仮定からしか出発できなかった事態と相即なのである。（またそれは、すでにみたように労働力商品の実体化によって、その根拠が鮮明にされるといふ分野にあっては「形態論的展開」は原因不明の「事実性」からしか出発してはいない。もっとも宇宙の場合、そのような「事実性」からではなく、労働力商品の実体としての存在を基礎として、弁証法的にはなく、形式論理的に原論を完成させる方が、方法論的な一貫性をもっていられるように思われるが？）

ところで、こうした商品世界の成立を、唯物史観の立場からみると、それは、いうまでもなく、協働のあり方の歴史的發展の結果としてみることができるといってよい。分業の拡大を促進したのは、いりまでもなく、生産力（生産関係）そのものであり、それは、歴史的には階級闘争を媒介することによって、新たな生産関係をもたらしつつ、遂に資本制社会に到達した。

いうまでもなく、資本制社会は、商品という形態で、全世界の富と生産力を総括し、分業の基礎を文字通り、原理的な意味でいって、全世界に拡大していった。それは、また一方すべての商品をつくる

てくるのである。



alten Manier der Exp
Material in Masse g
giösen Illusion, mit
geschoben. Sankt B
macht in seinen „sa
denselben Versuch p
logie herauszutreten.
Namen zusammengef
Persönlichkeit, die er
wieder nichts sind al
zen der Menschen vo
sen, Vorstellungen, d
erisch festhalten. D

第四章 「叛乱論」の自己否定 II 「政治的共 同性の構造」の再度の破産

(一)

われわれは前節までで、主要には長崎浩の「叛乱論」の解体という作業を行いつつ、唯物史観・共産主義思想の復権に努めてきた。こうしたわれわれの原則的視点は、すでに「游撃創刊号」が明らかにした視点の豊富化であり、論理的により深化したものであることはいりまでもない。「しかしながら」と人はいかもしれない。長崎はすでに「叛乱論」の立場を自己批判して、「政治的同性の構造・I-IV」と「前衛党論」を書いているではないのか？ だから「叛乱論」を批判したとしても、それは、現在の彼を批判することにならないのではないか？、現に彼は、「政治的同性の構造」でもってサルトル批判を展開することによって、かつての長崎の立場を清算しているではないか？」といった反批判が加えられるかもしれない。

こうした反批判は理由のないことではない。「叛乱論」とはちがって、長崎は、自から、「同性の構造」の「方法論ノート(1)」において、次のように告白している。

「アジテーター自身にとっては前反省的に展開するアジテーターの形成過程を、私は「資本論」の価値形態論の弁証法を使って構成した。「貨幣形態の発生史を証明すること……それによって同時に貨幣の謎も消滅する」といった具合に。そしてこのアジテーターの

形成過程において把握しうる諸問題を、こんどはサルトルの「溶解集団論」の問題分野からさせるようにしたのである。

しかし、私の記述の方法論上の問題は、価値形態論とのアナロジーがうまくいくか否かなどというところにはない。たとえば、私の価値形態論理解は流通主義的だとか、等々。あたりまえのことだが、アジテーターの世界は商品世界とは関係ない独自の論理をもっており、この論理の点検は政治世界の内部でのみおこなわれなければならない。……として更に、次のようにもいっている。「問題はこんなところにはないとはいえ、以上の私の記述の中には、これからの展開にかかわる方法論上の基本的な問題がいくつか発生していることはまぎれもない」。

いうまでもなく、この時に長崎に意識されていた問題は、前二章まででわれわれが「叛乱論」批判として展開した「二者の悪無限」であったことは、彼のサルトル批判をみれば明らかである。「サルトルは果しないどうめぐりをおこなない、集団内の各アジテーターのごとく統合と排除の循環におち入り、結局に、全体化は、実践的行動の統一性であるというトロロジに終っているように思われる。……そして、個人的実践から出発しこれに固執する論理が最初に遭遇するアポリアをこのことは示している。」

では彼は、このサルトルのアポリア、長崎叛乱論でかかえもっていたアポリアの克服に成功したのであるろうか。評論家風というならば、こうしたアポリアの解決は、彼の意識にはのぼったこととはたしかだけれど、この「政治的同性の構造」では、その解決に成功してはいない。「以上の外にも、私の記述の方法上の問題はいくつも予想される。しかしこれとて、反面、アジテーターの行動過程にお

ける彼の内面の気づかしさを意味しているのだから、これからの記述の各段階で反省していくことにしよう。ともかく、いま批評したり感慨を書きつらねることなど問題じゃない。何かを手ずかみにして、何かをでっかあげるのだ」と自からをばげましていることからそれはみてとれることだ。

たしかに、彼は、「無関係な二者」を越える視座を確保せねばならないと、およびその方法はおぼろげながら解っていた。かなりの混乱をした文章であるので、全文引用するが、傍点のところから、彼がそのことに自覚的であったことはいくらかがえるだろう。

「……逆に通常のように人の社会的規定態と一定の協働様式が前提にされるならば、人は他者たちを媒介的にあらためて発見する必要などはない。他者は自分と同じ社会的様式(階級、身分等)のもとのに在るのか、それとも他人なのか弁別しうるだけである」

「一言でいえば、現実には社会的スタイルの等価交換などは成り立ってはいない。それゆえに既成の社会的諸形態の発生の秘密が露呈することをまねがれているのだ。」

だから政治の記述の上でも、反乱の行動に励起してきた民衆、プロレタリアートの登場をもってはじめて、人々の社会的スタイルの等価交換が三元的媒介関係としてスタートするのである。物化した社会的諸形態の秘密がその発生の根拠において露呈されるのもこのような記述によってであろう。つまり、彼は、「相互に無関係な二者」の克服には、すでに、われわれが明らかにしたように、「同じ社会的様式のもとに存在している二者」を登場させることによってしか克服できないことに気づいていたのである。しかしながら、叛乱論のモチーフ、

個の実践からの出発ということとこの新たな視座とは矛盾すること、新たな視座によって前者が批判的にこえられねばならぬことを、根底のところで行なおうとせず、二つのことを和解せよとした。方法論的にいえば、価値形態論をもとにして展開しようとする宇野経済学およびサルトルのブルジョア思想を克服しきれず、価値実体論の位相との関係で「資本論」をマルクス主義を考へてもみようともしなかったといえる。と、すれば、形態論の枠内で、そのことを解決しようとするならば、「貨幣」を持ち出すこと以外には手はなかったといえる。つまり、いうまでもなく、貨幣は、一般的等価物であり、「一商品は、他の商品が全面的に自分自分の価値をこの一商品で表わすのはじめて貨幣になるとは見えないで、逆にこの一商品が貨幣であるから、他の諸商品が一般的に自分たちの価値をこの一商品で表わすようにみえる。媒介する運動は、運動そのものの結果では消えてしまっただけで、なんの痕跡も残してはいない。諸商品は、なにもすることなしに、自分自身の完成した価値姿態を自分のもとに自分と並んで存在する一つの商品態として眼前に見出すのである。これらの物、金銀は、地の底から出てきたままで、同時にいっさいの人間労働の化身である」(「資本論」という貨幣の属性に目を奪われたのだ。長崎は、二者の相剋の弁証法を自からくずかごに投げ入れることによって、貨幣を持ち出し、貨幣ならば、「社会的諸関係」の総体を確保しているのだから、二者の不安定な弁証法からまねがれ得ると考えた。しかしながら、それは、なにごとくも解決しなければかりか、貨幣を持ち出すことによって、貨幣の背後に隠れている関係を陰蔽することにはかならないのはいうまでもない。マルクスのいう「貨幣物神の謎」の世界に入ってしまったの

だ。

したがって、かつて「叛乱論」で展開されていた間違いはあるが、資本主義社会への批判の視座、具体的有用労働によるところの抽象的人間労働批判という近代批判の視座さえ、こうした貨幣を中心とする「共同性論」では流し去られてしまい、もはや、「共同性の構造」では、なぜ叛乱が起きるのか？という問題を解明し得ぬことになってしまったのである。数百枚にのぼるこの論文に、さまざまな叛乱と革命家たちが、その例証として引きあいに出席するが、そのどこにも、叛乱の内的契機がみい出せないのはどうしたことだろう。われわれは、このことを彼の転向だという気はないが、そのことになぜ無自覚なのかと問うことは許されるだろう。彼は弁解している。

「私は反乱舞台で行動へ励起した民衆、すなわち共同の行動へと自己を投じた民衆個人を前提にして、私の記述をはじめた。いかえれば、民衆が社会的行動に立ち上がり、その内で他者とスタイルの相互交換がなりたつ一つの場面から出発した。……だから、人はなぜ日常の生活世界から反乱の舞台へと自己を投じるのかという問題は、依然として問題のままにとどまっている。この問題は、政治の問題としては、むしろ政治世界が十全に記述された後に、その帰結として考察されるべきものであろうが、政治的世界に限定しえない人間存在の広い問題分野にかかわってくるであろう。

ともかくもいま、政治的共同性の生成の鍵を握るものとして個的実践を否定的に確保し、この否定性の発展を追っていく以外にはない。その意味では逆に、私の記述は人間存在における政治世界の限定性をなお十分確立する段階に達していない、というべきであろう」

こうして、長崎は相い対自する二商品の葛藤にわかって貨幣を登場させる。

かつての「叛乱論」の立場、サルトルの立場への批判的視座を保持しつつ、「自他はいわばでくわしたという関係であり、共同の行動の内的関係は一つのアナキエでありカオスであるにとどまっている。だから瞬時に解体される可能性をつねにもっている。」と述べることから今度は開始される。いうまでもなく、叛乱論にあつては、このカオスは、「世界の無」へ向かつての永続運動として確保されるべきであったが、今やその自己批判として展開される「共同性の構造」では、もはや、そうした図式は清算されようとしている。「以上の『集団』の姿はいまや根本的に変化をとげようとしている」のだ。

どうやって変化は遂げられようとしているのか？

「私と他者たちとのさきのような関係はいまや転倒される。すなわち、私の行動スタイルの表現形態として意義をもつ他者たちすべの位置に一人の私が立ち、他のすべての他者たちがかつての私の位置に立つという逆の関係を想定しよう。そのとき私以外の他者たちの行動は一人の私のなま身の行為のうちからスタイルが表現されているのを見ることになる」。

「関係がこのように逆転されると、今や、他者たちの行動は「私の行動を媒介として相互に同等者として交通することができ」こうして、他者たちの共同行動内部は、もはや自他が偶然に出くわすというクラスタのカオスではなくなるというわけだ。したがって、長崎は、「他者たちによって他者たちから分立された一人の私に媒介された相互性が他者たちに成立することによってはじめて

アナキエな私たちの内面は一つの社会的関係によって結ばれた私の集団になる」とされるのである。

「相互の死」の追求という叛乱論のモチーフは、相互に他者たちに対する特権的第三者としてのA私Vを持ち出すことによって、「このプリミティブな次元で、私は私の集団の共同性を体現し主宰する者となる」ことができたわけだ。しかしいうまでもなく、「これはこの集団の成員たちの関係が私をその体現者として役割的に分立したからであり、私のこの位置から他者たち・成員が排除されている限りにおいて主起したことなのだ」。

「相互の死」の弁証法は、われわれが、先にのべたように、二商品の弁証法であり、使用価値と交換価値という商品の二要因の展開が、マルクスにあっては、「貨幣」へと推転させられて、資本制社会の動力ともいべき位置を担わされることになっているのだが、長崎の「共同性の構造」も、その前提として「叛乱論」をもっている以上この道を歩むことになるのは、いってみれば当然のことであった。たしかに、貨幣を登場させる事によって、「商品のプリミティブな対自という不安定な関係は「安定」させられるであろう。しかし、その「安定」は真の人間存在の共同性を開示する地平であろうか？

われわれは、マルクスとともに「否」と答えるほかあるまい。

「諸商品は貨幣によって通約可能になるのではない。逆である。すべての商品が価値として対象化された人間労働であり、したがって、それら自体として通約可能だからこそ、すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自の商品で共同に計ることができるのであり、また、そうすることによって、この独自の商品をも自分たちの共通

な価値尺度すなわち貨幣に転化させることができるのである。価値尺度の、すなわち労働時間の必然的な現象形態である」(『資本論』大月版・第一巻・一二五ページ)

「それ自体として通約可能」なのであり、「現象形態」の背後に存在するところの人間存在の本質的な「共同性」を示すことを抜きにしては、貨幣における「安定」はみせかけの安定であり、物象化された相そのものであることは自明なことだからだ。

たとえば長崎が、A言葉とスタイルVを持ち出して、「だから各人Aジッターたちは、この一つの社会的形態、一定のスタイルや言葉に、本源的に置き代えることができる。アジッターが一人の特定の人間であるというのには集団の社会的錯覚の結果であったが、これに反してアジッターにとってそのスタイルと言葉こそが本質的である」と述べることによって、共同の観念を持ち出そうと試みても、共同の観念そのもの、共同主観性そのものを歴史的に人間の存在被拘束性との関係でとらえるという視点を確立せぬかぎり、そうした、「共同の観念」そのものの正当性つまりは階級的基礎を立証できないのである。

そうであるが故に、長崎は、あらゆる政治的共同性を「神話」の問題としておしなべてみるという誤まりを犯さざるを得ないのだ。

「このように私の共同体は、かつておしなべておしなべて、たしかに経験された。そして私たちがとつてこの経験のめざましさを故に、集団の牧歌的神話が容易に生まれてくるのだ」「一人は万人のために、万人は一人のために」、「民主集中制と一枚岩の団結」、そして、「現代の奇蹟、それは諸君がわたくしを見出したことであり、わたくしが諸君を見出したことである(ヒットラー)等々」と。

ここで、ナチズムさえも、「共同性」という同じ概念でくくってしまったことのナンセンス性を批判することは簡単である。しかし、問題は、そうしたことでもって彼の「政治的共同性」がファシズムと野合してしまったなどという現象的なところで批判するつもりはさらさらない。問題は、そうしたことに帰結されざるを得ない「共同性の構造」の内的・思想的、方法論を克服することであるのだからである。

もちろん長崎も、われわれが△歴史の王役▽プロレタリアートとして語ってきたものとの関係なしで、この「共同性」を措定するつもりがなかったことは、さきにものべたように方法論的混乱を正面に押し出した方法論ノートの随所でみてとることができる。

たとえば、「私の記述の事実的前提は、行動に励起した民衆の自己規定の社会的混乱という事実である。そしてこれこそ、私が他のところ、でくりかえし強調したように、近代における大衆の叛乱ということであり、プロレタリアートの登場なのである」と語り、叛乱論のプロレタリアートを登場させようと試みている。しかしながら、叛乱論のプロレタリアートは、△無関係な二者▽の相剋によるところの△近代▽に対する永続的叛乱と結びついて提起した「プロレタリアートであって、そうした弁証法の否定としての「共同性の構造」によって、そのことを位置づけようがなかったことは、全篇にわたって、そうした「唯物史観」的位置づけがどこにおいても見い出されないことが示している。長崎は、そうした、自からの理論の危機にあたって、「人は現実の物象化された世界のもとにあつては、自己の発見が同時に同等者他者たちの発見であるという源初の歩みを歩むことはできない」という点は認めつつも、「唯物史観の歴史

すぎぬ以上、真の共同性の基礎を確立していないことはいうまでもない。したがって、それは、商品を生む商品としての位置を獲得せねばならないわけだからである。

かくして、叛乱は、叛乱からの飛躍をとげなければならぬ。ここで歴史が登場する。長崎はこの歴史を登場させるに際してレニンの次の言葉を引用する。

「歴史一般、とくに革命の歴史は、いちばんすぐれた政党や、いちばん進歩した階級のいちばん意識的な前衛が頭に描いているよりも、いつも豊富な内容を持ち、もっと多面的であり、もっといきいきとしており、もっと△悪賢い▽。これもまた全く当然のことである。というのは、このようないちばんすぐれた前衛は、何万人の人の意識、意志、情熱および空想を表現していたからであるし、一方革命というものは、あらゆる人間の能力がとくに高揚し緊張した瞬間に、ひじょうに激烈な階級闘争によって刺激されるような何百万人も人間の意識や意志や情熱や空想を表現するものだからである。」(レーニン)そして、このレーニンの言葉につづけていう。「私はこの『悪賢さ』を歴史の総括としてではなくいわば共時論的に記述しようとしているのだ」と述べたあとで次のように言っている。

「反乱世界におけるアジテーターの経験が、政治世界を形成していく道筋で遭遇する基本的な断絶と飛躍を示唆している。政治は、アジテーターにとってあたかも不意に横あいから登場する。」

「このように直接的には外部の空間・敵対者として反乱世界に外部から登場してくる歴史は、同時にこの世界自身をも歴史的に対目化せずにはおかない。反乱の共同性は歴史的な形成物として自己を相対化せねばならぬ。……こうしたことは、反乱世界が宇宙とし

記述がこうした物象化の世界をそれ自体としてどのように精緻に科学的に基礎づけたとしても、それ自体にはこの世界を撃つ内在的拠座を据えることができない(この点は後にたちもどることにしよう)と述べることによって、二つの地平の間をゆきつ、もどりつするのである。

(二)

つまり、すでにみてきたように、叛乱の形態論的展開という長崎のモチーフと、叛乱の歴史的・唯物論的性格の設定との隘路を、長崎は、「特権的第三者」||「貨幣」を持ち出すことによって止揚しようとしたところのジレンマだといつてよい。それは、より長崎の論理に即していえば、叛乱の出発点がブルジョアの個人であり、終結点が社会主義革命であるものとして革命をとらえようとしたジレンマだったといふことができる。したがって、長崎のいう叛乱者は、どこかで、社会主義主体へのりうつらねばならない。貨幣による対他―対自図式の止揚という道具立ては、実はそうしたトリックを、行うための無意識の道具立てだったのであろう。

より詳細にいえば、貨幣||特権的第三者を△共同の観念▽||△神話▽としてとらえこむことによって、叛乱の永続化、近代否定のどろどろめぐりを否定したかれは、次は△神話▽を現実化する作業に向かうことになる。なぜなら△神話▽が△神話▽であるかぎりには、ユートピアにすぎず、それは、物質基礎を獲得してはいないが故に、不安定であることは変わりがないからである。それは、いまなお商品であること、つまり、貨幣による商品の総括が、相対峙する諸商品の対自―対他関係の上に立った商品の否定であり、「総括」に

て自足しえぬことからくるいわば宿命である。」

ここでは、叛乱論における「叛乱の永続的展開」に対する「近代」からの反撃という「政治」のとらえ方と基本的には同じパターンで語られているが、基本的には同じ思想の表明であることはいうまでもないが、その差を捉えておくことは重要であろう。なぜなら「叛乱論」においては、無関係な二者の永続的相剋をくり返す位相であり、それ自身の存続を保証されていなかったが故に、△近代▽との対決は、△技術▽として党をいきなり登場させることにならざるを得なかったが、これに対して「共同性の構造」では、二者の相剋を暫定的に止揚するものとしての△私▽(貨幣)の存在が前提されているが故に、この△貨幣▽がいわば△資本▽として自己を定立するようにならざるからである。「反乱世界が宇宙として自足しえぬことから宿命」とは△貨幣▽の位相であり、「政治世界を形成していく道筋で遭遇する基本的な断絶と飛躍」とはいうまでもなく貨幣の資本への飛躍をさしていることを念頭におくことが必要であろう。

かくして、彼は「アジテーターが(同行者ではなく)敵対者との弁証法を通して自から固有な意味で政治的経験を開いていく場面」を問題とするに至るのである。

ここで自己権力の問題が登場してくるのはいうまでもない。「この闘争を通じてはじめて反乱世界は、異次元の世界の侵攻に対して自らを存続し、拡大するという課題を対目化するようになるのである。『存続し・拡大する』という課題は、本来反乱世界の時空構造には属さないことが十分注意されねばならない。」が、こうして異質の世界に対決の中から自からの世界が形成されるのだと述べてい

る。そしてその世界の内部には、否定する社会の反指定として、「その組織された闘争がその実力によってある領域の政治的権力を直接に奪取するとともに、これの持続と拡大とを内部における生活の組織化（「生活の生産」、その生産力としての権力）によってはたそうとする大衆機関」が生まれてくることになる。だが、この大衆権力、たとえばグラムシの労働者工場評議会や、ロシアにおける二重権力状態がこれであるといひ、その限界は、防衛的であり、それ故政治権力の問題を提起しえぬとして、「党」の問題の指定に行きつくのである。

われわれは、以上で、きわめて、簡単ではあるが、長崎浩の転開をそれ以前の「叛乱論」の立場との対比において粗描してきたが、再度それを要約すると、

①「無関係な二者」による相剋というサルトル—叛乱論的図式の欠陥を「共同主観性」の問題をとり入れつつ解決しようとした。

②だが、そのとり入れは、字野の原理論理解と同位相であるが故に、「形態論的」展開によって可能であるという前提を克服しきれず、それ故に「商品—貨幣—資本V」という展開によって、いわば、事後的に、「共同性」の位相を説明するという手法をとった。

③そしてまた「前衛党論V」の位相まで考慮に入れるならば、そうした資本の総括としての国家を党の位相にだぶらせることによって最終的には、党による権力の奪取によって、完全な意味での原初の「叛乱の共同性」が事後的に完成することになったといえるだろう。

ここで問題にされねばならぬのは、まずは原初における「叛乱」そのものである。つまり、われわれがすでに批判的に明らかにし、

てきたように、これでは、「原初」における叛乱の本質とその性格

が全く明らかにされていないということである。もっといえば、叛乱は、当初から「異質な世界V」の否定である以上、まずは、共同神話があった上で、敵の侵襲によって、自己の性格を次第に明らかにするといふようなものではない筈である。そうではなく、原初の反

乱の中に、すでに「主観」我々Vと「他者」彼らVとの本源的対立をはらむものでなくては、反乱そのものさへ、発生しようがない筈ではないか？（よし、原初の叛乱を叛乱論的に近代への叛乱といたしよ。その本質は、長崎もいふように絶えざる自己規定の否定なのだから、それは永続的カオスであって、貨幣という特権的第三者を指定すること自身、叛乱の否定であり、墮落であるのではないのか？商品—貨幣の二要因で示されている使用価値形成労働としての具体的有用労働の復現が貨幣という近代そのものの登場によって果されるわけはあり得ないことだ。と、すなわち「共同性の構造」における原初の反乱は、「叛乱論」における叛乱のようにその根拠を「近代への叛乱V」として持つことは許されない。したがって、長崎も

「叛乱」の根拠そのものを示すことができず、「叛乱はある」といふ前提からのみ出発せざるを得なくなっている。）問題はここにあるのだ。原初の叛乱を、資本制社会に対する労働者の自然発生的な反乱として示されぬかぎり、その自然発生的の内秘そのものの共同性の質—つまりは「万人の万人に対する闘争V」という資本制社会のイデオロギー（つまりはサルトルのいう相剋）に對立する（共同性）を指定することができないのである。過去の階級闘争をとってみてもこのことは明確である。ある一つの階級に對する闘争は、それに対立する階級のもつイデオロギーをもって武装されるわけで、

その歴史的發展過程に制約された「神話」を持つのであって、決して長崎のように超歴史的な「神話」一般を持つのではないのだ。

マルクスの発言を借りていふならば、「課題そのものは、その解決の物質的諸条件がすでに存在しているか、またはすくなくとも生まれつつある場合にだけ発生する」のだからだ。で、あるとするならば、超歴史的に「叛乱」を指定し、なおかつ、超歴史的に「叛乱の共同性」をみつけようという長崎の努力そのものはバンクセざるを得ない必然性を当初から宿していたし、強いて、それを完成させようとするれば、ブルジョア社会のイデオロギーになぞらえて、それを作ることによって、逆にブルジョア社会を超歴史化することに終わらざるを得なくなるのは自明であろう。

事実、長崎の「共同性の構造」—「前衛党論」をおしなべてみるならば、叛乱の自然性的性格を党が総括するという、言葉を変えていえば、商品—貨幣—資本という自然性的な生産関係を国家が総括するという、資本制社会の無政府性の反映でしかない革命論が登場することにならざるを得なかったのである。止木貞一が、「市民社会—国家の分裂が存在しているのだから、党—大衆の二分法は必然である」と語ったのはけだし名言である。資本制社会の無政府性、そのものの否定として登場してくるプロレタリアートの運動が、自然生動的であっていいわけではない。自然発生的なものを意識的なものへと置きかえていくのがプロレタリア革命であり、プロレタリアートの自然発生的の中には意識性の萌芽がすでに含まれているからこそ、レーニンが「自然発生的な意識性の萌芽である」と語れたのだし、（自然発生的な意識性の萌芽であるといふのは、どの階級についていえることではなくプロレタリア階級についてのいえること

とである）われわれは党の根拠を階級そのものに置くことができるのだ。

第一の決定的誤りは、「共同性の構造」の図式そのものであることは、したがって明らかであるが、それでは、「共同性の構造」において事後的ではあるが、二重権力、労働者評議会の問題を提出することによって、こうした意味でのプロレタリアートの世界観としての共同性の地平を長崎は、サルトル—叛乱論の相剋図式に對して突き出すことに成功しているだろうか？

われわれはここでも（NON）と答えないわけにはいかない。なぜなら、ここでも、無関係な二者の相剋の止揚という課題が、叛乱に對する外部からの侵襲に對しての消極的モメントとしてしか語られていず、叛乱そのものの本性、つまりは労働者階級そのもののイデオロギーとしてとらえられていないからである。したがって、叛乱が、もつ「共同の観念」そのものの物質的基礎との関係で二重権力ないし、大衆の自己権力が位置づけられることがないため、それは、たかだか、侵襲する世界に對する反指定でしかなく、限られた領域での大衆の自然発生的な「生活の生産」としてしか位置づけられることしかできないからである。つまり、二重権力論、大衆の自己権力論それ自体の批判は別のところで行っているからここでは触れないとしても、それは、プロレタリアートの叛乱であるのか、農民の叛乱なのか、ブルジョアジエの叛乱なのかによって規定されるそれぞれに独自の「生活の生産」を提起せずして叛乱の永続性、いふなら安定を獲得しようとしたために、「大衆の自己権力」が抽象的一般的したがって架空の観念的ものにならざるを得なくなってしまうといえる。叛乱が誰に對して叛乱なのか、叛乱の根拠その

ものを問えなかつた必然的結果なのである。

よし、百歩譲って長崎が二重権力、労働者評議会を持ち出すのだからこの叛乱がプロレタリアートの叛乱であつたとしよう。とする、すでにわれわれが前章で触れたように、プロレタリアートの叛乱ならば、必然的に、生産手段の私的所有に敵対し、それを社会的所有に、生産の無政府性に対しては計画的生産を、そしてイデオロギイ的に普遍化していえば、互いに無関係な他者として向きあう資本制イデオロギイに対して、労働実践における協業を基礎とした共同存在としての人類を実現しようとするはずである。たとするならば、どうして、こうしたプロレタリアートの「生活の生産」が、全世界的に存在しているブルジョアの生産関係に対して無関心でいられよう。なぜなら論理的にいつて全世界は商品交換を媒介として一つの世界へと結合している以上、極地的・部分的なものとしてプロレタリアートの叛乱はとどまり得ないことは自明ではないのか？プロレタリアートの叛乱がそのように拡大しえないとするのは、長崎が、叛乱そのものを永続的に深化させようと考えず、大衆の自然発生性にあらかじめ枠を設けているためではないのか？、党など存在しなくても、プロレタリアートは国家権力を恐らく握るだろうし、逆に「固有の党」なぞ前提にしなくても、プロレタリアートは自から党を打ちたてるだろう。——おそらく、このようにいうことが出来るし、これこそが、歴史的にいつて、党さえもプロレタリア階級の一部であるという命題のもとで、示され得るプロレタリア叛乱の全部なのだ。(歴史を永い射程でとつてのことだが)

では、長崎の叛乱は、その中途で、叛乱であることを止めてしまったのだろうか？答えは簡単である。叛乱論の叛乱やサルトルの集

ルで記したいわゆる「三名連記」論文に対して、長崎は「社会的生産論は、前衛党論では問題にならない。それは、政治的共同性の構造——Ⅱにおいて数倍のスペースを割いて展開しているはずである」といつてすませているが、最早、そうした言い逃がはできないことはいくらでもないことであろう。

すでにみてきたように、彼のモチーフ、そのものが「破産」しているものである以上、今やその部分的手直しや、弁解をいくら多言してもすむことはない。問われているのは、そうした「学的」「技術的」テクニクで処理しきれぬ次元のことではない。長崎自身自身の階級的・思想的な総括が問われねばならないはいくらでもない。

第五章 おわりに——全総——全総路線を更に前進させるために

われわれは、前章までで、マルクスの世界観に對比しつつ、宇野とサルトルの批判を媒介にして、長崎叛乱論の世界の根底からの批判を行ってきた。そして、われわれは、そうした批判を媒介にして、プロレタリアートの哲学と、プロレタリアートのみが、変革の主体であることを明らかにしてきたといえる。いくらまでもなく、こうしたわれわれのマルクス主義の理解の深化、および、その血肉化は、一全総、そして、二全総以来の「綱領—組織—戦術」の全面的展開によつて獲得されてきた地平、その階級的実践の成果であるといつてよい。われわれが、旧再建準備委PB多数派(同盟少数派)との分岐に際して、われわれが、彼らに對置したいくつかの命題・論点、またそれ以後の我々の党的—階級的な実践、は、必然的に、そうした

団のようにそれが挫折を宿命づけられていた叛乱だったのか、さもなければ、現実の力関係が、そこまで到達できなかったからに過ぎない。つまり長崎とは逆にプロレタリア叛乱はプロレタリア叛乱として純化できなかったからに他ならないのだ。

したがって、プロレタリア大衆が二重権力を作つて、党が出てきて、はじめてプロレタリア権力が樹立されるなどというのは真赤な嘘もいとところなのだ。つまり、それは一方では、プロレタリア大衆の叛乱を、プロレタリア大衆は権力を組織する能力がないとする点で過少評価であり、また一方では、プロレタリア大衆は、党と結合することなく二重権力までは自然発生的に組織するといふ点で大衆の自然発生性の過大評価でもあるのである。つまり総てにいえばプロレタリアートそのものに対する蔑視と、その本能の全面開花を抑制する議論でしかないのだ。

こうして、長崎は、また、彼の図式における貨幣—資本への転化の個所で、見事な挫折を遂げている。叛乱における共同性を指定することにものみごとく失敗しているのである。こうした長崎の再度の挫折の真因はすでに明らかだ。つまり、共同性の問題を、ブルジョアの社会に対するプロレタリアートの思想の問題として措定しなすことがなく、したがって、資本論における価値の展開の意味を考慮することがなく、広松渉の「共同主観性」の問題提起の意味を深くつきとめることもせずして、安易にその字すら受け入れ、「商品」がダメなら「貨幣」があるさ式に問題の本質を考へることなく「叛乱論」の手直しに向かつたがためだったのである。

と、すれば、一年前にわれわれが、「党—大政同論における組織論の欠落」—「ブント四年間の総括と長崎理論の功罪」というタイト

た命題と基本思想の深化へと向かわざるを得なかつたし、そうした深化をより徹底し、世界観の次元にまで至る綱領的深化を当然のことながら要求した。それは、われわれに、私党—大政同論の批判のみならず、長崎の思想を根底から支えている「叛乱論」の根底的解体を必然化させるに至つたといえる。

ここで、われわれは、現在、再び、われわれが、彼らに對置したいくつかの命題、及びわれわれが獲得してきた思想性そのものを、逆に、叛乱論批判によつて獲得した地平から再措定しなおし、われわれの立場をより深化させておく必要があるだろう。われわれは、ここで、そのことを、いくつかの問題に分けつつ展開することにした。その主要な点を挙げれば次の三点に集約することができる。

- (1) 階級対立に基礎を置く党—党の根拠
- (2) レーニン党と私党—大政同論と労政同
- (3) 過渡期世界論の意味と資本主義批判と宇野経済学

(一)

(1) 周知のようにわれわれは、旧再建準備委員会多数派の私党—大政同論に私党の根拠を對置した。たとえば、一全総報告は次のように述べている。

「エンゲルスがイギリスで目撃したように、鎖より他には失うべきものを何も持たないプロレタリアート」と、生産手段の私的所有者としてのブルジョアジー—この二つの階級の存在を前提として対立を考へねばならない。……そのときはじめて前衛党の位置と革命を把握することができる。つまりプロレタリアートは工場内における部分的存在としてでもまた、市民としての擬制においてでもな

一個の全体Vとして把握される。つまり生産手段から切り離され、それ故に生活の手段を奪われ、生産の手段を所有する他のあらゆる階級から軽蔑されおとしめられた存在としての自己として存在しているわけで、ここから反抗の原初的形態としてのあらゆる犯罪が発生するし、その反抗は意識的形態をとるわけである。レーニンのいう政治的反抗や噴激がそれであり、レーニンはそこに党の根拠を置いている。」とのべた後で「ところでこのような党の根拠と綱領が現実の叛乱の中にその根をもつことはない。いかに物象化された相における叛乱であれ、その叛乱が資本の秩序そのものからドロップアウトまで進展するや否やA無規定な私etc Vそれは生活手段から切り離された自己を意識するわけで、それをわれわれはプロレタリアートだと言ってきたし、そこにわれわれは党の究極の根拠を求めるわけである」。

ここで表現されていることは、体制内化した現実の労働者が如何にして階級意識を獲得していくのかといったA過程Vが問題なのではなく、また、そうした位相から出発することではなく、いわば、労働者と私的生産所有者の原理的な対決そのものに党の根拠をすえようという試みであったということができるだろう。しかし、こういったことからいって労働者の改良闘争を切捨て捨てるわけではない。労働者の改良闘争が「労働力商品」のより高いより有利な売却を目的とする闘争であったとしても、その闘争自体の中に「生産手段の私的所有」と無産者という関係性もそれは内在しており、そうした現実の闘いの中で、党もそのことをより明確にしていくものだからである。こうした発想の正しさは、また、われわれが一全総以降、より拡大し、深化してきた出発点であったし、その正当性は、今日

論をはらみ得よう筈はなく、また、党も、そうした永続的叛乱を本質的にはA綱領Vとしている近代社会との関係性におけるA技術者Vでしかない以上、A叛乱Vと同断である。したがって、こうしたA叛乱V概念の根底的解体を抜きにしては、本質的にいって、「権力打倒」の問題と「社会主義」の問題を結合させることができなはいはいうまでもないことだったといえる。

もちろん、そうだからといって、一全総が完全にそうした問題に無自覚だったわけではない。こうしたプロレタリアートの存在の前提にはいりまでもなく、様々な階級闘争と社会関係の全歴史が存在しているのだから、唯物史観が資本論への導きの糸である所以もここに存在する」と述べ、また、長崎的用語を用いていたとはいえ、「前衛党は大衆叛乱のダイナミズムとその根拠（プロレタリアートとブルジョアジーの対立）を自己のものとしているが故に、大衆叛乱がどこに向かつて組織されるべきかを知っており（綱領的認識）もしくは党の公的性格）、したがってその認識と経験とを媒介として「戦術」を主要な武器として大衆に接する。…党が大衆と戦術を媒介として接するということは、この綱領と党の内的（公的）規準に照らして、党内討論の組織化を通して行なわれ、その結果の総括も党内の組織化＝党綱領の深化という形で進行すべき性質のものである」といっていることは、極めて、観念的—一般的ではあれ、そのことを自覚はしていたことを示しているといえる。

われわれは、現在、叛乱論の内的解体をマルクス主義の復権をもってやり抜いたことよってAプロレタリアートの権力打倒闘争VとA社会主義の建設Vという二つの問題を一個同一のものとしてプロレタリア独裁の内実の問題として提起しうる地平をようやく開示

の時点からみても防衛し、継承し、深化されねばならないのはいうまでもない。しかしながら、対目的に把え返されねばならないのは、「長崎が大衆の叛乱の現実性に依拠し、その叛乱を革命へ結合するものとして大政同略を立てようとしたことは評価されねばならないし、そのことは継承し深化されねばならない」と述べている点や、また、「大衆叛乱が大衆叛乱として純化できない問題として現実に権力との関係の問題が存在しているわけであり、この問題故にこそ党独自の任務がでてくる」と述べている点にあるといえる。

もちろんそれは、一方では、「長崎においては前にのべたように叛乱の深化が、叛乱の深化一般としてしか立てられていないが故にその内実も規準も提起し得ない」「その意味でわれわれは従来の叛乱主体の立場からの情勢—戦略をさらに一步飛躍させ、叛乱大衆の中に存在するプロレタリア独裁の萌芽を如何に組織するのかのただ一点から戦略を論じなければならぬ」とも語られているが、問題の所在は、端的にいえば、長崎のいうA近代への叛乱Vを根底的なところで解体しつくしていなかったが故に、A叛乱VにAプロレタリアートV対AブルジョアジーVの対立という原則的図式を持ちこむことよってA叛乱V概念を換骨奪胎しようとしていた点にあったといえるだろう。

その地平からでは、ブルジョアジーとプロレタリアートの存在としての対決という問題と、プロレタリア独裁—社会主義の組織化という問題とが、各個バラバラな命題としてしか、つまりは、権力の打倒と社会主義の建設が切りはなされてしか存在していなかったといっただろう。すでにのべてきたように長崎叛乱論の構図は、「叛乱の永続的展開」のみを問題としているのでそこには社会主義

しえたといっただろう。われわれは、プロレタリアートとブルジョアジーの対立を（生産手段の私的所有）対（生産手段を奪われた者＝無産者）の対立としてとらえてきたが、（生産手段の私的所有）の廃絶を課題とするならば、それは、必然的に、全社会の生産構造の（私的社會性）そのものを人間による意識的な計画化された社会に置き換えるを得ないのは自明なことである。そして、またそれは「互いに無関係な他者」としてむかい合う資本制社会を、「互いに協働し合うわれわれ」の社会として置換せねばならないことになるわけで、資本制社会にあつては、生産手段の私的所有者の指揮によって行なわれている「協業」—したがって協業そのものが協業として労働者個人に意識させられないで、単に労働力の資本家による強制的消費としてしか映じないような協業—を全人類の分岐としての協働に置き換えていくというA全人類の協働Vを主体とした社会の建設に向かうことになるであろう。

※ マルクスの時代とちがって、工場内協業の在り方が、大きく変っている点について注目すべきである。工場内部での分業の多角化、資本の高度化にもとづく、労働者の差別・分断の問題あるいは、協業を資本家側が積極的にとりいれたヒューマンレーション・管理社会化等々の現代の資本の支配様式の変化について、われわれは、押さえておく必要がある。しかしながらそうした協働（役割、役割—思想）はあくまでもプロレタリアートの本性を私的所有にからめとるための協働であり、そのイデオロギーである以上、真のプロレタリアートの協働とは無縁である。そうしたブルジョアジーによる工場支配とそのイデオロギーである協業の破壊の上にか建設されえないのであり、プロ

レタリアートの協働は原理上からいっても資本の無政府性そのものの止揚である以上、全世界的な協働である点を明確にすべきであろう。したがって、プロレタリア革命は世界的でなければならぬのであることはいうまでもない。(世界革命と一国革命の関連については別稿)

また、われわれは、この論文の第一章で生産力とは生産関係であり、かつまた、生産関係とは労働者を資本の関係(闘争と協同を含む)によって規定されていることを視座的に語ってきたが、労働者の体制内化は資本の蓄積に対応する労働者の階層と相関関係であり、それは、世界的なプロレタリアートとブルジョアジーの力関係、つまりはその闘争の全歴史によって規定されていると考える。われわれは、こうした視座に立脚しつつ、過渡期世界論を明らかにするであろう。

したがって、こうしたイデオロギーは、生産手段の私的所有者に対立している(生産手段を有さないもの「無産者」としての労働者のイデオロギーであり、われわれの党は、そうした対立そのものに立脚した党であるのだ。だから、それは人間の自然発生的な分業の止揚、全人類の協働Vの意識的、計画的な推進を自己の課題とする共産主義思想によって武装され、プロレタリアートのさまざまな部分的叛乱を、本質的な叛乱へと組織していくことを任務にするわけ、プロレタリアートと一体のものであることはいうまでもない。しかも唯物史的にいうならば、そうしたプロレタリアートの思想自身、歴史的にプロレタリアートの闘争を媒介として形成されてき

したがって、われわれはそうした唯物史的に定位されるところのプロ独の内実と、現実の党の意識性、計画的な根底において相通ずるとはいえ、そこからただちに、党の計画的意識性を位置づけなくてはならないとはいえない。

レーニンは、「大衆的な自然発生的な労働運動がおこってくれば、土地と自由派がもっていたのと同じようになすくれた革命家の組織、いなくともものにならないほどさらにすぐれた革命家の組織をつくりだす義務をわれわれに免除してくれるかのように考える意見は、マルクス主義の上にもない無理解(あるいはマルクス主義の「ストルーヴェ主義的」な「理解」)からしか生まれなかったのである。事実反対に、この運動はまさにこの義務を負わせるのだ。なぜなら、プロレタリアートの自然発生的な闘争は、強固な革命家の組織と結合されない間は、プロレタリアートの真の「階級闘争」にはならないからである。」とのべている。

だが、しかし、このことは、あくまでも専制ロシアの国家権力の打倒ということを射呈に入れた上での発言であって、プロ独の内実規定からストレートに指定されたものではないことは十分に注意されねばならない。比喩的にいうならば、プロ独の問題と党の問題、現実の国家権力の打倒の問題は、クラウゼヴィツがいうところの「戦争」と「政治」の弁証法的関係と相似である。つまり、戦争は政治によって規定されているとはいえず、戦争は政治とは切り離された独自の概念を構成するからである。

われわれは、こうしたプロレタリア革命そのものの内実、プロレタリア独裁の内実を押さえつつ、レーニンがそうしたことを踏まえた上で、専制政府の打倒というただ一点に問題をしぼり党の陣型を

たものである。(したがって、われわれの党存在自体がそうした闘争の全歴史的過程に規定されているのである。)こうした視点に立つならば、レーニンのいう「自然発生的な意識性の萌芽」という思想はあくまでもプロレタリアートの自然発生的性をさしていることは自明であろうし、かつまた、社会主義的意識は、「外部」から持ちこまねばならないという意味(中央集権化された意識的、計画的な関係ということと同時に、現実のプロレタリアートは様々のブルジョア思想の影響化にあるという意味)は明らかになるであろう。「自然発生的な意識性の問題は沖田論文にふれられているのでここで詳しくは展開しない」

したがって、われわれは、党と階級を一体的な存在として思考しつつ、かつまた党を独自の存在として定立させねばならないのである。

しかしながら、われわれは、こうしたプロレタリア独裁そのものを自らの綱領とするが、そこからストレートに党を規定するの、また、間違いであるといわねばならぬだろう。なぜなら、プロレタリアートの歴史的事業であるところの意識的・計画的な全世界の生産という課題は、ブルジョアジーとブルジョア国家権力の打倒を抜きにして存在しないし、そのことへ向けて日夜、闘われている全世界の人民の闘争とその前衛的諸分子の意識的・計画的歴史的営為自体そのものが、そうしたプロレタリアの協働を「序々に、あるいは、急速に」歴史の表面に登場させるものであるに過ぎないからである。

提起した点に学び現実の国家権力打倒へと向かわねばならない。したがって、こうした内実の押さえ込みがストレートに「プロ独」一党独裁を意味するものではないことはいうまでもないであろう。いうまでもなく、すでにみてきたように、現実のプロレタリアートは、資本主義的生産関係の中に均質な存在としてではなく、さまざまな階層に分解されて存在しており、それぞれの固有の意識を形成しており、また農民層、小ブル層の存在下において、権力の打倒過程自体がさまざまな統一戦線の必然性を内在しており、さまざまな階級基礎を有する諸勢力の闘いをつつみこみつつプロ独の内実そのものがそうした実践過程に媒介されつつ形成されていくことはいうまでもない。

したがってそれは、長崎と遠方派の主張とは全く別であるといっでよい。すでにみてきたように、長崎は、プロレタリア革命のなんたるかを理解せず、プロレタリアートの自然発生的性を理解せず、大衆叛乱が叛乱それ自身として自己権力を作り出すという妄想から、しかも、その自己権力がプロレタリアートのそれならば自然発生的に生まれるや否や、意識的・計画的なものに転化せざるを得ないという必然性を理解せず、また様々な諸階級の階級基礎を均一化してとらえ、その上で党を「戦術」として持ち出すことによって革命を考えているが、こうした叛乱は、一八七九年のバリでみられることであってもプロレタリア革命とは縁もゆかりもないものだ。長崎の図式は、したがって、ブルジョア革命には通用する図式ではあっても、プロレタリア革命には通用する代物ではない。いみじくも長崎が、叛乱の原型として描いている素材が、一八七九年のフランス革命や、六〇年安保闘争や、秩父困民党等々であることは、そ

れを象徴している。そして、またロシア革命の描写に際して彼が引用している数々のことが、彼の叛乱とは遠いことを証明していることと彼はなぜ気づかないのか。

たとえジョン・リードの「ただ二つの階級だけが。で一方の側にいないものだれもみんな別の側にいるわけなんだ……。」というロシア革命における一労働者のこのようなことを引用しているが、こうした発言をする叛乱者がどうしてブルジョア権力を打倒するところまでいきつかないで、「叛乱」の自己限定をするというのだからか？

すでに、みてきたように長崎の図式は、図式そのものとして、商品―貨幣―資本と国家図式の革命論への適用であるが故にブルジョアの無政府性を反映した革命論にならざるを得なかったが、また、その内容に即していても、ブルジョア革命やそれ以前の叛乱にはあてはまるが、プロレタリア革命には、全くといってよいほど無縁なのである。形式は内容と相即である。

そして、今、そうしたブルジョア革命観が現代において適用させようとするならファシズム運動にならざるを得ないという宿命を長崎の主観的善意にもかかわらずもっているというところは、遠方派の現実の政治行動が示すところであろう。われわれは、第二、第三の遠方派―ファシズム運動の萌芽と対決しぬき、 \wedge 党―労働同 \vee と大衆斗争機関としての労働委―都学活の陣型を強化し拡大せねばならぬ。

(三)

(1)われわれは、以上のようなプロレタリアートの世界観・革命観

下によってのみなのである。そのことは、なにを示すのかというならば、こうしたプロレタリアートの世界観と社会主義の具体的建設のみが、過去におけるさまざまな階級斗争を止揚し、包摂することができる唯一の世界観であることを示しているのだ。

たしかに、現在、先にも述べたように資本主義本国におけるプロレタリアートは体制内化し、後進国の人民の闘いが鋭く闘われ、資本主義批判を資本主義批判として原理的に行うのは、つまりプロレタリアートの闘いとしてまずもって問題を立てるのはナンセンスであり、差別と被差別の問題として立てるべきだという傾向、第三世界のみ革命の主体を求めべきだといった傾向が強まってきている。しかしながらいまでもなく、そうした諸闘争、および、諸運動そのものに基準を与えるのは全世界のプロレタリアートそのものとその思想に基づく社会主義の建設にあることはすでにみたように明白なことであろう。したがって、われわれは、まずもってプロレタリアートの世界観によって自らを武装し、党建設と階級形成を同時に遂行せねばならぬのである。

(2)第二次プロレタリアートの断末魔で発見しようとしたのは、こうした思想性そのものであった。つまり、世界を資本主義の運動としてのみみようとせず、資本主義の運動そのものさえも、プロレタリアートの闘いの主体的把握の上に見ようとした立場への転換が、第二次プロレタリアートの分裂には秘められていたといつてよい。八・三論文は様々不十分性を秘めている（これに対する評価と批判は別に行うので、ここでは、八・三論文が切り開こうとした地平のみを指摘するにとどめるが）、たとえば、次のようにいつている。

「ロシア革命の成立以降、更に第二次帝国主義戦争を経ての中国

に立脚することによって、過渡期世界における諸現実を認識する基礎が与えられると考える。たとえば、後進植民地国における闘争が、民族解放社会主義として、あるいは、中国革命は、人民民主主義革命として開始され社会主義へと転化しようとしている事実の基礎づけは与え得るだろう。

メンシェヴィキのマルクス主義の理解、あるいは日共的二段階革命論でいうならば、民族解放斗争は社会主義に直結しようはずがなく、ブルジョア革命をまず行なってプロレタリア革命へ進行すると考えられている。ところが、そうではない歴史的事実が進行しているし、マルクスやレーニンはそのように公式的には考えていなかったのは、今日では常識に属しているが、それは、資本主義は世界的だから云々という従来の宇野派の位相や日本のトロツキズムの位相ですまされる問題ではない。それは、二つのことを意味している。つまり、全世界的にみて、資本主義そのものを越える、社会主義建設が可能な生産関係と生産力を資本主義が発展させてきたという事実とプロレタリアートと全世界的闘争、歴史的・現在の存在とその理論の発展が存在しているということの二つのことに規定されているということである。

長崎とは逆に、太平天国の乱がなぜ失敗し毛沢東による中国革命が成功しようとしているのかという問題が、問題は叛乱一般ではなく、その叛乱の指導部の思想性と、その叛乱が置かれていた歴史的諸関係のもとでのみ考察されねばならないことを示している。民族解放闘争が勝利し、社会主義革命に向かい得るのは、唯物史観と資本主義批判に支えられたプロレタリアートの世界観とその闘争の存在およびそのことが可能になるような全世界的な資本主義の発展の

をはじめとする諸労働者国家群を媒介に各国労働者階級は自然発生的・即自的あるいは歪曲されながらも、疎外されながらも世界的に結合され、世界プロレタリアートに転化した。その結果「帝国主義は階級対立を国家間対立として統一することが困難になりつつあり」したがって「明らかにロシア革命以降、第二次大戦を経て本格的に以前のブルジョアジーの攻勢プロレタリアートの防衛の関係が逆転しプロレタリアートが攻勢に展開する力を保持したことを意味する」と「攻撃型階級斗争」を位置づけている。

われわれは、ここで述べられている内容そのものはさておき、こうした視点、つまり、ブルジョアジーとプロレタリアートの対立として情勢を評価しようとした点にこの論文の決定的意義を認める。それは、宇野的資本論理解を越えた唯物史観と階級斗争に基づく資本主義批判の萌芽を有していたからである。

(3)われわれが、沖繩斗争、部落解放斗争の分野で、われわれのこうした立場を鮮明にさせつつつとつとつしているのは周知のことだ。それは遠方派のごとく、これらの斗争を歴史的・階級の基礎との関連のみよるとせず、「弱者」あるいは大政同の問題としてのみとらえようとする没階級の視点とも、また新左翼諸派に横行する「民族的責任論」ともまた別な視点としてわれわれは提示している。そしてまた帝国主義を打倒すれば差別問題が解決するといった視点とも無縁である。たとえば遊撃八号は部落問題について次のようにいつている。

「もちろん、このことは、被差別部落民や、在日朝鮮人自身による独自の闘争を否定することではない。逆である。いりまでもなく、それらの闘いは、歴史的にみても資本主義のみが生み出した矛盾に

のみ根拠を有しているのではなく、言葉の広い意味では「総ての歴史は階級闘争の歴史である」という意味において、独自の領域を形成する歴史的な階級闘争であることは否定すべくもない。問題は、そうした歴史的な階級闘争と「最後の階級社会」＝資本制社会を止揚する階級闘争との関連であるのだ。マルクスは「失うべきものはない」プロレタリアートにそうした過去の一切の階級闘争の決着をつけるべき歴史的な性格を発見した。決してマルクスは、資本に、ブルジョア民主主義にそうした歴史的階級闘争の決着をまかせたのではない。たしかに、歴史的なある時期においては、ブルジョアジーは、そうした進歩的な役割を果たしたことはある。だが、それは資本の本性などではないのだ。資本は、その時々、力関係の上で封建的勢力とも妥協するし、ブルジョア革命に反対しさえする（メンシエヴィキとボルシエヴィキの論争）だが宇野理論やそれに追随する諸党は、そうしたものとして資本とプロレタリアートをとらえようとはしないで、「原理的」には資本によってそのことが「解決」されるといい、そうではない場合を「後進性」ということでもってくくってしまう。したがってその結果、悪の根源が、日本帝国主义の後進性に求められ、帝国主义を「打倒」すれば、差別が即自的に解消するようなアジェンションを行うことになるが、決してそうではない。問題は、帝国主义の「打倒」のみにあるのではなく、社会主義を形成する主体の問題であるのである。」

追記

価値形態論と実体論との関係を方法的な軸に据え、長崎叛乱論

より具体的にいうならば、われわれ、共産主義者同盟の存在自身が、戦後のスターリン批判＝反スタ主義（初期マルクスの受容）という歴史的過程を経て生み出されたものであり、そうした反スターリン主義が、一定の階級基礎（プロレタリア人民）に対する影響を与えつつ、そうした階級基礎との関連でわれわれ自身が生み出され、「形成され」＝「形成していく」のである以上、そうした歴史的過程の総体を、プロレタリアートの階級形成としてとらえることが要求されているといってよい。

もちろん、そうした作業の必要性については、本論文は、視座的にはそのことをさし示してきたが、（労働力商品化論に対する批判の視座等）そのことを歴史的・実践的総括として本論文においては、描くことができなかつたことは断わるまでもないであろう。そうした意味から把え直すならば、第一章の「第一次ブント総括」とも受けとられる章の不十分性は、覆うべくもないことであろう。そうした意味で、党も、歴史的存在被拘束性をなお逃れるものでないし、これからもそうである以上、われわれは、一つ一つの「党の決定」とその「実践」自身が、党をそうした階級基礎と綱領的視座との関連において形成されていくその営為のあり方自身において考えているのは了解されるであろう。

また、この論文において不十分にしか触れられなかつた他の一つの問題は、プロレタリアートの原則的位相の問題と日常的闘争との関連の問題である。より鮮明にいうなら、生産手段の私的所有の廃絶という問題とブルジョアジーの搾取——いわゆる剰余価値の問題に關してである。マルクスの資本論においては、この点の関連が、第一巻第三章以降において明らかにされているが、この論文において

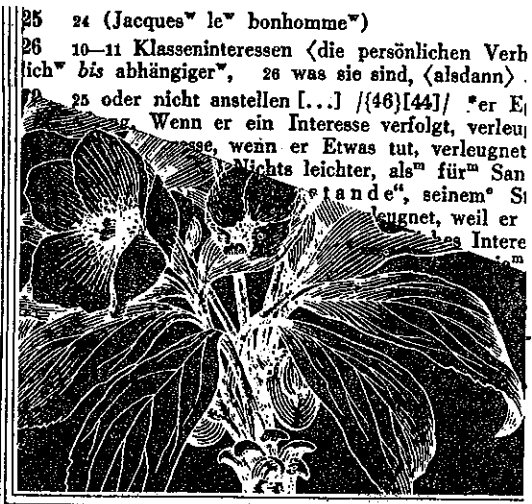
—政治的共同性の構造—前衛党論を、宇野経済学批判、サルトル批判の關係性において明らかにしてきたが、多くの不十分性をともなわざるを得なかつたのはことわるまでもないであろう。なかでも誤解される危険性は、ここで語られていることが、唯物史観との關係性で語られていることを忘却するときに生まれるという断つておきたい。たとえば、プロレタリアートのイデオロギーとして定位置した協働に基づく、全世界の生産の計画性、人間の共同性ということからしても、これは、なにかしら、「プロレタリアートの思想なるもの」「共同性なるもの」があらかじめ存在し、それに近づくものとして我々の営為があるとすれば、再び、物象化の位相にたちまちして陥入ることになるのはいうまでもないであろう。そうではなく、そうした「共同性」自身は、歴史の過去、未来にわたるプロレタリアートの闘争と前衛党との弁証法において、歴史的に形成されていくものでしかないということである。レーニンが、「民主主義以上のあるもの」（沖田論文参照）としかいわなかつたのは、そうした物化の危険性に対してだったことは肝に銘ぜねばならない。したがって、プロレタリアートの共同性が、党において体現されているなどと考えるのは、さげすまれたことであることはいうまでもない（黒田寛一等の組織論）が、党は過去のプロレタリアートの全闘争の歴史に規定された存在である——とわれわれがいうのはこのためである。

問題にされねばならないのは、したがって「歴史」である。プロレタリアートの諸実践との関連で、共産主義思想の形成を位置づけつつ、われわれの存在を自身を、歴史的存在として「形成され」＝「形成していく」存在として把えていく視座が要求されているのだ。

て確立した視座からその問題を明らかにするのは、われわれがそのことを日々の諸活動においてすでに実践的に解決しつつあるとはいえ、そのことをより理論的に明らかにするのは別稿を待たねばならない。

その他にも不十分な点が多いが、その点はボルシエヴィキ創刊号における諸論文とともにより完全なものとして、革命的同志諸君、諸者諸氏にお送りすることを約束して筆を置くこととしたい。

一九七五年七月



ホルンエウイキ創刊準備号

一九七五年七月二〇日 第一版

一九七六年六月二五日 改訂第二版

発行編集者 共産主義者同盟中央委員会

発行所 游撃社

連絡先 東京都世田谷区千歳郵便局私

書箱四号

振替 東京〇一―一九五七八三

定価四八〇円（送料一五〇円）

游撃

マルクス・レーニン主義に貫かれた革命的労働者学生の鋭利な政治的武器！ 革命党と階級、人民の直接的紐帯！ 帝国主義心臓部へ向けた総蜂起を組織する宣伝・煽動の指針！ 共産主義者同盟政治機関紙「游撃」を読もう！

毎月一回五日発行！

年間（一二部）予約購読料二五〇〇円

定価一部一〇〇円

ボルシェヴィキ創刊号

絶賛発売中！

政治報告

マルクス・レーニン主義の革命党建設へ更に前進せよ！
「遠方派」の放逐と我々の到達段階

共産主義者同盟中央委員会

第一部 綱領思想と資本主義・帝国主義批判
資本主義批判・帝国主義批判と唯物史観
国際共産主義運動総括（Ⅰ）

山下 誠
沖田友士

第二部 過渡期世界の階級闘争とプロレタリアート
日本資本主義における天皇制権力と
プロレタリアートの権力問題

山下 誠

過渡期世界の革命戦争と軍業—武装問題の基本的視座
一条論文天衆的武装闘争の戦略問題の根底的止揚
共産主義者の労働者運動に対する組織と戦術

沖田友士
郷原 峻

第三部 侵略反革命、差別分断支配に抗するプロレタリア

の諸任務—綱領の実践的分野における諸問題 Ⅰ
共産主義運動の大道を進み沖繩解放闘争の
巨大な地歩を獲得せよ

狭山上告審闘争に完全勝利し、共産主義運動と
部落解放闘争の革命的結合を勝ちとれ

共産主義運動と結合した女性解放運動の確立と
深化発展にむけて

第四部 侵略反革命、権力再編に抗するプロレタリアート
の諸任務—綱領の実践的分野における諸問題 Ⅱ

破防法体制粉碎に向け反弾圧戦線の更なる強化を
プロレタリア陣型としてかちとれ

生協戦線における階級闘争の原則とその陣型構築
の論理と実践—地域住民運動と生協運動総括

学生戦線に党の陣型を強固に打ち固めよ！
大政同論の止揚と反帝戦略主義の学生戦線における克服

共産主義革命戦線
学生委員会
林 駿介
櫻田 潤

定価 一五〇〇円

A5判 四〇八頁

申し込み先 游撃社

東京都世田谷区千歳郵便局私書箱第四号
振替 東京〇一九五七八三